「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」のフォローアップ調査

平成15年11月

財団法人シニアプラン開発機構

ごあいさつ

定年退職後の長い期間を「いかに生きがいをもち、精神的に豊かに生活するか」ということが、現代サラリーマンの重要な課題になっており、活力ある高齢社会を実現していくためにも、定年移行期の人々が生きがいをもって生活していけるように適切に支援していくことが、企業や行政のサイドにおいても重要な課題となっていると思われます。

本調査は、このような観点から、個別面接調査によって、定年移行期にある人々の生活適応や生きがいのあり方についての事例を示すとともに、定年移行期を充実させ、創造的にしていくための体験や考え方についての基礎資料とすることを目的としています。

当財団は平成 13 年度に郵送アンケートによる定量的調査として「第 3 回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査～サラリーマンシニアを中心として～」を実施し、報告書としてまとめていますが、本調査は個別面接による定性的調査であり、上記アンケート調査を補完するフォローアップ調査として位置付けられます。

本調査では、上記アンケート調査で「別の意見聴取に応じてもよい」旨回答いただいた首都圏在住の回答者で、面接モニターに応募いただいた 13 名の方々に個別面接を実施し、その結果を本報告書の「事例研究の結果」としてまとめています。

そして、本報告書のもう１つの柱として、上記アンケート調査データを多変量解析によって再分析し、「生きがい獲得の場」、「生きがいの意味」、「生きがいの対象」等の全体的構造やその規定要因の把握を試みており、その結果を「多変量解析の結果」としてまとめています。

そういう意味で、本報告書は、定量面と定性面の両面において前回調査（平成 13 年度）を補完する有用かつ興味深いものと考えられ、各方面でご活用いただければ幸いです。

本調査において面接および分析・執筆の労をとっていただきました西村純一東京家政大学教授（前回調査の研究会副座長兼作業部会リーダー）に厚く御礼申しあげますとともに、個別面接にご協力いただいた 13 名のモニターの方々に心から感謝申しあげます。

平成１５年１１月

財団法人シニアプラン開発機構

＜本報告書の執筆分担について＞
本報告書の本文は全て西村純一東京家政大学教授が執筆し、図・グラフ等の作成は事務局（財団法人シニアプラン開発機構　前主任研究員　喜田　勇作）が行った。

目　次

Ⅰ. 概要 …… 1

1. はじめに …… 1

2. 本研究の目的 …… 2

3. 結果と提言 …… 4
(1)結果 …… 4
ⅰ)多変量解析の結果 …… 4
ⅱ)事例研究の結果 …… 9
(2) 生きがいの構造モデルと提言 …… 15
ⅰ)生きがいの構造モデル …… 15
ⅱ)生きがいの変化についてのモデル …… 17
ⅲ)サラリーマンの生きがい獲得へ向けて(提言) …… 20

Ⅱ. 調査結果の詳細 …… 25

1. 多変量解析の結果 …… 25
(1)生きがい獲得の場の構造と規定要因 …… 25
(2)生きがいの意味の構造と規定要因 …… 32
(3)生きがいの対象の構造と規定要因 …… 38
(4)生きがいの有無の規定要因 …… 44

2. 事例研究の結果 …… 46
(1)事例研究の目的と方法 …… 46
(2)事例研究の結果 …… 48
ⅰ)現在、生きがいをもっている事例 …… 48
ⅱ)前は生きがいをもっていたが、今はもっていない事例 …… 72
ⅲ)現在、生きがいをもっていない事例 …… 78
ⅳ)現在、生きがいをもっているか、もっていないか、わからない事例 …… 84

Ⅰ．概　　要

１．はじめに

２．本研究の目的

３．結果と提言

Ⅰ. 概要

1. はじめに

欧米では、幸福な老いの内面的な心理的問題を実証的に検討するために、モラール（morale）や生活満足度（life satisfaction）という操作的概念を用いて幸福な老いの程度を測り、幸福な老いの程度を高めたり低めたりする要因を探るという方法で、研究が進められてきた（古谷野，2003)。代表的な尺度としては、Neugarten, B. L.ら（1961）の生活満足度尺度A（Life Satisfaction Index A：LISA）やLawton, M. P. のPGCモラール・スケール（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)、及びその改訂版がある。そして、これらの尺度は互いに類似し、得点間に強い正の相関があることから、Larson, R.（1978）によって、これらの尺度に共通する感情の連続体の総称として、Subjective well-being という語が提案され、広く普及している。わが国では、主観的幸福感と訳され、一般的な幸福感とは区別されている（古谷野，2003)。また、これらの尺度を利用し、主観的幸福感を規定する要因の検討が種々行われ、健康度、身体的障害の程度、社会経済的地位、年齢、人種、性、職業の有無、配偶者の有無、交通の便、住宅、社会的活動などとの関連性が示唆されている（Larson, R., 1978)。さらに、これらの結果をふまえて、幸福に老いるための仮説として、引退前の活動水準を維持することが幸福な老いにつながるとする活動説（Activity Theory)、社会への参加水準が低いほど幸福な老いにつながるとする離脱説（Disengagement Theory)、幸福な老いは個人のパーソナリティに依存するとする継続性説（Continuity Theory）の適否が論じられてきた。

わが国おいても、こうした欧米の主観的幸福感に関する尺度の日本版やその改訂版が作成され、多数の研究が行われるようになってきた。しかし、主観的幸福感は、幸福な老いの結果を測定しているに過ぎず、そのプロセスを無視しているということで、欧米でも最近、批判されるようになっている（東，1999)。また、わが国固有の概念といわれる「生きがい」と比べて、あまりに単純化されていて、「生きがい」に含まれる日本人特有の微妙な感情を十分にとらえているとは言い難い。このような観点から、日本人の幸福な老いの問題を検討するためには、わが国固有の「生きがい」の側面からのアプローチが重要であると考えられる。しかし、わが国における「生きがい」の研究は、神谷（1966）の「生きがいについて」、小林（1989）の「生きがいとは何か」など生きがいの概念に関する抽象的な論議はいろいろと行われているが、現実の生きがいの獲得に関わる要因を示唆するような実証的な検討はあまり進んでいない。生きがいに含まれる日本人の微妙な多様なニュアンスの尺度化が困難であったため、生きがいという面からの実証的研究は敬遠され、欧米の主観的幸福感スケールを用いた研究に流れるきらいがあったように思われる。また、よしんば行われたとしても、生きがいの有無を問うのみのきわめてラフな調査で詳細な検討に耐えないものがほとんどであった。

そうしたなか、財団法人シニアプラン開発機構が行った一連の生きがい調査（財団法人シニアプラン開発機構、1992；1997；2002）は、日本人の生きがいをとらえるための組織

的調査研究として注目に値する。この調査の方法論的特徴は、生きがいを特定の解釈に限定せずに、また、欧米の主観的幸福感スケールにとらわれずに、日本人が感じているとみられる生きがいの意味を9つ用意し、個々人が解釈している生きがいの意味を選択させたことである。生きがいは、もともと人々の日常の生活のなかから生まれてきた言葉であり、各自の生活感覚に沿ってとらえることが、生きがいの本質に迫る有効なアプローチであると考えられる。また、生きがいとの関連を検討する調査項目が種々盛り込まれていること、35歳から74歳にわたるサラリーマン男女を対象とした全国的な大規模調査であること、日本の社会経済的環境が激しく変動したこの10年間に5年ごとに3回、繰り返し調査が行われたことなど、日本のサラリーマンの生きがい調査として貴重な資料となっている。これらの調査結果については、各回の調査ごとに既に報告書が作成されているが、そこには生きがいの構造やその規定要因に関する多変量解析など分析の余地が多々残されており、さらなる詳細な分析が期待されている。

2．本研究の目的

定年退職後の長い期間を「いかに生きがいをもち、精神的に豊かに生活するか」ということが、現代サラリーマンの重要な課題となっている。また、活力ある高齢社会を実現していくためにも、定年移行期の人々が生きがいをもって生活していけるように適切に支援していくことが、企業や行政のサイドにおいても重要な課題となっている。このような観点から、財団法人シニアプラン開発機構では、定年移行期の人々の生活と生きがいに関連する諸要因を検討すべく、「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」を1991年、1996年、2001年と繰り返し実施してきた。過去3回のデータを併せたアンケート調査有効回収件数は9千件強に達し、超高齢社会に向かうわが国のサラリーマンの生きがいに関する様々な問題を検討していく上で貴重な資料となっている（シニアプラン開発機構、1992；1993；1997；2002）。

とくに直近の第3回の調査報告書では、過去3回のデータを併せて分析し、生きがいを構成している種々の要素がこの10年間どのように変化してきているのか、また、それに関連する要因として仕事・会社、家庭、女性、内面的側面について検討した。その結果、この10年間に、生きがい獲得の場として、「家庭」や「個人的友人」などの選択が上がり、「仕事」の選択が下がりつつあることが示された。また、生きがい対象として、「子ども・孫・親など家族・家庭」の選択が上がる傾向が示された。その他、興味深い結果が多数得られている。

しかしながら、これまでの調査の分析では、生きがいについて種々の項目で調査しているものの、生きがいに関する調査項目ごとの分析が中心であり、生きがいに関する調査項目間の関係についての分析がほとんど行われないままになっている。そのため、生きがいに関する分析内容がややもすると煩雑となり、調査項目全体の構造が把握しにくかったり、生きがいに関連する諸要因の検討が十分になされていないきらいがあった。そこで、本研究では、これまでに得られたデータを多変量解析によって再分析し、生きがい獲得の場、

生きがいの意味づけ、生きがいの対象、生きがいの有無、それぞれの全体的構造やその規定要因を明らかにすることを目的の一つとしている。

また、こうした統計的分析によって得られる全体的特徴は、全体的な特徴以外のなにものでもない。そのため、サラリーマン個々人が実際のところ、いかにして生きがいを獲得しているのか、あるいは喪失しているのか、具体的プロセスを明らかにすることにはおのずと限界がある。生きがいという問題はすぐれて内面的な問題であり、なぜ生きがいをもてないでいるかは、個別の事情に沿って深くみていかないと、見えてこないことが多いのである。したがって、統計的な調査結果を補完し、サラリーマン個々人の生きがい獲得のプロセスを具体的に検討するためには、事例研究が必要になってくる。その上で、個別の事例についての十分な知識のもとに全体的な分析の結果を考察すること、あるいは逆に全体の分析結果についての十分な知識のもとに個別の事例を考察することが、現象の正確な理解にとって必要不可欠な態度であると考えられる（岩淵，1997)。

このような観点から、本事例研究では、アンケート調査において回答者が感じている生きがいの意味を選択させた後、そうした生きがいの有無を問うているが、この質問に対する４種類の回答、すなわち「現在、そうした生きがいをもっている」「前はそうした生きがいをもっていたが、今はもっていない」「現在、そうした生きがいをもっていない」「現在、そうした生きがいをもっているか、いないか、わからない」それぞれの背景にある個々人の生活と生きがいの質について検討することを目的としている。その上で、本研究で得られた統計的・定量的な視点と事例的・定性的な視点を総合して、生きがい獲得のモデルを試みに作成することを目的としている。

3. 結果と提言

(1) 結果

i)多変量解析の結果

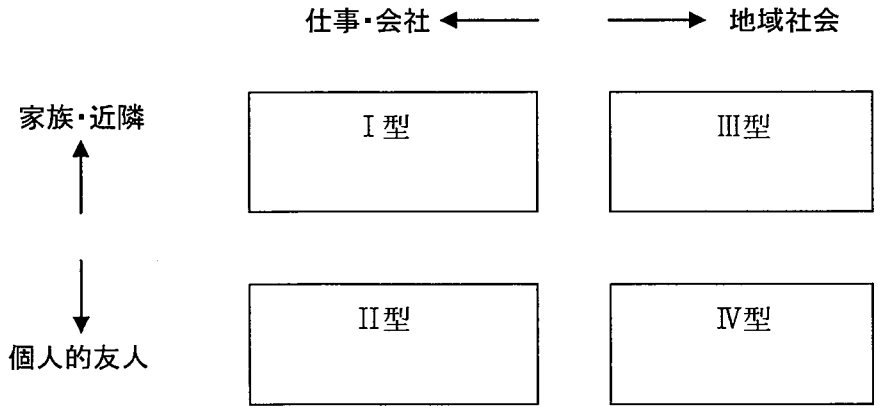
1)サラリーマンの生きがい獲得の場の分析

生きがい獲得の場は、仕事・会社（仕事・会社で獲得できる多くの生きがい要素）と地域社会（地域・近隣で獲得できる多くの生きがい要素）とを判別する次元と、個人的友人（個人的友人から獲得できる多くの生きがい要素）と家族・近隣（家族・近隣から獲得できる多くの生きがい要素）とを判別する次元、大きくこの２つの次元からとらえることができる。また、これら２つの次元の組み合わせから、生きがい獲得のタイプは、４つの典型的タイプに分けてとらえることができる。すなわち、Ⅰ型：主として仕事・会社と家族・近隣から生きがいを獲得しているタイプ、II型：主として仕事・会社と個人的友人から生きがいを獲得しているタイプ、III型：主として地域社会と家族・近隣から生きがいを獲得しているタイプ、IV型：主として地域社会と個人的友人から生きがいを獲得しているタイプである。

60 歳以降、定年退職によって社会的活動の拠点が仕事・会社から地域社会へ移行していくことに伴い、生きがい獲得の場も仕事・会社から地域社会へ移行していく傾向がみられた。したがって、定年前には、Ⅰ型やII型が多いが、定年退職後には、III型やIV型が増えると予想される。

また、サラリーマン女性はサラリーマン男性に比べて、どの年齢においても、仕事・会社よりも地域社会、家族・近隣よりも個人的友人との交流を優先させていることが示唆された。

図1 サラリーマンの生きがい獲得の場からみた4つのタイプ



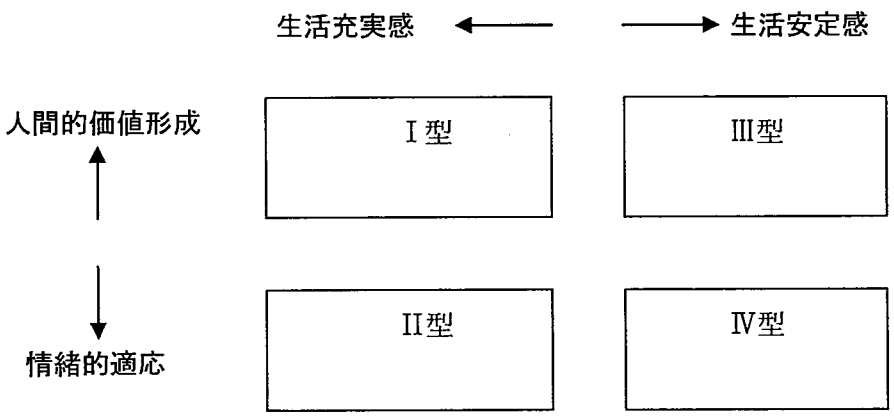
仕事・会社から生きがいを獲得している人の特徴は、仕事をもち、仕事内容、職場の人間関係、収入など職業生活全般に満足しているということである。逆にみると、仕事や収入のない人や職業生活に不満をもつ人は、仕事・会社から生きがいを獲得することは難しいといえる。それに対して、地域社会から生きがいを獲得している人の特徴は、年齢が高く、定年退職していて、自由時間が多く、地域や近隣の活動をしているということである。逆にみると、定年前で自由時間がなく、地域や近隣の活動ができない人は、地域社会から生きがいを獲得することは難しいといえる。

また、個人的友人から生きがいを獲得している人の特徴は、個人的な友人・仲間との交流を大切にしている高齢の女性ということである。それに対して、家族・近隣から生きがいを獲得している人の特徴は、仕事と家庭を大切にし、地域・近隣でも活動してそこでの友人や仲間がいるというということである。

2)サラリーマンが考える生きがいの意味の分析

サラリーマンが考える生きがいの意味は、生活安定感（心の安らぎや気晴らし、生活のリズムやメリハリなど）と生活充実感（生きる喜びや満足感、自己実現や達成感など）を判別する次元、人間的価値形成（人生観・価値観の形成、自分自身の向上など）と情緒的適応（生活のはりあい、心の安らぎや気晴らしなど）を判別する次元、大きくこの２つの次元からとらえることができる。また、これら２つの次元の組み合わせから、生きがいの意味づけのタイプは、４つの典型的タイプに分けてとらえることができる。すなわち、Ⅰ型：主として生活充実感と人間的価値形成から生きがいをとらえているタイプ、Ⅱ型：主として生活充実感と情緒的適応から生きがいをとらえているタイプ、Ⅲ型：主として生活安定感と人間的価値形成から生きがいをとらえているタイプ、Ⅳ型：主として生活安定感と情緒的適応から生きがいをとらえるタイプである。

図2　サラリーマンが考える生きがいの意味からみた4つのタイプ



男女とも年齢が上がると共に、生活充実感から生活安定感へ移行する傾向がみられた。したがって、定年前には、Ⅰ型やⅡ型が多いが、定年退職後には、Ⅲ型やⅣ型が増えると予想される。とくに、男性サラリーマンの場合には、60代後半から70代にかけてその傾向が顕著になると予想される。

また、男女とも年齢が上がると共に、情緒的安定感から人間的価値形成へ移行する傾向がうかがわれた。したがって、定年退職後には、とくにⅢ型が増えてくると予想される。

生きがいの意味を生活充実感としてとらえる人の特徴は、健康でチャレンジ精神旺盛で目標に向かって突き進む傾向があるということである。それに対して、生きがいの意味を生活安定感としてとらえる人の特徴は、孫が生まれる年齢に達し、仕事は生計の手段と割り切り、マイペースで、自然とのふれあいを楽しむ余裕をもっているということである。

また、生きがいの意味を人間的価値形成ととらえる人の特徴は、年齢は高く、ボランティア活動や社会的活動、宗教活動や政治活動に熱心で、夫婦共通の価値観をもち、自由時間もひとりで趣味・スポーツ・学習、あるいは仕事の残務整理をするということである。それに対して、生きがいの意味を情緒的適応ととらえる人の特徴は、仕事を生計の手段と割り切り、マイペースで、夫婦関係や家族の団らんを大切にしているということである。

3)サラリーマンの選ぶ生きがい対象の分析

サラリーマンの生きがい対象の選択は、気楽さの観点からの選択（ひとり気ままに過ごす、健康づくり、趣味、学習活動、自然とのふれあいなど）と責任・愛情の観点からの選択（仕事、配偶者・結婚生活、子ども・孫・親など家族・家庭など）を判別する次元、心身の健康の観点からの選択（健康づくり、スポーツ、趣味など）と内面的充実の観点からの選択（内面的充実、ひとり気ままに過ごす、学習など）を判別する次元、大きくこの２つの次元からとらえることができる。また、これら２つの次元の組み合わせから、生きがいの対象のタイプは、４つの典型的タイプに分けてとらえることができる。すなわち、Ⅰ型：主として気楽さと内面的充実の観点から生きがいの対象を選択しているタイプ、Ⅱ型：主として気楽さと心身の健康の観点から生きがいの対象を選択しているタイプ、Ⅲ型：主として責任・愛情と内面的充実の観点から生きがいの対象を選択しているタイプ、Ⅳ型：主として責任・愛情と心身の健康の観点から生きがいの対象を選択しているタイプである。

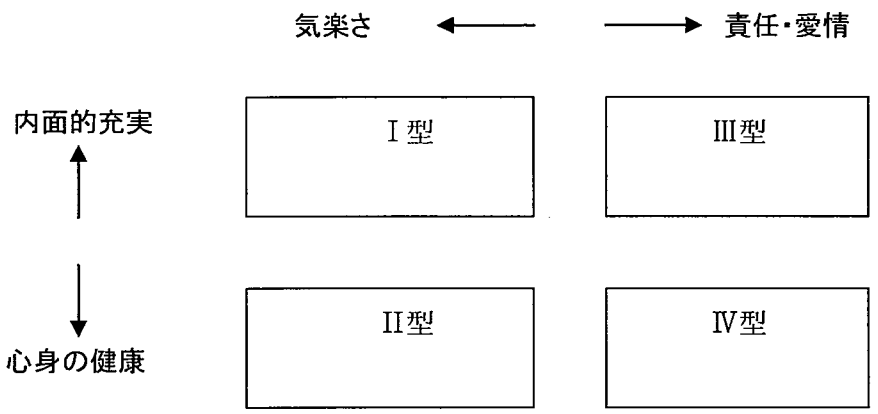
若い頃は責任・愛情の観点から生きがいの対象を選んでいるが、年をとるにつれて気楽さの観点から生きがいの対象を選ぶようになる傾向がある。したがって、定年前は、Ⅲ型やⅣ型が多いが、定年後はⅠ型やⅡ型が増えてくると予想される。また、女性は男性に比べてⅠ型やⅡ型が多いが、サラリーマンの場合、女性は男性に比べて会社の責任ある地位についている人が少なく、そうした社会的地位の男女差が影響しているように思われる。

また、若い頃は心身の健康よりも内面的充実の観点から生きがいの対象を求める傾向があるが、年をとるにつれて内面的充実よりも心身の健康の観点から生きがいの対象を求める傾向が強まってくる。したがって、定年後はとくにⅡ型が増えると予想される。とりわけ女性にその傾向が強いと予想される。

責任・愛情の対象の観点から生きがいの対象を選んでいる人の特徴は、仕事や収入に満足し、配偶者や家族に恵まれているということである。それに対して、気楽さの観点から生きがいの対象を選んでいる人の特徴は、年齢が高く、趣味や自然とのふれあい、個人的友人との交流に熱心ということである。

また、内面的充実の観点から生きがいの対象を選んでいる人の特徴は、女性で自分なりの価値観をもち、宗教団体や政治団体のリーダーをしたり、社会的活動を通じて知り合った友人・仲間とつきあっているということである。それに対して、心身の健康の観点から生きがいの対象を選んでいる人の特徴は、孫のできる年齢になり、いろいろな趣味に熱中しているということである。

図3　サラリーマンの生きがい対象の選択からみた4つのタイプ



以上は、サラリーマンの生きがいを、生きがい獲得の場、生きがいの意味、生きがい対象という側面から切り取って典型的なタイプをみたものであるが、実際にはこれらのタイプが様々な割合でミックスしているケースが多いと予想される。また、年齢や性別などによる一般的傾向もあるが、それ以上に個人差が大きいと予想される。

4)生きがいの有無の意識の分析結果

サラリーマンの生きがい獲得の場、生きがいの意味、生きがいの対象の多変量解析の結果からある程度みえてきたことは、これらを規定しているのはサラリーマンの生活状況およびそのライフスタイルであるということである。したがって、サラリーマンの生きがい獲得の場、生きがいの意味づけ、生きがいの対象は、定年退職などによって、生活状況やそのライフスタイルが変わってくれば、おのずと変容してくると予想される。

それに対して、生きがいを「もっている」「前はもっていたがいまはもっていない」「もっていない」「わからない」という意識は、かなりパーソナリティによって規定されているということが明らかとなった。ある意味では、生きがいをもっていると感じることができるかは、パーソナリティの一部として理解すべきことかもしれない。つまり、生きがいを

もっていると感じやすいパーソナリティとそうでないパーソナリティがあるということである。

生きがいをもっていると感じやすいパーソナリティの特徴は、「いつも目標に向かって突き進む」といった達成動機の強さ、「自分には他人にない優れたところがある」という自尊心、「どんなところでも結構楽しみを見出す」といった楽天的性格というものである。逆に、これらのパーソナリティ特徴をもたない人は、生きがいをもっていると感じにくいと予想される。

こうしたパーソナリティに比べると影響力は小さいが、それなりに意味のある変数が３つ見出されている。第１は、夫婦の対話である。生きがいをもっていると感じられない状態になることを防ぐ上で、夫婦の対話はきわめて重要な役割を果たしていると予想される逆に、夫婦の対話のないところでは、サラリーマンは生きがいを感じられなくなる危険性が高まるといえる。

第２は、現在の仕事の内容の満足度である。生きがいの場の分析から示唆されたように、サラリーマンは多くの種類の生きがい要素を仕事・会社から得ている。そのもっと核となるのが、仕事の内容であり、これに満足しているということは、サラリーマンが仕事・会社に適応していく上でもっとも重要な部分であると考えられる。

第３は、年齢であるが、これは年齢の高い方が生きがいをもっていると感じやすいことを意味している。このことは、これまでの調査結果からも予測されたことであるが、サラリーマンの現役の方がサラリーマンＯＢよりも生きがいを感じられなくなっているといういまの組織環境・雇用状況に多くの問題があるように思われる。

ⅱ)事例研究の結果

1)現在、生きがいをもっている事例

○定年を機に趣味や地域社会での活動を広げていったA氏の例

A氏は、定年退職したとき、サラリーマンとして働くのはもういいと思ったという。退職後は、積極的に地域社会への溶け込みをはかっていった。よく地域社会での活動のきっかけがないということを耳にするが、A氏は、新聞の隅々、タウン誌、チラシ広告などに目を通したりし、そこから地域での活動の手がかりを得るのだという。たとえば、市の広報誌でマジック教室を見つけ、入会して、1年間の講習を受け、マジックのサークルを立ち上げた。そのほか、タウン誌のフォトサークル、アマチュア無線の同好会、ダンス、善意通訳者の会、市政モニター、消費者生活モニター、国勢調査モニター、市民運動など20以上のサークル活動に関わった。

また、A氏の地域社会への溶け込みは、定年退職前から始まっていた。とくに善意通訳者の会（A県ＳＧＧクラブ）は、発足時のメンバーのひとりで、英語はプアであるが、57歳から関わってきた。異業種間の交際が定年後の財産になるのではないか、また、マンネリ化したサラリーマン生活に刺激を与えたいということもあって入会したという。現在、事務局長として打ち込んでいる。

A氏は、2箇所でパートの仕事もこなしている。これは、定年後まったく仕事をしないでいると緊張感がなく、張り合いがなくなった。サークル活動は多少整理したが、交際範囲が広いため、年金だけでやっていくのは余裕がない。再び仕事についた背景には、そうした動機があった。したがって、サラリーマンとして仕事をするというよりは、地域社会への溶け込みの一環として仕事もしているという感じである。

○定年後、障害のある夫の世話をしながら自分の生きがいを見つけたB氏の例

B氏は50歳代半ば、夫が難病となりもっともつらい時期を迎えた。そうしたなかで、定年後、娘一家の近くに家を求め、移り住むことを一時期考えたこともあった。しかし、試みに孫の夏休み、冬休みなどに住んでみて、土地柄にややカルチャーショックを感じ、自分たちには合わないことを悟る。また、娘には娘の世界があり、孫を生きがいにすることもできない。自分たちの生活を再構築して生きていくことが大切であることを悟る。

そうした時期に、自分に合った趣味との出逢いがあり、夫が健康であって、自分も健康で趣味を続けていける今の生活が幸せと思うようになった。もともと就労継続意志が強く、自立した女性であり、自分たちで生活していけるうちは、子どもたちを頼らず、夫婦で支えあって、自分に合った生活をしようという考え方に到ったようである。

○心の病気を機に人生観が変わり、定年前に希望退職したC氏の例

昇進の話も出てきた30歳代半ばに心の病気となり、2年くらい不安定な状態に陥った。サラリーマンとしての転機であった。その後は、我武者羅にやるのをやめ、おおらかにい

こうと思った。C氏は、定年まで 3 年有余を残し、すっぱりと希望退職した。ハローワークを通じて、職探しを始めたが、サラリーマン生活はもうこりごりだと思っている。できれば、なんらかの高齢社会の活性化に貢献ができるような仕事があればやってみたいと考えている。

C氏は、現役時代から仕事・会社を覚めた眼で見ているところがあり、仕事・会社を生きがいの全てを獲得する場とはみていない。したがって、仕事・会社の喪失がそれほどこたえる風ではない。C氏は、むしろ家庭と個人的友人から生きがいを獲得していると感じているようだ。C氏は、夫婦で早く地域の施設に移り住み、子ども達の世話にはならないですむ生活を早期に確立させることが大切であると考えている。これが、C氏の子どもたちへの愛情であり、そうした老後の安定した生活への取り組みそのものがひとつの生きがいになっているようだ。

○クビの宣告にもめげずに、新たな仕事のネットワークに生きがいを見出したD氏の例

D氏は社長との対立からクビを宣告され、屈辱的な状況に置かれた。自殺まで考えたが、踏みとどまり、未経験の部署で一から出直すことにした。給料の削減分は仕事を学ぶ月謝と思って頑張った。新しい仕事に積極的に取り組み、仕事の関係のネットワークが広がり、社外から講師依頼がくるほどにその仕事に熟達した。D氏の講演は評判がよく、メール等でかなりの反響が寄せられるという。これがD氏にとって生きがいとなっている。

D氏は、このように新しい生きがいとなる仕事に出会えたのは、クビを宣告されたからであり、人生の最高の経験であったと述べている。最悪の事態を打破するには何をすればよいのか、そうした視点での取り組みの結果が現在に至っているようだ。

○第2の定年後、田舎に戻り農業をやりたいと考えているE氏の例

E氏は中学校以来の同級生と結婚し、2 人で支えあって生きてきた。妻も家計を助け、50歳半ばまでは働いた。けんかもするが、何でも話し合える。子どもたちも、こうした 2 人の苦労する姿をみて育ち、それぞれに頑張ってきた。こうした家族愛が、E氏の生きがいになっている。

E氏は現在、仕事や趣味に生きがいを感じながら安定した生活をしているが、郷土の人々との交流を現在も維持している。第 2 の職場を退職したら、夫婦で田舎に戻り、長年一人暮らしをしてきた高齢の母の面倒をみるつもりである。田舎で農業をしながら、親孝行をして暮らすことが、家族思いのE氏の夢である。

○学習が生きがいになっているF氏の例

子どもの頃から体が弱かったが、向学心は人一倍強かった。戦時中の学徒動員及び戦後の混乱により満足な授業を受ける事なく卒業となり、いつも満たされない気持ちであった。大学で栄養学を学びたいという気持ちがあり、また、せっかく父親が進学を進めてくれたにもかかわらず、就職を選んだことには忸怩たる思いがある。しかし、こうした思いが、

その後の学習意欲につながっているかもしれない。

勤めの傍ら、英文・和文タイプあるいは大学の夜間部で図書館学を学んだことは（仮説をたて、その仕事につくためには、何が必要か、常に前もって学ぶようにした。）その後の適職を得ていく上でおおいに役に立ったわけであるが、Ｆ氏の興味・関心はこうしたいわば実学だけでなく、ＮＨＫの番組（現・「人間講座」の 35 年以上にわたる受講）、講演会、読書、能、茶、趣味として方言の収集、家族誌など実に多岐にわたっている。

病弱で結婚を断念したり、大病し 2 年の休職など挫折も味わったりしたが、上司にも恵まれ、仕事を通して成長する事ができた。また、会社という管理社会にあって、自分の能力、資質に合った仕事を自ら選び取った会社生活を送る事ができて満足している。知的好奇心を持ち続ける学問的姿勢は、退職後の生活でも窺われる。「雑学ながら学びつつ老いる」という言葉は、現在のＦ氏の心情を表わしている。

○退職準備休暇に入り自分に合った生き方を探っているG氏の例

Ｇ氏は企業戦士として走り続けてきた。いろいろな職場を経験し、いろいろな人たちと仕事ができるという自負がある一方、一筋に歩いてきた人に比べて、自分はいったい何を専門にしているのか、アイデンティティがはっきりしなくなってしまったという危機感ももっている。また、単身赴任で仕事に専念してきたことが、妻や家庭との距離をつくってしまったように感じている。妻とは宗教的な違いもあるが、今後、どのように折り合いをつけていくか、課題が残されている。子どものことは、さほどあたまにはなさそうである。

いま、退職準備期間にあり、これから何をしていこうか手探りの状況である。退職準備休暇はよい機会を提供してもらったと思っている。現在、森林ボランティアに参加し、集団で農業をやってみたいと思っている。60 歳までの 2 年間は準備期間で、60～70 歳に畑を作り、そこを拠点にして、田舎と都会の半々の生活をしたいと思っている。そして、70 歳以降は畑を中心にした生活をしたいと思っている。しかし、都会志向の妻と折り合いをつけて農業を始めることができるのか、まだ先はみえない。

2）前は生きがいをもっていたが、今はもっていない事例

○定年を機に後進に道を譲り、すっぱりと退職したH氏の例

Ｈ氏は、健康、経済、家族に恵まれ、自分の好きな趣味を楽しんでいるようにみえるのだが、なぜ、今生きがいをもっていないと感じるのであろうか。

Ｈ氏は非常に言葉を大切に考える人で、調査票では、挑戦しがいのある仕事に取り組み、それを達成し、会社や社会に貢献することを生きがいと考えており、この回答はそうした意味での生きがいを今はもっていないということであったようだ。定年前に 2 年ほど挑戦しがいのない仕事で遊んでいるに等しいと感じていたが、既にこのときＨ氏の考えるような意味での生きがいをもてなくなっていたということになる。

しかしながら、Ｈ氏の現時点での生きがいは「生きていること」そのものであり、「生きていて、幸せを感じること」であるという。つまり以前の「積極的生きがい」とは次元の

異なる生きがいである。したがって、決して現在の生活を否定的にみているわけではなく、仕事をもたず、何の拘束もない趣味三昧の生活を十分幸せだと感じている。ただ、それを以前の「積極的生きがい」の視点からみると「そうではない」ということのようだ。

○定年離婚し、囲碁三昧の生活をしているI氏の例

40 歳代半ば子会社に出向することになり、単身赴任で島流しにされたような気持ちであった。しかし、仕事仲間との付き合いの中で碁を覚え、単身赴任の寂しさを紛らわすことができた。単身赴任の頃から、夫婦の溝は広がり、定年を機に離婚することになった。子どもたちふたりが大学を卒業し、妻も仕事を継続し、それぞれ自立してやっていける状況の中での離婚であった。Ｉ氏にとって、予想された出来事であったかもしれない。Ｉ氏は学歴で苦労したせいか、子どもたちに大学を卒業させることが生きがいになっていたのかもしれない。

しかし、定年退職し、離婚したＩ氏を予期せぬ病魔が襲った。手術後、心境の変化があり、ストレスためずにのんびりいこうと考えるようになった。これまでのしがらみから解き放たれ自由になった感じはあったが、反面、孤独であった。そうしたＩ氏の心のささえとなり、今、生活の中心になっているのは、単身赴任時代に習い覚えた碁である。健康を考えながら、昼食後、10 局くらいうつのが日課となっている。しかし、Ｉ氏はそれが生きがいとは意識していないようだ。

3)現在、生きがいをもっていない事例

○第2の定年後、仕事のない生活のむなしさを覚えているJ氏の例

定年を迎えても、続けて仕事を継続できる場合には、定年ショックはそれほど大きくない。Ｊ氏の場合も定年になり収入が半減近くなったものの、その後も仕事や地位を維持することができたため、それほどショックではなかった。Ｊ氏が、仕事がなくなることの喪失感を味わうのは、65 歳になって退職したときであった。この時、Ｊ氏は初めて仕事のない生活を経験することとなる。

Ｊ氏も当初は、仕事の責任からの解放感や自由時間を味わうことができ、ハッピーリタイアメントと仕事のない生活を楽しんだが、それはあまり長続きしなかったようだ。仕事がなくなることの意味は、たんに毎日の活動である仕事がなくなるというだけではなく、それまでの仕事のある生活のすべてがなくなることを意味している。すなわち、毎日の仕事での活動、仕事による収入、仕事を通じての色々な人々との交流、仕事による生きがい、等々のすべてを失うことを意味している。

また、生きがいの場の分析からも示唆されるように、仕事・会社を生きがいとしている人々は、自己実現や達成感だけでなく、はりあいや活力、リズムやメリハリ、喜びや満足、人生観や価値観、目標や目的、向上心、自己効力感などの種々の生きがい要素を仕事・会社の場から得ているのである。そうしたそれまで得ていた生きがいの要素のすべてが、仕事を失うことによって失われてしまう。そのため、Ｊ氏のように会社中心の生活をしてき

た人ほど、仕事を失うことによる喪失感が大きいとみられる。

また、他の人たちも、大なり小なり仕事を失うことの影響はあったとみられるが、Ｊ氏の場合にそれが比較的強くあらわれた理由としては、Ｊ氏が、生きがい獲得の場を、仕事・会社以外にまだ見出せていないということが指摘できる。仕事に就きたい気持ちはあるが、自分にあった仕事は無い。趣味なり、これまで仕事で十分できなかった活動を始めたりはしているが、仕事のない生活の喪失感がまだ尾を引いており、家族・近隣、地域社会での生活から生きがいを獲得するまでにいたっていない。

○定年後、異性との交流がはりあいになっているK氏の例

Ｋ氏は、生きがいを、自分が生きていくことによって、家族あるいは世の中にプラスを生み出すようなものと考えている。したがって、子どもの小さい頃は、子どもの成長とか、それなりに生きがいがあったと感じている。しかし、子どもが独立していくと、そのような意味では、現在は、生きがいをもっているとはいえないと感じている。しかし、不幸だとは感じていない。否、自由、なんでもできる今がハッピーだと思っている。

Ｋ氏は、仕事に対しても、もともと覚めた眼で見ていた。したがって、定年後、自分のやれる仕事がないな、と感じた時点で、すっぱりと考え方を変えた。徹底的に趣味や遊びを中心に生活を送っている。妻も収入があり、経済的には心配ない。よく毎日が日曜日が苦痛であるという話もあるが、Ｋ氏は一向そういう気にならないという。生活リズムは定年前と変わらない。

妻とは趣味が違い、それぞれに別な生き方をしている。Ｋ氏は、テニスやダンスなどを通じて飲み友達もでき、異性との交流もはりあいになっているようだ。妻も女性との交流を広げることに対して、容認しているようだ。

3）生きがいをもっているのか、いないのか、わからない事例

○ゼロから出発し、与えられた条件の中で極めることを大切にしてきたL氏の例

Ｌ氏は、なんとか大学は卒業し、就職したものの、卒業直前に家業が倒産し、ゼロからの出発となった。失うものもなく、生来のんきな性格で、開き直れたという。自分で自分のものを稼いでいくと考えた。Ｌ氏によれば、職場は自分を鍛えてくれる道場である。今の若い人は、自分の好みを主張するが、それに対して、Ｌ氏は、自分の与えられる仕事の中でどう極めるか、与えられた条件の中で自分をどう磨いていくかが課題であり、その中に喜びがあるという。

そういうＬ氏であるので、生きがいを生きる喜びや満足感、あるいは自己実現としてとらえている。そのため、定年後の仕事についても、稼ぎは小遣い程度と割り切っている。仕事における満足感をそれなりに見出してはいるが、それが生きがいと呼べるようなものとは思っていないようだ。調査票の現在、生きがいをもっているか、の問に対して、「わからない」と答えている。迷ったが、結論はでないという。むしろ、今は、仕事よりも、定年退職の 5～6 年前に会社の仲間とやっていた陶芸で内面的に充実感を得ているようだ。

○定年後、実家の畑で果樹の栽培をしたいと考えているM氏の例

M氏は、生きがいを喜びや満足感ととらえているが、これまで確たる生きがいをもったことがないのではなかろうか。20歳すぎから何か確たるものを探さなくてはと思いつつも、ずるずる来てしまったようである。仕事も結婚生活も、いまひとつ確たるものが得られていないようだ。何か確たるものがあれば、定年後もそれを続けたいが、そうした確たるものはない。

M氏は、定年後、実家の庭先に家を建て、両親の面倒を見ながら、果樹の栽培をしたいという夢を語っている。これを確たるものにするには、いろいろと現実的な課題が残されている。

このように見てくると、「現在、生きがいをもっている」という事例は、いずれもなんらかのかたちで地域社会との接触をもち、退職後、地域のなかに積極的に溶け込んでいこうとしている姿勢が窺われた。他方、「前は生きがいをもっていたが、今はもっていない」と考える人は、かつて生きがいを感じていたような意味での生きがいをもっていないということであって、決して今、不幸ではないということがわかる。生きがいを持っていないというよりは、生きがいということをあまり意識せずに生きている、といった方が的確かもしれない。

また、「現在、生きがいを持っていない」という事例は、ひとつは典型的な定年ショックの事例であるように思われる。まじめに仕事に専念してきたサラリーマン諸氏は、誰しも大なり小なり定年ショックを味わうわけであるが、この事例はそれが多少強く出た事例といえよう。いまひとつは、生きがいを家族あるいは世の中にプラスを生み出すようなものと考えるがゆえに、現在はそのような生きがいは持っていないというものであった。

「生きがいを持っているか、持っていないか、わからい」という事例は、一つは、かつてのような意味で生きがいを持っているか問われると、わからないという事例であった。いま一つは、これまでに確たる生きがいをもったことがなく、現在もこれが生きがいというようなものを持てていないという事例であった。

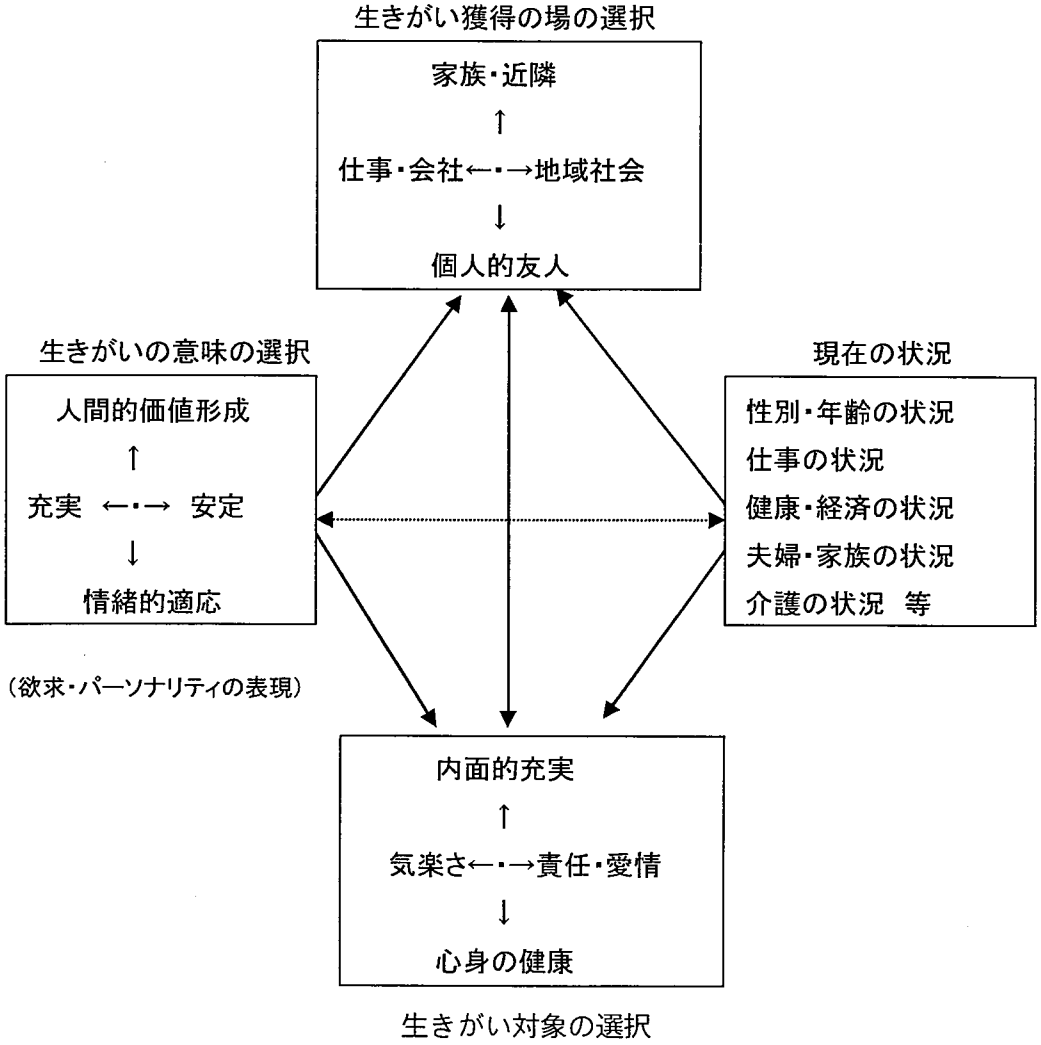
(2)生きがいの構造モデルと提言

ｉ)生きがいの構造モデル

図４は、本調査の多変量解析の結果をふまえ、本調査における生きがいの構造を説明するモデルを提示したものである。この構造モデルでは、サラリーマンの生きがいがおよそ４つの部分から構成されている。すなわち、生きがい獲得の場の選択、生きがいの意味の選択、生きがい対象の選択、現在の状況、以上４つの部分である。

このうち生きがいの意味の選択は、個々人が生きがいをどのようなものととらえているかを示すものである。サラリーマン個々人の生きがいのとらえ方は、生活充実感と生活安定感のうち、どちらをどの程度優先するか、それと独立に、情緒的適応と人間的価値形成のうち、どちらをどの程度優先するか、それぞれの折り合いをどのようにつけるかによって違ってくる。したがって、個々人が選択する生きがいの意味には、自尊心や達成動機、楽天志向などの欲求ないしパーソナリティが影響してくると考えられる。

図4　生きがいの構造モデル



この生きがいの意味の選択から生きがい獲得の場の選択と生きがい対象の選択に対して矢が刺さっているが、これはサラリーマン個々人の生きがいの意味の選択が、生きがい獲得の場の選択や生きがい対象の選択に影響していることを示している。例えば、生きがいの意味として生活安定感より生活充実感を重視するタイプは、生きがいの場としては地域社会よりは仕事・会社、生きがいの対象としては気楽さよりも責任・愛情の対象を重視する傾向があることを表している。また、生きがい獲得の場の選択と生きがい対象の選択は双方向の矢印で結ばれているが、これは両者が相互に関係し合っている様子を表したものである。例えば、生きがいの場として仕事・会社よりも地域社会を重視する傾向と、生きがいの対象として責任・愛情よりも気楽さを重視する傾向は互いに関係していることを示している。

生きがい獲得の場の選択は、仕事・会社と地域社会のうちどちらをどの程度優先するか、それと独立に、個人的友人と家族・近隣のうちどちらをどの程度優先するか、それぞれの折り合いをどのようにつけるかによって違ってくる。また、これらは、仕事・会社に傾倒すればするほど、地域社会への参加は困難になること、逆に仕事・会社を離れれば地域社会へ参加しやすいことを示唆している。同様にして、家族・近隣に傾倒すればするほど、個人的友人との交流は難しくなること、逆に家族・近隣離れができるほど個人的友人との交流がしやすいことを示唆している。

生きがい対象の選択は、気楽さと責任・愛情のうちどちらをどの程度優先するか、それと独立に、心身の健康と内面的充実のうちどちらをどの程度優先するか、それぞれの折り合いをどのようにつけるかによって違ってくる。気楽さを優先すれば、責任・愛情は遠のくし、責任・愛情を優先すれば気楽さは遠のいていってしまう。例えば、孫の世話はかわいいが責任もあり、気楽というわけにはいかない。自然とのふれあいは気楽でいいが、ひとりでは寂しくもある。内面的充実を優先すれば、健康づくり・スポーツは少なくなるし、健康を優先すれば内面的充実は少なくなることを示唆している。例えば、学習は精神的な充実感を味わうことはできるが、座って学習ばかりしていると、体力が低下していく。運動・スポーツは体によく、発散できるが、内面的充実はない。いかに折り合いをつけていくかが課題である。

現在の状況は、サラリーマン個々人が現在どのような状況に置かれているかということを示している。このサラリーマン個々人が置かれている状況は、性別、年齢・ライフステージ、仕事の有無・内容、健康状態、経済状態、結婚生活の有無・内容、介護の有無・内容などによって大きく違っていると考えられる。当然ながら、サラリーマン個々人の置かれている状況は、生きがい獲得の場の選択、生きがい対象の選択に影響を及ぼしていると想定される。

現在の状況から生きがい獲得の場の選択、生きがい対象の選択それぞれに矢印が刺さっているが、これはそうした事情を説明するものである。

さらに、生きがいの意味の選択と現在の状況とが双方向の点線で結ばれているが、これは、生きがいの意味の選択の背景にある欲求・パーソナリティ要因と現在の状況の環境要

因との間に相互作用があることを想定したものである。例えば、自尊心の高さが、仕事の選択に影響を及ぼしたり、仕事の選択の結果が自尊心に影響を及ぼしたりということが考えられる。

ii)生きがいの変化についてのモデル

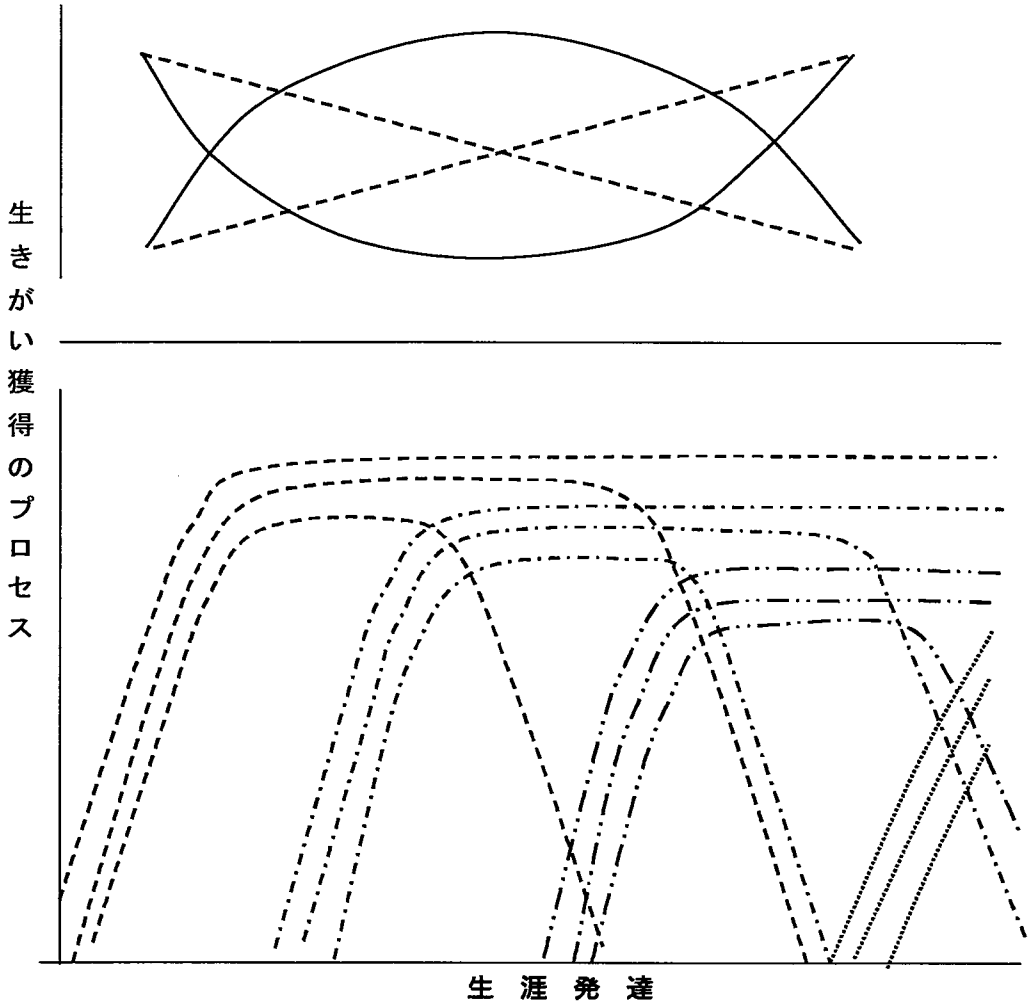
図5は、事例研究の結果をふまえて、生きがい獲得のプロセスの包括的モデルとして、Baltes, P. B.ら（1979）の生涯発達プロセスのモデルを借りて提示したものである。

図5の上の部分は、生きがい獲得のプロセスには、異なる変動のパターンがあることを示唆している。例えば、子どもの頃はそれが楽しく、生きがいとなっていたが、年をとると楽しくなくなり、生きがいでなくなってしまうものもあれば、子どもの頃にはまったくつまらなく生きがいではなかったのに、年をとるとともに楽しさが増大し、定年以降に生きがいとなるものもある。そうかと思うと、子どもの頃あんなに熱心だったのに、成人するとすっかり忘れてしまったかのうように無関心で、定年以後になって子どもの頃の夢が再びよみがえってくる場合もある。働き盛りの頃、あんなにしょっちゅうやっていたのに、定年後はパタッとやらなくなってしまう場合もある。

他方、図の下の部分は、生涯を通じて、新しい生きがい獲得のプロセスが生起しうること、そのいくつかの生きがいだけが一生続き、積み重なっていくという考え方を示している。例えば、定年前は生きがいであったが、いまは生きがいでなくなってしまったとか、逆に、定年前は生きがいでなかったが、定年後に生きがいとなっているとか、働き盛りの頃に獲得した生きがいが、ずっと今も生きがいとなっているとか、いった様々なパターンがありうる。

このようにプロセスとしてみた時、生きがい獲得のプロセスには様々なパターンが想定される。こうした生きがい獲得のプロセスのパターンは生きがいの性質によっても異なってくるが、個々人の人生経験の違いが非常に大きいと考えられる。したがって、大切なことは、サラリーマンの生きがい獲得を性別、年齢、仕事の有無、結婚の有無、介護の有無などによって紋切り型にとらえるのではなく、サラリーマン個々人の人生の文脈にそって、個々人の生きがい獲得のプロセスとその意味を理解することである。

図5 生きがい獲得のプロセスモデル

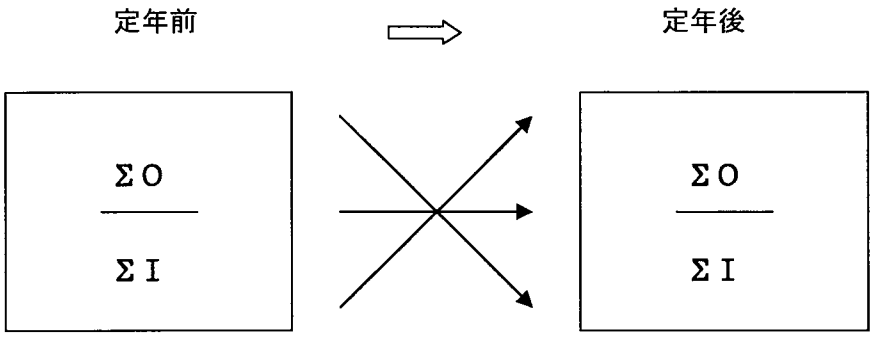


出典：Baltes, P. B. & Nesselroad, J. R. 1979 History and rationale of longitudinal research. In J. R. Nesselroad & P. B. Baltes (Eds) Longitudinal research in the study of behavior and development. New York: Academic Press Pp.1-39.

また、図６は、定年前後の生きがいの変化を説明する一つのモデルとして提起するものである。このモデルでは、生きがいをひとつの欲求、すなわち生きがい欲求ととらえている。また、そうした生きがい欲求にはいろいろな質・量があり、それらは加算的に表現されると仮定している。同様に、生きがい獲得にもいろいろな質・量があり、それらは加算的に表現されると仮定している。そうした前提の上で、生きがい欲求の総和ΣＩが、定年前後でどのように変わるか、また、生きがい獲得の総和ΣＯが定年前後でどのように変わるかによって、生きがい欲求の総和ΣＩに対する生きがい獲得の総和ΣＯの割合の変化が定年前後の生きがいの増減の感覚につながっていることを示唆している。

これは比であるので、かりに生きがい獲得の総和が減少しても、生きがい欲求の総和も同様の割合で減少すれば、すなわち欲求が縮小すれば、生きがいが減少したとは感じないことを示唆している。しかし、生きがい獲得の総和が変わらなくても、生きがい欲求の総和が増大すると生きがい喪失感が強まることが予想される。定年後に生きがい喪失に陥らないためには、仕事・会社に変わる新たな生きがいの獲得と、欲求の質・量を適度に抑制することが必要となることを示唆している。

図6　定年前後の生きがいの変化の知覚モデル



iii）サラリーマンの生きがい獲得へ向けて（提言）

サラリーマンが長くなった定年退職後の期間を、生きがいをもち、精神的に豊かに生活していく上で何が必要とされているのか、最後に、本研究をふまえて若干の提言を行っておきたい。もとより、生きがいは個人差の大きいものであり、定年後のあるべき生きがい論を押しつける気持ちは毛頭ないことをお断りしておく。サラリーマンが長くなった定年退職後をどのように生きていくか考える上での一つの参考にしていただければ幸いである。

1）サラリーマン個々人へ向けて

○自分の生きがいについて知ることは、自分の欲求、パーソナリティについて知ることである。

自分は生きがいをどのようなものと考えているのかということについて考えてみることが、先ず必要なのではないか。一般的に「生きがいとは何か」といったことを考えるのではなく、自分の生きがい、生きがい欲求というものはどういうものか考え、そうした生きがいを実現していくためには何が重要か、いかにして生きがい欲求を統制していくか、自分で考えてみることが、長くなった定年退職後の生き方を考える上で必要なのではないだろうか。

自分の生きがいの解釈や意味づけ、それは、結局、自分自身の欲求のあり方、パーソナリティ傾向を知ることにつながる。したがって、自分にとっての生きがいの意味を問うことは、自分の生かし方を問うことに他ならない。また、こうした基本的な欲求のあり方やパーソナリティは定年退職によって変わるものではないので、定年前から考えておいて早すぎることはない。

○生きがい獲得の場についての認識を深め、ソーシャル・スキルを身につけておく。

定年退職後も同じ仕事に止まれる人は少ない。よしんば止まれたとしても、仕事の内容、職場の人間関係は質的に違ってくるし、それもいずれは退職を余儀なくされる。とすると、仕事によって満たされていた欲求は必然的に満たされなくなってくる。実は、それはたんに仕事をするという活動の欲求が満たされなくなるだけでなく、生活の安定への欲求、いろいろな人との接触欲求、それらを通じての自尊心、達成感、仕事があっての余暇の楽しさ、こういったものがすべて失われてくるのである。

定年退職後に、これらの欲求を急に低減させ縮小均衡させて適応しようとしても、一度、肥大した欲求を抑えることは並大抵のことではない。したがって、予防的には、これらの欲求をほどほどに制限し、現実との折り合いがつけられるようにする必要がある。しかし、定年退職後に適応していくためには、これらの欲求はある程度満たしていく必要があるので、仕事・会社以外に自分の欲求を充足させてくれる場を確保することが重要な課題になってくる。

もっとも身近なはずの夫婦や家庭であっても、退職前と退職後とでは既に質的に違ってくることを認識する必要がある。その上で、定年後もよい関係を維持していく上で、新たな夫婦関係を築いていくためのソーシャル・スキルを身につける必要があるのではなかろ

うか。こうした夫婦関係の質的変化に気づかず、定年後も定年前同様に配偶者に接していると、夫婦の間で大きな摩擦を生むことになる。夫婦関係における自分の役割、家族における自分の役割の見直しが必要になってくる。

また、趣味であれ、ボランティアであれ、学習であれ、自分の欲求を近隣、地域社会、個人的友人などの場で満たそうとすると、当然のことながらこれらの人々との交流が必要になってくる。しかし、多くのサラリーマンは、定年前にこれらの人々と十分な交流をもつということをほとんど経験していない。定年前の名刺や肩書きがあったときのつきあい方をすると、うまくいかないことはよく知られている通りである。したがって、近隣の人たち、地域社会、個人的友人とのつきあいを志向する場合には、それらの場についての認識とそれなりのソーシャル・スキルを身につけることが必要である。できれば、定年前からなんらかのかたちで、近隣、地域社会、個人的友人などの場のソーシャル・スキルを身につけておくことが必要になってくるのではなかろうか。

○自分を生涯楽しませることのできる内発的動機づけにもとづく生きがいの対象の選択が重要である。

最近、定年移行期にある人々にむけて情報誌が発行されたり、ＴＶやラジオの番組が組まれたり、いかにもこのような生き方をすると素晴らしい老後がやってくるかのような情報が提供されている。これらの情報のなかにはそれなりに重要なものもあるが、生きがいはすぐれて個人差の大きなものであるので、自分に合っているかどうか、十分な吟味が必要である。情報に惑わされずに、本当に自分のやりたいものか、自分のこころとよく相談して決めることが大切である。例えば、学習の場合、人からいわれてやる学習はちっとも楽しくないので長続きしないが、自分が前からやりたくてしょうがなかったものであれば、少々ハードルがあっても苦にならず、努力しているうちに知識や能力が向上してくる。力がついてくれば、楽しくなり、さらに学習意欲をもって学習するためよい循環ができてくる。生きがいというものは、人から見るとつまらなく見えることであっても、自分が生きがいであると思えば、その人にとってはそれが生きがいなのである。

2)企業へ向けて

○現役のサラリーマンが生きがいをもてるような仕事・会社にする。

本研究では、長い定年退職後の期間に生きがいをもち、精神的に豊かに生活するために何が必要であるかを検討することが目的であった。しかし、データをとってみると、実は、生きがいをもっている人の割合は、サラリーマン現役よりもサラリーマンＯＢに多いことが明らかとなった。なぜ、サラリーマン現役の方が生きがいをもつ人の割合が少ないのか問題である。また、この10年間の変化を分析すると、仕事・会社が生きがいという人の割合が減ってきている。このことの背景には景気が暗い影を投げかけていることは予想されるが、実際の景気以上に、サラリーマン現役の精神状態が悪くなってきているように思えてならない。現役サラリーマンが生きがいをもてるような組織環境の再構築が何よりも必

要になっているのではないだろうか。

○現役のサラリーマンに近隣、地域社会の場の認識を深め、地域の人々とつきあっていくソーシャル・スキルを身につける機会と自由時間を与える。

景気がよくないなかで、直接、生産に貢献しないこのような機会と自由時間を与えることは、企業にとって、損失であると受け止められてしまうかもしれない。しかし、地域社会を体験し、地域社会の人々と交流をもつことは、仕事・会社に没入しているサラリーマン個々人に地域社会の存在を再認識させ、定年後に地域社会に溶け込んでいくためのソーシャル・スキルを身につけさせられるだけでなく、職業人としての視野を広げ、社会的スキルを向上させる上でも重要な体験学習となると考えられる。また、多くのサラリーマンが地域社会へアクセスするきっかけがもてないまま定年を迎えることが多いが、こうした体験学習がサラリーマン個々人に対し地域社会に目を向けさせ、現役のうちから地域社会に実際にアクセスしていくきっかけを与えることになるかもしれない

3)社会へ向けて

○社会貢献につながるような仕事・事業に、積極的にサラリーマンOBを採用する。

この 10 年間、仕事・会社が生きがいという人の割合が減ってきていることをふまえて、企業向けには、もっと現役のサラリーマンが生きがいをもてるような組織環境の再構築を提言したわけだが、社会に向けても別の角度から提言したい。それは、定年退職したサラリーマンＯＢ、特に 60 歳代前半層の大部分は仕事に就くことを希望している。しかし、ハローワークに行っても、中高年層の求人はほとんどないのが現状である。そうした状況が、サラリーマンＯＢが仕事・会社に生きがいをもてないようになってきている一つの理由である。サラリーマンＯＢが長年培ってきた経験、専門的知識・技術を生かす新たな場を開発することが、サラリーマンＯＢの生きがいの創造の観点からきわめて重要になってきていると思われる所以である。

その際、従来は、サラリーマンＯＢが、定年前と同じないし類似の仕事につきたがっていると考えられてきた。とりわけ、大企業のホワイトカラーの管理職にはその志向が強いと思われてきた。しかし、面接調査によると、従来どおりの仕事・会社であるのなら就きたくないという人たちが増えてきていることを予感した。むしろ、例えば高齢社会や地域社会の活性化につながるような仕事であるとか、社会貢献でき、生きがいをもてるような仕事に就きたいという人が増えているように思われる。また、年金制度の充実もあるのだろうが、フルタイム、高収入を望まず、自由時間も大切にしながら、適当に仕事もしたいというスタンスが増えてきている。したがって、サラリーマンＯＢは、働かざるをえないから働くというわけではなく、働くことが生きがいになるから働くというようになりつつある。「もっと福祉を」というよりは「もっと活躍の機会を」といっていることを社会としても認識する必要があろう。

○サラリーマンが地域社会に参加するきっかけを与える情報提供やカウンセリングシステムを提供する。

面接調査によると、現役サラリーマンが近隣、地域社会に参加・交流をもつということは、地域になんらかの問題が発生し、自治会・町内会での対応が必要になったとか、何か特別のことでも起きないとほとんどなさそうである。また、転勤族や長時間通勤族は物理的に地域社会への参加・交流は困難である。そこで、企業に向けて、現役サラリーマンが、地域社会に参加・交流をもち、ソーシャル・スキルを培うことのできる研修を提言したわけだが、社会に向けても、それに呼応するかたちで、現役サラリーマンやサラリーマンＯＢが地域社会に参加・交流がもてるような場を用意していただくことを要請したい。とにかく、サラリーマンは地域社会に参加・交流するきっかけがつかめないと言っている。したがって、地域社会としても、そうしたサラリーマンが地域社会に参加していけるような情報の提供、相談、アクセスしやすい条件作り（時間・場所など）を積極的に進めていく必要であるのではなかろうか。

Ⅱ．調査結果の詳細

１．多変量解析の結果

２．事例研究の結果

Ⅱ. 調査結果の詳細

1. 多変量解析の結果

(1)生きがい獲得の場の構造と規定要因

本調査では、生きがいの構成要素として、①はりあいや活力、②リズムやメリハリ、③心の安らぎや気晴らし、④喜びや満足感、⑤人生観や価値観、⑥生活の目標や目的、⑦自分自身の向上、⑧自己実現や達成感、⑨自己効力感や社会的評価、９種類のカテゴリーを考え、これらの生きがいの要素をどのような生活やつきあいの場で獲得しているかを質問した。回答は、9種類の生きがいの要素それぞれにおいて、①家庭、②仕事・会社、③地域・近隣、④個人的友人、⑤世間・社会、⑥その他、⑦どこにもない、７種類の選択肢から２つまで選ばせた。

ここでの主要な関心は、それぞれの生きがいの要素を獲得する場がお互いにどのように関係しあっているかということである。例えば、「はいりあいや活力」を「家庭」と「仕事」から得ているという人は、「喜びや満足感」をどのような場から獲得する傾向があるか、どの程度似ているのか、違っているかを探ることである。そこで、ここでは、当該の生きがいの要素を獲得する場が似ている場合には、当該の生きがい要素の獲得の場の空間的座標を互いに近く、当該の生きがいの要素の獲得の場が互いに食い違っている場合には、当該の生きがい要素の獲得の場の空間的座標を互いに離して表示し、しかもこれらの座標点を２次元ないし３次元の少数次元に集約して表示してくれる解析として、等質性分析を試みることとした。分析の詳細については、石村 (2001)、Meulman, J. & Heiser, W.(2001)を参照されたい。

分析に際しては、生きがいを獲得する構造に主要な関心があり、そうした生きがい獲得の構造そのものは時代的に大きく変動することはないとの前提に立って、ここでは2001年に実施した第３回の調査データに限定して分析することとした。その結果、分析に使用されたケース数は3200であった。なお、生きがい獲得の場のカテゴリーの一つとして「その他の場」があるわけであるが、具体的にどのような場か不明であることと、これを選ぶ度数が少ないので、本分析から除外した。また、生きがい獲得の場のカテゴリーの一つとして「どこにもない」があるわけであるが、これも生きがい獲得の場を示すことにはつながらず、これを選ぶ度数が少ないので、本分析から除外した。したがって、最終的には、9種類の生きがい要素のカテゴリー×5 種類の生きがい獲得の場の選択の有無を分析することとなった。

①生きがい獲得の場の次元

２つの判別測定の次元を抽出した。第１次元、第２次元の固有値はそれぞれ0.131、0.089であった。表１－１は、２つの判別測定の次元に関連の強い生きがい要素と獲得の場の組み合わせを示したものである。それによると、第１次元は、自己実現や達成感、自分自身の向上、自己効力感や社会的評価、リズムやメリハリ、はりあいや活力、喜びや満足感、生活の目標や目的など多くの生きがい要素の獲得が仕事・会社の場に関連していることを示唆している。このように多様な生きがいの獲得が仕事・会社に関連しているというのは、日本のサラリーマンの特色といえるかもしれない。しかし、安らぎや気晴らし、あるいは人生観や価値観などの獲得は仕事・会社と関連しておらず注目に値しよう。他方、第１次元ははりあいや活力、自己実現や達成感、自己効力感や社会的評価などと比較的弱い関連性があり、これらの生きがい要素は地域・近隣の場で獲得されていることを示唆している。

第２次元は、第１次元に比べて関連性は概ね弱い。自己実現や達成感、自己効力感や社会的評価、自分自身の向上、喜びや満足感などの獲得が地域・近隣に関連し、喜びや満足感、はりあいや活力、安らぎや気晴らしなどの獲得が家庭に関連していることを示唆している。このようにみると、仕事・会社ほどではないが、地域・近隣、そして家庭が多様な生きがい要素獲得の場となっていることが示唆される。また、仕事・会社は第１次元、家庭は第２次元にそれぞれ関連しているのに対して、地域・近隣は両方の次元に関連しており興味深い。地域・近隣が生きがい獲得の場として２面性があることを示唆しているといえよう。

表１－１　生きがい獲得の場の判別測定の次元

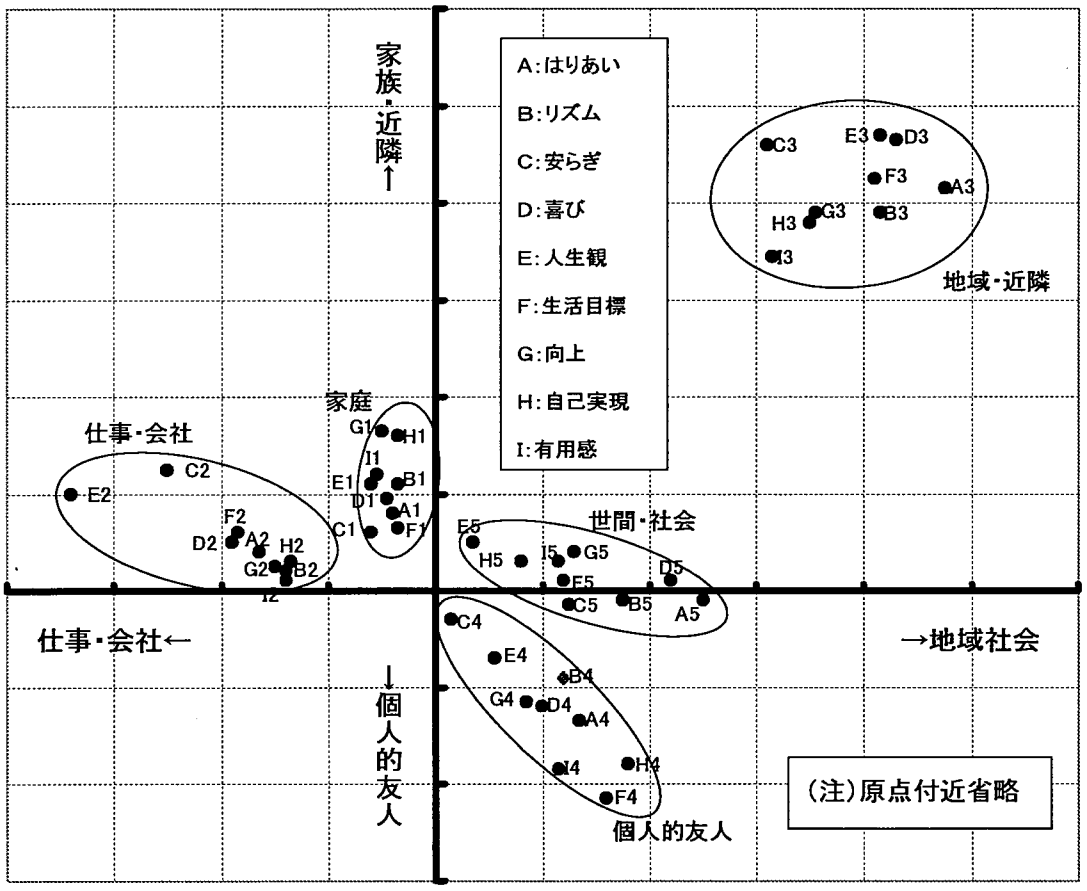
生きがい要素:獲得の場	次元	
	1	2
はりあいや活力:家庭		0.244③
はりあいや活力:仕事・会社	0.383⑤	
はりあいや活力:地域・近隣	0.227⑧	
リズムやメリハリ:仕事・会社	0.389④	
安らぎや気晴らし:家庭		0.235④
喜びや満足感:家庭		0.252②
喜びや満足感:仕事・会社	0.348⑥	
喜びや満足感:地域・近隣		0.216⑦
生活の目標や目的:仕事・会社	0.298⑦	
自分自身の向上:仕事・会社	0.509②	
自分自身の向上:地域・近隣		0.230⑥
自己実現や達成感:仕事・会社	0.513①	
自己実現や達成感:地域・近隣	0.217⑨	0.257①
効力感や評価:仕事・会社	0.479③	
効力感や評価:地域・近隣	0.215⑩	0.234⑤

(注)0.200 未満は表示を省略。番号は次元内の影響力順位。

②生きがい要素獲得の場の空間的布置

等質性分析の数量化の結果にもとづいて、生きがい要素獲得の場の空間的布置を示したのが図１－１である。

図１－１　生きがい獲得の場の空間的布置



それによると、第１次元は、地域・近隣で獲得できる生きがい要素を正の方向に、仕事・会社で獲得できる生きがい要素を負の方向に判別しており、仕事・会社―地域社会の次元と呼ぶことにする。仕事・会社―地域社会の次元で見ると、世間・社会あるいは個人的友人から獲得できる生きがい要素は地域社会から獲得できる生きがい要素の方に近いことが示唆される。他方、家庭で獲得される生きがい要素は仕事・会社―地域社会の次元とはほとんど関連していない。

第２次元は、家庭で獲得される生きがい要素や地域・近隣で獲得できる生きがい要素を正の方向に、個人的友人から獲得できる生きがい要素を負の方向に判別しており、個人的友人―家庭・近隣の次元と呼ぶことにする。世間・社会あるいは仕事・会社で獲得される生きがい要素は個人的友人―家庭・近隣の次元とはほとんど関連していない。

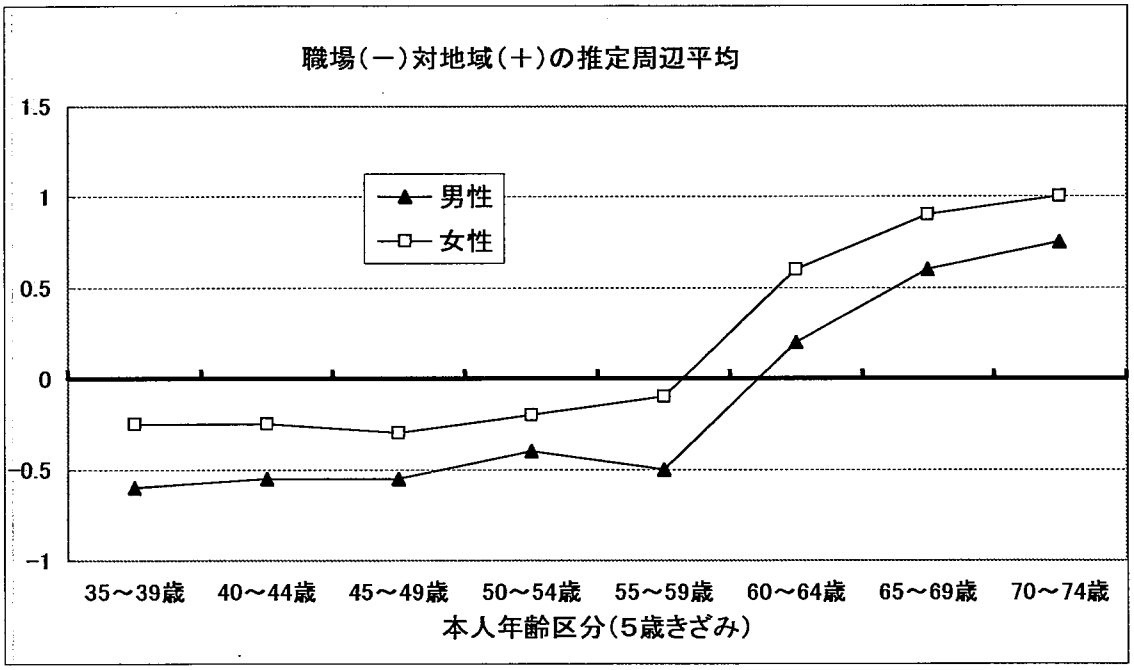
これらをまとめてみると、第１次元は、社会的な活動の場としての、仕事・会社と地域社会という対立軸を示しているのに対して、第２次元は、個人的な活動の場としての、個人的友人と家庭・近隣という対立軸を示している。

③生きがい獲得の場の年齢差と性差の検討

仕事・会社―地域社会の次元のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図１－２である。年齢差と性差は、それぞれ統計的に有意であった（年齢差：F（7，3090）=110.07、p<0.001；性差：F（1，3090）=59.11、p<0.001）。交互作用は認められなかった。ここから男女とも60歳代前半以降、年齢が上がると共に増加し、生きがい要素獲得の場が仕事・会社から地域・近隣へシフトしていく様子が窺われる。これは、60歳以降、定年退職にともない社会的活動の拠点が仕事・会社から地域・近隣へ徐々に移行していくことに呼応しているとみることができる。

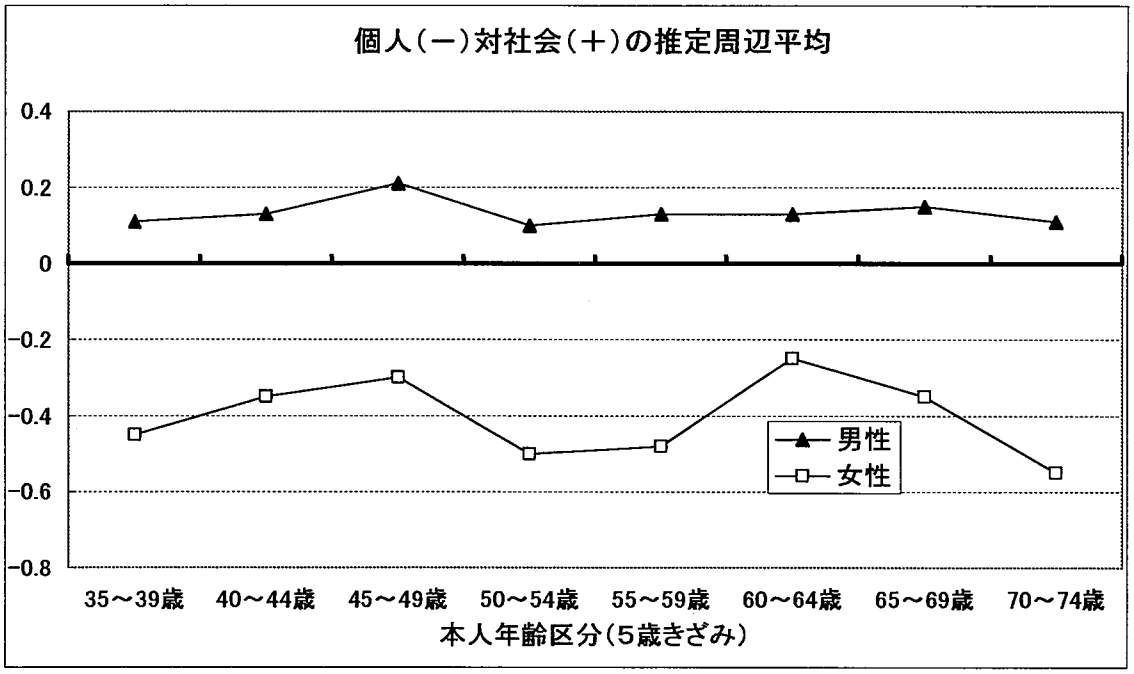
また、男性よりも女性の方がどの年齢でもスコアが高く、男性よりも女性の方が仕事・会社よりも地域・近隣の活動で生きがいを獲得していく傾向が強いことを示唆している。定年退職後ではなく、現役の時点から、女性は男性に比べて地域・近隣の活動で生きがいを獲得する傾向が強い点が注目される。

図1－2　生きがい獲得の場としての仕事・会社―地域社会のスコアの年齢差・性差



個人的友人―家庭・近隣の次元のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図１－３である。性差のみ統計的に有意であった（F（1，3090）=172.00、p<0.001）。年齢差と交互作用は認められなかった。これは、どの年齢においても女性は男性よりスコアが低く、女性は男性に比べて生きがい要素獲得の場が家庭・近隣などよりも個人的友人との交流にウエィトが置かれていることを示している。サラリーマン女性の特色かもしれないが興味深い。

図１－３　生きがい獲得の場としての個人的友人―家庭・近隣のスコアの年齢差・性差



④生きがい獲得の場の規定要因

本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数が生きがい獲得の場にどのように関連しているか検討するために、先の等質性分析により抽出された２つの次元のサンプルスコアを従属変数、本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。

投入された変数は、近隣とのつきあい度、10 種類の地域で所属しているグループ・団体、12 種類の生活満足度、自由時間度、14 種類の自由時間の活動、13 種類の行動特性、9 種類のつきあっている友人・仲間、21 種類の夫婦関係、13 種類の職業意識、7 種類の職業満足度、性別、年齢、最終学歴、未既婚、住宅ローンの有無、健康状態、13 種類の過去 5 年間のライフイベント、世帯年収、収入の余裕、暮し向き、であった。

表１－２は、仕事・会社―地域社会の次元と関連の強い変数を強い順に示したものである。それによると、仕事・会社―地域社会の次元は「世帯年収が高いこと」「現在の仕事内容に対する満足度が高いこと」「収入の余裕」「現在の職業生活全体の満足度が高いこと」「現在の職場の人間関係・雰囲気に対する満足度が高いこと」などと負の関連が強い。したがって、仕事をもち、仕事内容、職場の人間関係、収入など職業生活全般に満足している人は仕事・会社から生きがい要素を獲得しているという意識が高いと予想される。

それに対して、仕事・会社―地域社会の次元は「年齢が高いこと」「定年後、社会活動を通じて知り合った友人・仲間とつきあうこと」「定年後、宗教活動を通じて知り合った友人・仲間とつきあうこと」「定年後、近隣の人、地域で知り合った友人・仲間とつきあうこと」「自由時間が多いこと」「自由時間に仲間と趣味・スポーツ・学習などを行うこと」「自由時間に近隣の人とのつきあいや地域の用事をすませること」などと正の関連が強い。年齢が高く、定年退職していて、自由時間が多く、地域や近隣の活動をしている人は、地域・近隣から生きがい要素を獲得していることが示唆された。

なお、重相関係数は0.728、決定係数は0.530、自由度調整済みの決定係数は0.511であった。したがって、生きがい獲得の場としての仕事・会社―地域社会の次元は、これらの変数によってかなり規定されているとみることができよう。

表1－2　生きがい獲得の場としての仕事・会社―地域社会の規定要因

項目	標準化係数(ﾍﾞｰﾀ)	t	有意確率
世帯の年収	−0.189	−4.183	0.000
本人年齢	0.276	6.249	0.000
現在職業満足度:仕事の内容	−0.195	−3.955	0.000
定年後近隣の人、地域で知り合った友人・仲間	0.150	3.796	0.000
自由時間十分度	0.181	4.120	0.000
定年後社会活動を通じて知り合った友人・仲間	0.179	4.583	0.000
現在職業満足度:職場の人間関係・雰囲気	−0.105	−1.932	0.054
近隣の人とのつきあいや地域の用事	0.119	3.021	0.003
仲間と趣味・スポーツ・学習など	0.127	3.248	0.001
定年後宗教活動を通じて知り合った友人・仲間	0.131	3.431	0.001
収入は十分か	−0.132	−3.135	0.002
個人的な友人・仲間とのつきあい	0.101	2.636	0.009
現在職業満足度:全体として	−0.146	−2.312	0.021

表１－３は、個人的友人―地域・近隣の次元と関連の強い変数を強い順に示したものである。それによると、個人的友人―地域・近隣の次元は「女性であること」「個人的な友人・仲間とのつきあいがあること」「友人・仲間の充足度」「年齢が高いこと」などと負の関連が強い。したがって、とくに年齢の高いサラリーマン女性は、個人的な友人・中との交流を大切にし、そこに満足している人は、個人的友人的関係から生きがい要素を獲得しているという意識をもっているとみられる。

それに対して、個人的友人―家庭・近隣の次元は「近隣の人、地域で知り合った友人・仲間とつきあうこと」「自由時間に近隣の人とのつきあいや地域の用事をすませること」「近隣との交流の充足度」「社会活動を通じて知り合った友人・仲間とつきあうこと」「老人クラブや地域の同好会に所属すること」「消費者団体やボランティア、NPO などの社会活動団体に所属」「家族の理解・愛情の充足度」「配偶者と助け合うこと」「配偶者から愛情が感じられること」「自分は配偶者を頼りにしている」「配偶者の入院」「子どもの結婚」「自由時間に家庭との団らんや家庭サービス」「自由時間に庭いじりや家事など家庭内のことをすること」「現在の仕事の内容の満足度」「現在の職場での地位が高いこと」などと正の関連が強い。地域・近隣で活動しそこでの友人や仲間がいるし、配偶者と暖かい家庭を築き仕事にも満足している人は、家庭・近隣から生きがい要素を獲得しているという意識との関連が強いことが示唆された。なお、重相関係数は 0.551、決定係数は 0.304、自由度調整済みの決定係数は 0.295 であった。

表1－3　生きがい獲得の場としての個人的友人―家庭・近隣の規定要因

項目	標準化係数（ベータ）	t	有意確率
家族の理解・愛情充足度	0.127	5.360	0.000
近隣の人、地域で知り合った友人・仲間	0.144	6.443	0.000
性別	−0.143	−6.461	0.000
個人的な友人・仲間とのつきあい	−0.102	−4.655	0.000
近隣の人とのつきあいや地域の用事	0.117	5.414	0.000
配偶者と助け合うこと	0.073	3.052	0.002
家庭との団らんや家庭サービス	0.103	4.897	0.000
現在職業満足度：仕事の内容	0.082	3.457	0.001
近隣との交流充足度	0.117	4.845	0.000
友人・仲間充足度	−0.119	−5.053	0.000
本人年齢	−0.135	−5.911	0.000
社会活動を通じて知り合った友人・仲間	0.082	3.759	0.000
老人クラブや地域の同好会	0.077	3.624	0.000
現在職業満足度：職場での地位の高さ	0.068	2.819	0.005
庭いじりや家事など家庭内のこと	0.067	3.205	0.001
配偶者から愛情が感じられること	0.063	2.539	0.011
消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	0.055	2.601	0.009
子どもの結婚	0.051	2.444	0.015
PTA・父母会や子供会・青少年団体	0.050	2.441	0.015
自分は配偶者を頼りにしている	0.053	2.280	0.023
配偶者の入院	0.043	2.141	0.032

(2)生きがいの意味の構造と規定要因

生きがいとは何か、という問題については多くの学者・研究者がいろいろなことを議論しているが、一定の共通理解があるわけではない。しかし、生きがいという言葉は、もともと学問的な用語として使われてきたわけではなく、自然発生的に日常的に使用されてきた言葉である。ならば、生きがいとは何か、ということを専門的な用語を駆使して分析的に論じるのではなく、現代のサラリーマン諸氏が生きがいということをどのようなものとして意味づけているのか、日常生活レベルの感覚で調べてみることはそれなりに意義のあることと考えられる。

このような観点から、本調査では、日常生活で言われている生きがいという言葉が意味する内容として、①生活の活力やはりあい、②生活のリズムやメリハリ、③心の安らぎや気晴らし、④生きる喜びや満足感、⑤人生観や価値観の形成、⑥生きる目標や目的、⑦自分自身の向上、⑧自己実現や達成感、⑨自己効力感や社会的評価、⑩その他、１０種類のカテゴリーを考えた。そして、サラリーマン諸氏が生きがいを表すのにどのような言葉がもっとも適当と考えているか、１０種類の選択肢から２つまで選ばせた。

ここでの主要な関心は、サラリーマン諸氏が使用している生きがいという言葉にはどのような意味が含まれているのか、９種類のカテゴリー間の関係から生きがいの意味の構造を探ることにある。そこで、ここでも、生きがいの場の構造の分析と同様に等質性分析を用いることとした。設問では、その他の生きがいの意味についても問うているが、雑多な意味が含まれてくるので本分析からは除外することとした。

①生きがいの意味の次元　２つの判別測定の次元を抽出した。第１次元、第２次元の固有値はそれぞれ0.151、0.137であった。生きがいの場の構造の分析に比べて固有値は低い。したがって、生きがいの意味の構造は生きがいの場の構造ほど明瞭なものではないということが予想される。表１－４は、２つの判別測定の次元に関連の強い生きがいの意味を示したものである。

表1－4　生きがいの意味の判別測定の次元

生きがいの意味	次元	
	1	2
生活の活力やはりあい		0.181③
生活のリズムやメリハリ	0.104⑤	
心の安らぎや気晴らし	0.400①	0.138⑥
生きる喜びや満足感	0.391②	0.158④
人生観や価値観の形成		0.263①
生きる目標や目的		
自分自身の向上	0.126④	0.221②
自己実現や達成感	0.201③	0.151⑤
自己効力感や社会的評価		

(注)0.100未満は表示を省略。番号は次元内の影響力順位。

それによると、第１次元は、心の安らぎや気晴らし、生きる喜びや満足感、自己実現や達成感などに比較的強く関連しており、生活に根ざした基本的欲求を反映しているように思われる。

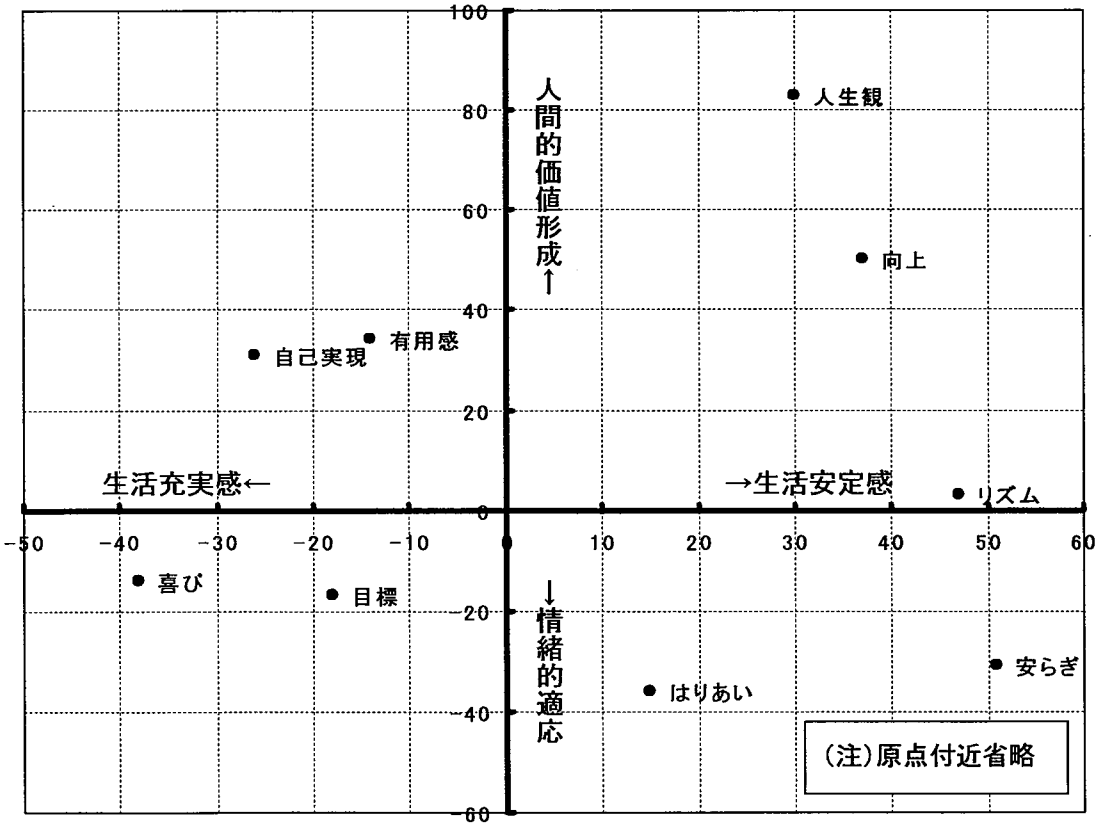
第２次元は、人生観や価値観の形成、自分自身の向上、生活の活力やはりあい、生きる喜びや気晴らしなどに比較的強く関連しており、人間的な価値形成と同時に情緒的安定感を反映しているように思われる。

また、生きる目標や目的、あるいは自己効力感や社会的評価は、これら２つの次元との関連が意外と低い。このことは、サラリーマン諸氏は生きがいを必ずしも明確な生きる目標や目的、あるいは自己効力感や社会的評価に結び付けて捉えているわけではなく、むしろ漠然とした基本的欲求や願望のレベルで捉えていることを示唆しているように思われる。

②生きがいの意味の空間的布置

等質性分析の数量化の結果にもとづいて、生きがいの意味の空間的布置を示したのが図１－４である。第１次元は、詳細に見ると、生活に根ざした基本的欲求を心の安らぎや気晴らし、生活のリズムやメリハリなど生活の安定感を正の方向、生きる喜びや満足感、自己実現や達成感など生活の充実感を負の方向に判別している。したがって、この次元を生活充実感―生活安定感の次元と呼ぶことにする。

図1－4　生きがいの意味の空間的布置



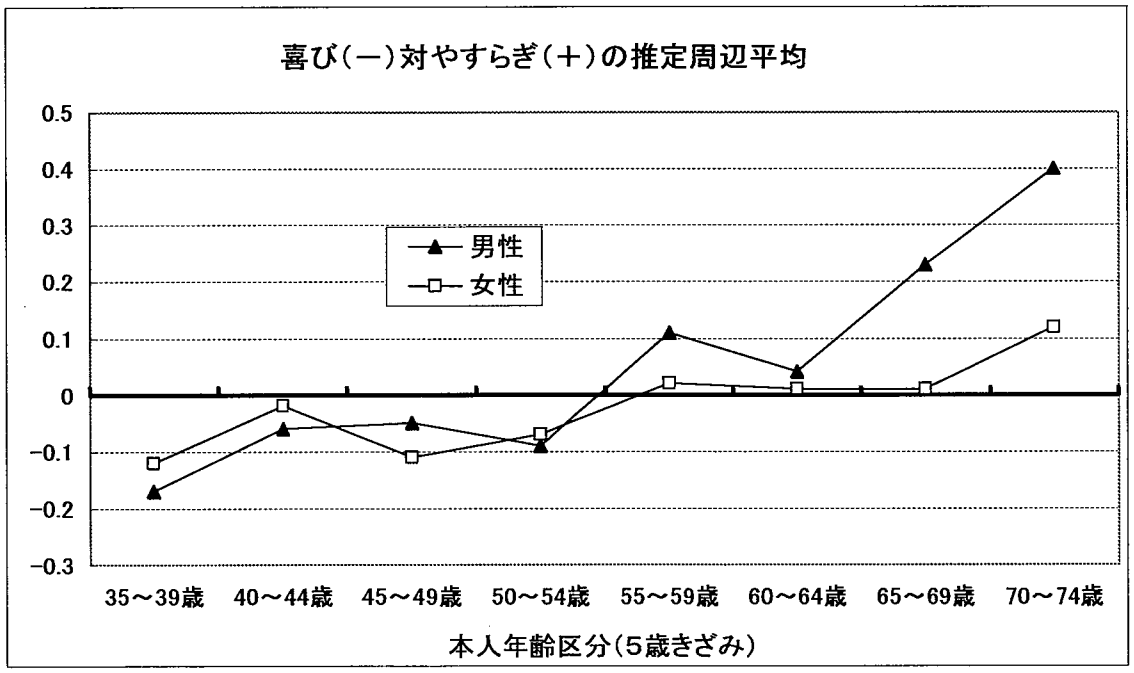
第２次元についてみると、人生観・価値観の形成、自分自身の向上を正の方向、生活の活力やはりあい、心の安らぎや気晴らし、生きる喜びや満足感を負の方向に判別している。そこで、この次元を情緒適応―人間的価値形成の次元と呼ぶことにする。

このような次元が抽出されたということは、生きがいという言葉の使用についてさほど区別して使っているようにはみえないが、日本のサラリーマンは、生きがいという言葉の意味を生活充実感、生活安定感、情緒的適応、人間的価値形成など、少なくとも４通りの意味でとらえていることが示唆された。

③生きがいの意味の年齢差と性差の検討

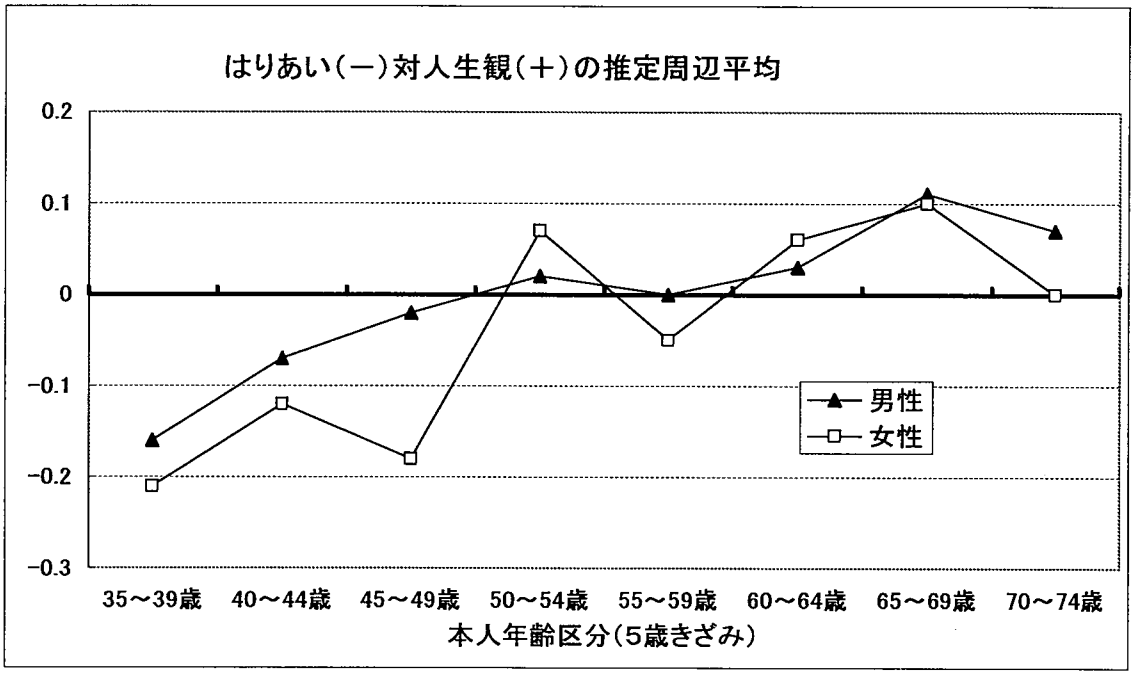
生活充実感―生活安定感の次元のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図１－５である。男女とも年齢が上がるとともに生活充実感から生活安定感へ移行する傾向がみられた。とくに、男性の 60 代後半から 70 代にかけてその傾向が顕著であったが、年齢差は統計的に有意であった（F（7, 3090）=4.23、p<0.001）。性差や交互作用は認められなかった。この結果は、若い頃は生活充実感を求めているが、高齢になると生活充実感よりも生活安定感を希求するようになることを示唆しているように思われる。

図1－5 生きがいの意味としての生活充実感―生活安定感のスコアの年齢差・性差



情緒的適応―人間的価値の次元のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図１－６である。年齢が上がるとともに男女とも情緒的適応から人間的価値形成へ移行する傾向がうかがわれるが、年齢差のみ統計的に有意であった（F (7, 3090) =2.83、p<0.01)。年齢差と交互作用は認められなかった。この結果は、若い頃は、情緒的適応を求めているが、高齢になるとより人間的価値形成を求めるようになる傾向があることを示唆しているように思われる。

図1－6　生きがいの意味としての情緒的適応―人間的価値形成のスコアの年齢差・性差



④生きがいの意味の規定要因

本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数が生きがいの意味にどのように関連しているか検討するために、生きがいの場の規定要因の分析の場合と同様に、等質性分析により抽出された２つの次元のサンプルスコアを従属変数、本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。

表１－５は、生活充実感―生活安定感の次元と関連の強い変数を強い順に示したものである。それによると、生活充実感―生活安定感の次元は「出世より興味のある仕事に専念したい」「健康充足度」「色々なことに興味をもちチャレンジすること」「仕事をするからには多少無理しても出世したい」「幼なじみ・学生時代の友人・仲間」「いつも目標に向かって突き進む」「自宅の購入・建替え」「昇進・昇格」「子どもや孫との別居」などと負の関連が強い。したがって、健康でチャレンジ精神旺盛で目標に向かって突き進む傾向のある人は、生きがいの意味を生活充実感的な側面に求める傾向があると予想される。

それに対して、生活充実感―生活安定感の次元は「仕事は生計をたてるための手段にすぎない」「無理をせずマイペースで進む」「子どもや孫の誕生」「自然とのふれあい充足度」などと正の関連が強い。孫が生まれる年齢に達し、仕事は生計の手段と割り切り、マイペースで、自然とのふれあいを楽しむ余裕のある人は、生きがいの意味を生活安定感的な側面に求める傾向があると思われる。

なお、重相関係数は0.231、決定係数は0.053、自由度調整済みの決定係数は0.048であった。したがって、生きがいの意味としての生活充実感―生活安定感の次元は、これらの変数によって規定される度合いは低く、これらの変数以外にも関連しているものがいろいろとあるとみることができよう。

表1－5 生きがいの意味としての生活充実感―生活安定感の規定要因

項目	標準化係数(ベータ)	t	有意確率
いつも目標に向かって突き進む	−0.056	−2.561	0.011
昇進・昇格	−0.049	−2.448	0.014
仕事は生計を立てるための手段にすぎない	0.069	3.518	0.000
いろいろなことに興味をもち、チャレンジ	−0.067	−3.067	0.002
幼なじみ、学生時代の友人・仲間	−0.050	−2.582	0.010
無理をせずマイペースで進む	0.060	3.005	0.003
健康充足度	−0.067	−3.375	0.001
出世よりも興味のある仕事に専念したい	−0.076	−3.589	0.000
仕事をするからには多少無理しても出世したい	−0.064	−2.974	0.003
子どもや孫の誕生	0.058	2.956	0.003
自宅の購入・建て替え	−0.048	−2.490	0.013
子どもや孫との別居	−0.047	−2.445	0.015
自然とのふれあい充足度	0.043	2.108	0.035

表１－６は、情緒的適応―人間的価値形成の次元と関連の強い変数を強い順に示したものである。それによると、情緒的適応―人間的価値形成の次元は「仕事は生計をたてるための手段にすぎない」「配偶者と互いに頼りにしあうことを重視」「無理せずマイペースで進む」「共通の趣味をもつこと」「家族のだんらんや家庭サービス」などと負の関連が強い。したがって、仕事を生計の手段と割り切り、マイペースで、夫婦関係や家族の団らんを大切にしている人は、生きがいの意味を情緒的適応としてとらえている傾向があるといえよう。

それに対して、情緒的適応―人間的価値形成の次元は「他人にはないじぶんなりの価値観をもつ」「ボランティアなどの社会的活動」「夫婦で価値観や考え方を共有すること」「宗教活動・政治活動」「いつも目標に向かって突き進む」「自由時間にひとりで趣味・スポーツ・学習」「年齢」「自由時間に仕事に関する勉強や残務整理」「色々なことに興味をもちチャレンジ」「社会に役に立つことに充足感を感じる」などと正の関連が強い。したがって、高齢者でボランティア活動や社会的活動、宗教活動や政治活動に熱心で、夫婦共通の

価値観をもち、自由時間もひとりで趣味・スポーツ・学習、あるいは仕事の残務整理をするといった傾向の強い人は、生きがいの意味を人間的価値形成に求める傾向があるといえよう。なお、重相関係数は 0.291、決定係数は 0.085、自由度調整済みの決定係数は 0.079 であった。

表1－6　生きがいの意味としての情緒的適応—人間的価値形成の規定要因

項目	標準化係数（ベータ）	t	有意確率
いつも目標に向かって突き進む	0.070	3.031	0.002
他人にはない自分なりの価値観を持つ	0.093	4.253	0.000
仕事は生計を立てるための手段にすぎない	−0.070	−3.524	0.000
ボランティア活動などの社会活動	0.074	3.653	0.000
宗教活動・政治活動	0.065	3.349	0.001
いろいろなことに興味をもち、チャレンジ	0.055	2.468	0.014
家族との団らんや家庭サービス	−0.043	−2.145	0.032
無理をせずマイペースで進む	−0.057	−2.824	0.005
ひとりで趣味・スポーツ・学習など	0.058	2.934	0.003
仕事に関する勉強や残務整理	0.051	2.535	0.011
本人年齢	0.053	2.582	0.010
配偶者と互いに頼りにしあうこと	−0.065	−3.082	0.002
価値観や考え方を共有すること	0.083	3.443	0.001
共通の趣味をもつこと	−0.059	−2.565	0.010
社会の役に立つ充足度	0.048	2.217	0.027

(3)生きがいの対象の構造と規定要因

生きがいの意味に比べると、生きがいの対象の問はより具体的に生きがいを感じる対象を問うている。すなわち、本調査では、現在、どのようなことに生きがいを感じているか、①仕事、②趣味、③スポーツ、④学習活動、⑤社会活動、⑥自然とのふれあい、⑦配偶者・結婚生活、⑧子ども・孫・親などの家族・家庭、⑨友人など家族以外の人との交流、⑩自分自身の健康づくり、⑪ひとりで気ままに過ごすこと、⑫自分自身の内面充実、⑬その他、１３種類のカテゴリーを考えた。そして、サラリーマン諸氏がどのようなことに生きがいを感じているか、１３種類の選択肢から３つまで選ばせた。

ここでの主要な関心は、１２種類の生きがいの対象間の関係から、生きがいの対象の構造を探ることにある。そこで、ここでも、これまでの分析と同様に等質性分析を用いることとした。設問では、その他の対象も問うているが、雑多な対象が含まれてくるので、本分析からは除外することとした。

①生きがいの対象の次元　２つの判別測定の次元を抽出した。第１次元、第２次元の固有値はそれぞれ 0.126,0.100 であった。生きがいの場の構造の分析に比べて固有値は低い。したがって、生きがいの対象の構造も生きがいの場の構造ほど明瞭なものではないということが予想される。表１－７は、２つの判別測定の次元に関連の強い生きがいの対象を示したものである。それによると、第１次元は、仕事、子ども・孫・親などの家族・家庭、趣味、配偶者・結婚生活、ひとりで気ままに過ごす、自然とのふれあい、などに比較的強く関連しており、ここからどのような次元であるかは一概に言えない。

第２次元は、自分自身の内面的充実、趣味、自分自身の健康づくり、ひとりで気ままに過ごす、スポーツ、友人など家族以外の人との交流、などに比較的強く関連しており、第１次元とは異なる印象があるものの、ここからどのような次元であるかは一概に言えない。

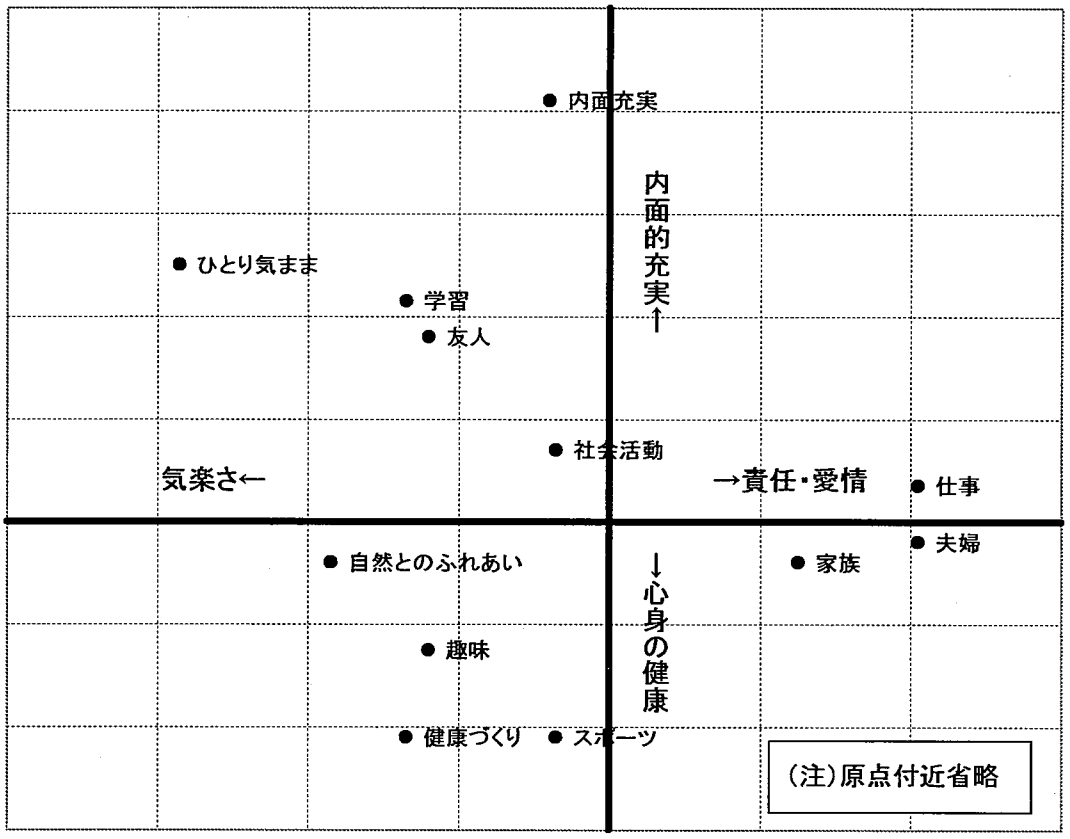
表1－7　生きがいの対象の判別測定の次元

生きがいの対象	次元	
	1	2
仕事	0.361①	
趣味	0.203③	0.206②
スポーツ		0.119⑤
学習活動		
社会活動		
自然とのふれあい	0.122⑥	
配偶者・結婚生活	0.197④	
子ども・孫・親など家族・家庭	0.318②	
友人など家族以外の人との交流		0.116⑥
自分自身の健康づくり		0.151③
ひとりで気ままに過ごす	0.162⑤	0.133④
自分自身の内面的充実		0.384①

(注)0.100 未満は表示を省略。番号は次元内の影響力順位。

②生きがいの対象の空間的布置　等質性分析の数量化の結果にもとづいて、生きがいの対象の空間的布置を示したのが図１－７である。第１次元は、仕事、配偶者・結婚生活、子ども・孫・親など家族・家庭など責任のある対象を正の方向、ひとり気ままに過ごす、健康づくり、趣味、学習活動、自然とのふれあいなど責任をもたず、気ままに選択できる対象を負の方向に判別している。したがって、第１次元を、気ままな生活－責任ある生活の次元と呼ぶことにする。

図1－7　生きがいの対象の空間的布置



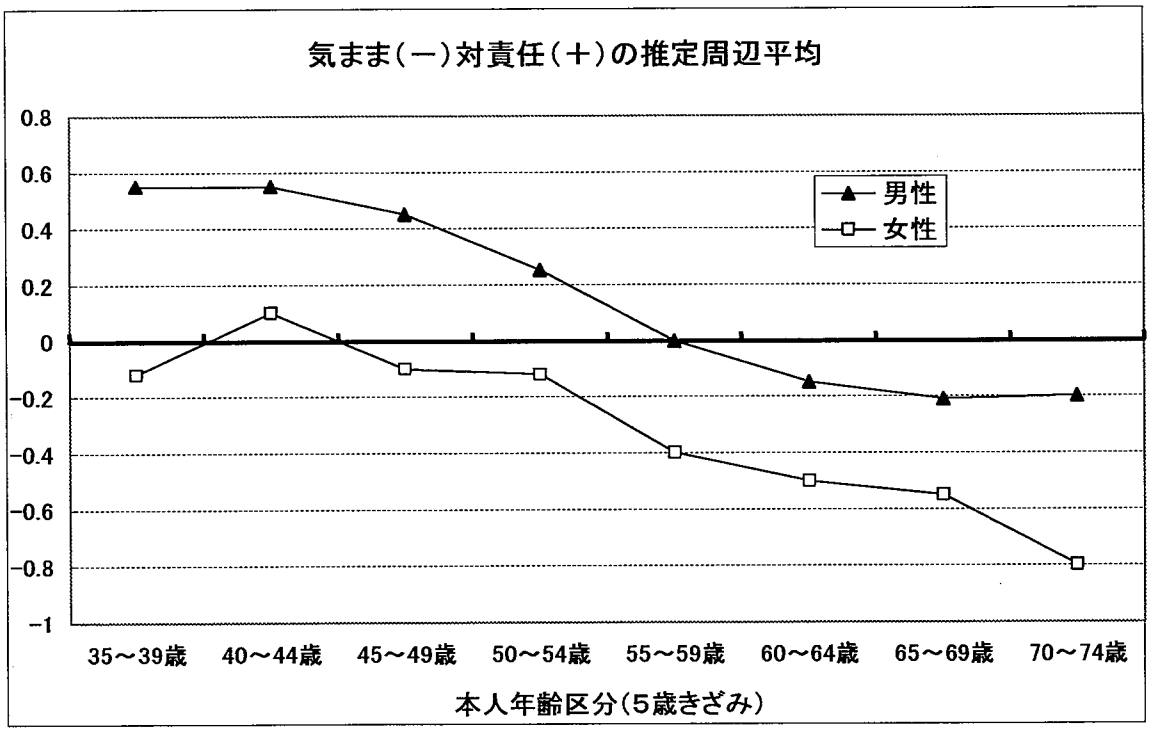
第２次元についてみると、内面的充実、ひとり気まま、学習、友人など家族以外の人との交流などを正の方向、健康づくり、スポーツ、趣味などを負の方向に判別している。そこで、この次元を内面的充実―健康づくりの次元と呼ぶことにする。

これらの結果から、日本のサラリーマンは、生きがいの対象を、責任のある仕事や家庭、気ままな趣味、内面的充実、健康づくり、と大きく４つに分けてとらえているように思われる。

③生きがいの対象の年齢差と性差の検討

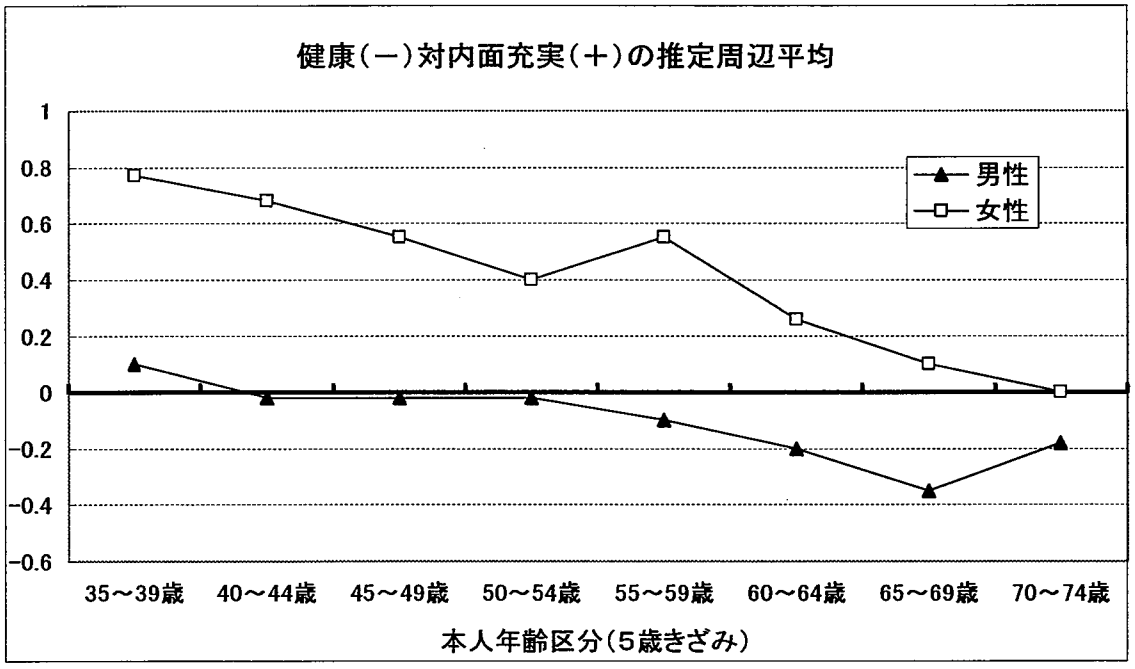
気ままな生活―責任ある生活の次元のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図１－８である。男女とも年齢が上がるとともに責任から気ままへ移行する傾向がみられた。また、男性よりも女性の方がどの年齢でもスコアが低く、男性よりも女性の方が責任ある生活よりも気ままな生活を求める傾向が強いことを示唆している。これらの年齢差と性差は統計的に有意であった（年齢差：F（7, 3090）=28.94, p<0.001；性差：F（1, 3090）=131.03, p<0.001)。交互作用は認められなかった。この結果は、若い頃は責任ある生活に生きがいを感じるが、年をとるにつれて気ままな生活の方がよくなってくることを反映しているとみられる。また、サラリーマン女性はサラリーマン男性に比べて責任ある地位についている人が少なく、そうした社会的地位の男女差が影響している可能性も考えられる。

図1－8　生きがいの意味としての気まま―責任のスコアの年齢差・性差



健康づくり—内面的充実の次元のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図１－９である。男性と女性で年齢曲線がやや異なる。女性は年齢が上がるとともに内面的充実から健康づくりの方へ移行する傾向が窺われるが、男性は女性に比べてどの年齢においても健康づくり志向の方が強い。年齢差と性差が統計的に有意であった（F（7，3090）=12.66、p<0.001；性差：F（1，3090）=161.10、p<0.001）。交互作用は認められなかった。この結果は、男女とも、若い頃は健康づくりよりも内面的充実を求める傾向があるが、とりわけ女性にその傾向が強い。しかし、女性も年をとるとともに健康づくりを大切に考えるようになることを示している。長寿時代、とくに女性が長寿であるわけであるが、健康願望の現われと見ることができよう。他方、男性が若い頃から健康づくり志向が強いのは、男性がそれだけストレスの強い環境におかれていることの表れなのかもしれない。

図１－９　生きがいの意味としての健康づくり—内面的充実のスコアの年齢差・性差



④生きがいの対象の規定要因

本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数が生きがいの対象にどのように関連しているか検討するために、生きがいの場の規定要因の分析の場合と同様に、等質性分析により抽出された 2 つの次元のサンプルスコアを従属変数、本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。

表１－８は、気ままな生活—責任ある生活の次元と関連の強い変数を強い順に示したものである。それによると、気ままな生活—責任ある生活の次元は多数の変数と関連しているが「熱中できる趣味の充足度」「自然とのふれあい充足度」「自分の世界や個性を大切に

する」「自由時間は個人的な友人・仲間とのつきあい」「趣味・パソコン教室・スポーツや学習を通じて知り合った友人・仲間」「年齢」などと負の関連が強い。したがって、趣味や自然とのふれあい、個人的友人との交流に熱心な高齢者は、気ままな生活に生きがいを求める傾向があると予想される。

それに対して、気ままな生活—責任ある生活の次元は「家族との団らんや家庭サービス」「仕事の張り合いの充足度」「子どもや孫の誕生」「現在の仕事の満足度」、「自分は配偶者を愛している」「家族の理解・愛情の充足度」「世帯の年収」などと正の関連が強い。したがって、仕事や収入に満足し、配偶者や家族に恵まれている人は仕事や家族に責任をもつことに生きがいを感じる傾向があると思われる。

なお、重相関係数は0.613、決定係数は0.375、自由度調整済みの決定係数は0.365であった。したがって、生きがいの対象としての気まま—責任の次元は、これらの変数によって規定される度合いは大きいとみることができよう。

表1－8　生きがいの対象としての気ままな生活—責任ある生活の規定要因

項目	標準化係数(ベータ)	t	有意確率
家族との団らんや家庭サービス	0.137	6.794	0.000
仕事のはりあい充足度	0.155	6.016	0.000
熱中できる趣味充足度	−0.171	−7.502	0.000
自分は配偶者を愛している	0.103	4.206	0.000
世帯の年収	0.088	3.757	0.000
個人的な友人・仲間とのつきあい	−0.080	−3.964	0.000
自然とのふれあい充足度	−0.107	−4.997	0.000
家族の理解・愛情充足度	0.094	4.182	0.000
昇進・昇格	0.055	2.557	0.011
子どもや孫の誕生	0.101	5.073	0.000
趣味・パソコン教室・スポーツや学習を通じて知り合った友人・仲間	−0.077	−3.730	0.000
指導者的立場に立とうとする	0.059	2.680	0.007
自分の世界や個性を大切にする	−0.082	−4.025	0.000
本人年齢	−0.072	−3.025	0.003
現在職業満足度:仕事の内容	0.107	4.238	0.000
PTA・父母会や子供会・青少年団体	0.048	2.487	0.013
いつも目標に向かって突き進む	0.060	2.657	0.008
性別	−0.036	−1.649	0.099
行楽・ドライブなど	−0.043	−2.251	0.024
配偶者と価値観・考え方が似ている	0.071	3.075	0.002
社会活動を通じて知り合った友人・仲間	−0.050	−2.501	0.012
町内会・自治会や防災・防犯協会	0.052	2.692	0.007
配偶者と互いに理解しあうこと	0.064	2.883	0.004
配偶者の独自の趣味や行動を尊重している	−0.052	−2.380	0.017
共通の趣味をもつこと	−0.051	−2.474	0.013
職場・職域関係の団体・グループ	0.047	2.480	0.013
収入は十分か	0.093	3.234	0.001
住宅ローン	−0.062	−2.268	0.023
学習・研究の会や教養教室	−0.039	−1.962	0.050

表１－９は、健康づくり―内面的充実の次元と関連の強い変数を強い順に示したものである。それによると、健康づくり―内面的充実の次元は「熱中できる趣味の充足度」「趣味やスポーツのクラブ・サークル」「近隣との交流度」「自由時間に仲間と趣味・スポーツ・学習など」「子どもや孫の誕生」「自分は配偶者を理解している」などと負の関連が強い。したがって、孫のできる年齢になり、趣味に熱中している人は、健康づくりに生きがいを感じる傾向があるといえよう。

それに対して、健康づくり―内面的充実の次元は「性別」「学習・研究の会や教養教室」「友人・仲間の充足度」「現在、宗教団体・政治団体のリーダー」「社会活動を通じて知り合った友人・仲間とのつきあい」「他人にない自分なりの価値観をもつ」などと正の関連が強い。したがって、女性で自分なりの価値観をもち、宗教団体や政治団体のリーダーをしたり、社会的活動を通じて知り合った友人・仲間とつきあってたりする人は内面的充実に生きがいを感じる傾向があるといえよう。なお、重相関係数は 0.476、決定係数は 0.226、自由度調整済みの決定係数は 0.218 であった。

表1－9　生きがいの対象としての健康づくり―内面的充実の規定要因

項目	標準化係数（ベータ）	t	有意確率
熱中できる趣味充足度	−0.206	−7.878	0.000
性別	0.175	7.538	0.000
趣味やスポーツのクラブ・サークル	−0.097	−3.764	0.000
学習・研究の会や教養教室	0.118	5.260	0.000
子どもや孫の誕生	−0.073	−3.312	0.001
行楽・ドライブなど	−0.065	−2.996	0.003
現在宗教団体・政治団体リーダー	0.079	3.659	0.000
自分は配偶者を理解している	−0.070	−3.015	0.003
他人にはない自分なりの価値観を持つ	0.071	3.202	0.001
個人的な友人・仲間とのつきあい	0.064	2.720	0.007
近隣との交流充足度	−0.090	−3.661	0.000
友人・仲間充足度	0.093	3.689	0.000
仲間と趣味・スポーツ・学習など	−0.087	−3.369	0.001
社会活動を通じて知り合った友人・仲間	0.071	3.137	0.002
考えごとやめい想	0.064	2.931	0.003
一緒に行動すること	−0.059	−2.605	0.009
本人年齢	−0.052	−2.215	0.027
自分自身の入院	−0.047	−2.146	0.032

(4)生きがいの有無の規定要因

定年退職すると、毎日の活動の喪失、収入の喪失、社会的接触の喪失などから生きがい喪失に陥るサラリーマンが少なからずいるのではないかと予想されたが、本調査では、予想に反して、生きがいを感じることができないのは、定年退職後の人よりもむしろ現役のサラリーマンに多いということが明らかとなった。定年ショックは特別な状況で起きるかもしれないが、生きがいをかじれないというほどのものではないように思われる。一般のサラリーマンの場合には、定年は十分に予想されるイベントであるし、それなりに対応しているので生きがい喪失が生じるほどのショックではないのかもしれない。

しかし、生きがいを感じることができないというのが現役に多いということの方が問題であろう。そこで、本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数が生きがいの有無にどのように関連しているか検討するために、生きがいの有無を従属変数、本調査で得られたサラリーマンの種々の属性や生活に関する変数を独立変数としてステップワイズ法による判別分析を行った。

現在そのような生きがいをもっているかの問に対する回答を、「もっている」と、そうでない回答に2分した。すなわち、「もっていない」「前はもっていたがいまはもっていない」「わからない」を合併処理した。投入された変数は、近隣とのつきあい度、10 種類の地域で所属しているグループ・団体、12 種類の生活満足度、自由時間度、14 種類の自由時間の活動、13 種類の行動特性、9 種類のつきあっている友人・仲間、21 種類の夫婦関係、13 種類の職業意識、7 種類の職業満足度、性別、年齢、最終学歴、未既婚、住宅ローンの有無、健康状態、13 種類の過去 5 年間のライフイベント、世帯年収、収入の余裕、暮し向き、であった。対象者は、第 3 回の調査対象者 3200 名であった。少なくとも判別変数に欠測値のあるケースは 1412 (44.1%) に上ったが、平均値を代入することとした。

固有値は 0.302、正準相関は 0.482 であった。標準化された正準判別関数係数は、表１－１０に示した。

表1－10 標準化された正準判別関数係数

いつも目標に向かって突き進む	0.411
自分には他人にない優れたところがある	0.277
どんなところでも結構楽しみを見出す	0.285
夫婦の対話がある	0.351
現在の仕事の内容の満足度	0.382
本人年齢	0.257

それによると、もっとも関連の強い判別変数は、「いつも目標に向かって突き進む」という達成動機にかかわるパーソナリティ変数であった。そのほかにも、「自分には他人にない優れたところがある」という自尊心に関する変数、「どんなところでも結構楽しみを見出す」という楽天的性格に関する変数とパーソナリティ関連の変数が、残った６個の判別変

数の半数を占めている。したがって、ある意味で、生きがいをもっているか、いないかという感覚はかなりパーソナリティに関連しているといえよう。

しかし、パーソナリティでそのすべてが決まるわけではなく、現在の職業満足度や夫婦との対話、年齢の影響がうかがわれた。生きがいの場の分析で示されたように、日本のサラリーマンの場合には、仕事・会社を通じていろいろな種類の生きがい要素を獲得しているとみられる。そうした意味で、サラリーマンにとっては、とりわけ仕事の内容の満足度の影響が生きがいの獲得に大きな影響をもつと予想される。また、サラリーマンが、生きがいを感じ、生きがい喪失を予防する上で、夫婦の対話がきわめて重要であることが示唆された。年齢の影響は、生きがいを感じられないとする回答が、サラリーマンＯＢよりも現役のサラリーマンに多いという現状を物語るものである。この原因については、本分析からうかがうことはできないが、現在の組織環境や雇用環境のストレスが影響していると推察される。

これら判別変数による「生きがいをもっている」人の判別的中率は 90.2%であったが、「それ以外の回答」の判別的中率は、41.2%と低く、全体としての判別的中率は 74%であった。

表1－11　判別分析による判別的中率の結果

元のデータ	判別結果		合計
	生きがいをもっている	それ以外の回答	
生きがいをもっている	1,934(90.2%)	211(9.8%)	2,145(100.0%)
それ以外の回答	620(58.8%)	435(41.2%)	1,055(100.0%)

2. 事例研究の結果

(1)事例研究の目的と方法

ｉ)目的

定量的・統計的な分析はサラリーマンの生きがい獲得の全体的な特徴を物語るものであり、サラリーマン個々人の生きがい獲得のプロセスを具体的に検討するためには、事例研究が必要になってくる。その上で、個別の事例についての十分な知識のもとに全体的な分析の結果を考察すること、あるいは逆に全体の分析結果についての十分な知識のもとに個別の事例を考察することが、現象の正確な理解にとって必要不可欠な態度であると考えられる（岩淵，1997)。そのような観点から、「第３回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」のアンケート調査（定量的調査：平成13年10～12月実施）を補完する定性的調査として事例研究を実施し、「サラリーマンの生きがい」の実態についての理解を深めることとした。すなわち、本事例研究では、アンケート調査において回答者が感じている生きがいの意味を選択させた後、そうした生きがいの有無を問うているが、この質問に対する４種類の回答、すなわち「現在、そうした生きがいをもっている」「前はそうした生きがいをもっていたが、今はもっていない」「現在、そうした生きがいをもっていない」「わからない」それぞれの背景にある個々人の生活と生きがいの質について検討することを目的としている。

ii)対象者の選定

上記アンケート回答者のうち、「別の意見聴取に応じてもよい方」の欄に氏名・住所等を記入した方で、首都圏在住の方（東京都 40 名、神奈川県 21 名、千葉県 18 名、埼玉県 17 名）合計 96 名から個別面談モニターを募集した。そのうち、生きがいの有無に関する調査に対する回答で「生きがいをもっている」と回答した者 50 名、「前はもっていたが今はもっていない」と回答した者 9 名、「もっていない」と回答した者 8 名、「わからない」と回答した者 25 名、不明 4 名であった。このうち面談方法、面談内容、面談場所、面談日時、謝金、録音等による記録の保管、プライバシーに配慮した上での公表への同意などについて了解の得られた 13 名に対して面接調査を実施した。そのうち、生きがいの有無に関する調査に対する回答で「生きがいをもっている」と回答した者 7 名、「前はもっていたが今はもっていない」と回答した者 2 名、「もっていない」と回答した者 2 名、「わからない」と回答した者 2 名であった。

iii)面接調査の方法

① 面談方法：「第３回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」の研究会の副座長兼作業部会リーダーの西村純一（東京家政大学文学部教授）が面接を担当し、事務局としてシニアプラン開発機構より 1 名が同席した。なお、Ｅ氏のみ、自宅で面接した際に、妻が同席した。約 2 時間、面談（フリートーキング）の予定であったが、実際には話の

流れで 3〜4 時間に及ぶことが多かった。

② 面談内容：退職前後のサラリーマンの生活（職場、家庭、地域等）と生きがいに関して、各モニターの職業経験・人生経験に基づき、自由かつ率直に述べていただく。また、面談の最後に、解釈の補助手段として、定年前後の自分にとっての大切な人とのつながりを検討するためにコンボイ調査（Kahn & Antonucci, 1980）と自分の人生の好・不調感を人生に沿って検討するためにライフカーブの調査（シニアプラン開発機構，1992）を実施した。

③ 面談場所：各モニター自身が各モニターの自宅もしくは東京年金基金センター（シニアプラン開発機構が入居）の会議室のいずれかを選択。E氏とH氏は自宅で面接した。

④ 面談日時：平成 15 年 3 月〜6 月の間で、各モニターのスケジュールの都合に合せて設定。

⑤ 謝金：モニター 1 人につき交通費込みの一定額を面談終了後支払。

⑥ その他：個別面談の内容を録音し、テープ起しをするが、あくまでも研究報告書作成の参考素材とするものであり、発言内容全部を忠実に再現するわけではないこと、研究の公表に際しては原稿をチェックしてもらい、各モニターのプライバシーに十分に配慮することで予めご了解を得た。

ⅳ）事例研究の進め方

① 対象者の生活歴と現況：対象者の性別や年齢段階などのプロフィール、サラリーマン生活を中心にした略歴、現在の就業や生活の状況、家族の状況、健康状態などの現況、また現在かかえている問題や希望についておおまかに述べる。ただし、個人のプライバシーに配慮し、おおまかな表現にしたり、適宜、偽装をほどこした点があることをお断りしておく。

② 対象者の生きがい（内面生活）：対象者の生活歴と現況では、対象者がサラリーマンとしてこれまでどのような人生経験をしてきたか、現在どのような生活をしているか、おおまかに描き出すことを狙いとしている。これに対して、対象者の生きがい（内面生活）では、対象者が何を生きがいと感じて生きてきたか、現在、何を生きがいと感じているか、その生きがいを中心とした内面生活に迫ることを狙いとしている。本人のこれまでの生活経験、人生経験に沿って、その人らしい生き方、生きがいについての考え方を理解し、面接調査の素材を生かしてそれを簡潔に表現するようにした。ただし、ここも個人のプライバシーに配慮し、おおまかな表現にしたり、適宜、偽装をほどこした点があることをお断りしておく。

③ 補助的にコンボイ調査やライフカーブの結果について分析検討する。

④ 事例から示唆されること：生きがいの有無について、それぞれの事例から示唆されることを端的に指摘する。

(2)事例研究の結果

ｉ)現在、生きがいをもっている事例

1)定年を機に趣味や地域社会での活動を広げていった例(A氏)

①A氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味：「生きる喜びや満足感」、「生きる目標や目的」

・そのような生きがいの有無：「持っている」

②A氏の生活歴と現況

60 歳代後半の男性。大学を出て、食品関係の会社に就職。しかし、ホテルマンにあこがれ、ホテル学校に入学。卒業後、ホテル関係の会社に入社。東京、大阪、海外など営業畑を歩き、40 歳代でホテルの免税店長・副支配人。帰国後、一転して人事部教育課発足と同時に社員教育に携わる。研修担当で社内を回っていたので、顔が売れた。その間、並行して社内報の編集を任され、役員や組合の委員長、調理長などの取材を通じて、いろいろな世界を見ることができた。ホテルの開業準備室に移動し、新入社員その他の研修に従事。58 歳で子会社に出向し、保険部長として定年退職した。定年退職のときは、解放感で嬉しかった。

定年退職後は、失業保険を 10 ヶ月貰い、まったく仕事はしていなかった。生活のためだけにお金を稼ぐのはナンセンスだと思っていた。もともと執筆が好きであったが、定年間近の頃から新聞への投書を始めた。いまでは投書マニアである。また、63 歳の頃、定年で生きがいを喪失するなどとんでもない、定年退職後の 20 年間(平均余命)を無為に過ごすのはもったいないことを訴えたくて本を自費出版した。(タイトル：二度とない人生だから)

年金で生活していたが、人材派遣会社の紹介で、現在は、病院の日曜・祭日の受付の仕事、木曜と金曜は、ショッピングセンターの案内のパートに就いている。就職に際しては大手のホテルマンとしてのキャリアや客をもてなすホスピタリティが有効であったという。また、善意通訳者の会の事務局長など多数の地域サークルに関わっている。

教育課時代はサラリーマン生活が一番充実していたが、私生活の面ではたいへんな困難をかかえていた。家族問題がこじれ、40 歳代に協議離婚することになる。二人の子どもたちは妻が引き取った。その後、妻は亡くなったが、娘や孫との交流は続いている。２０年来つきあっている女性がいるが、その女性の子どもたちが結婚したら再婚を考えている。しかし、お互いに籍は入れない方針である。現在は、首都圏近郊に一人暮らしである。幸い健康で、交際範囲は広く年賀状は 400 通あまりに達している。

老いについては、あるがままに肯定的に受け入れるつもりであるが、歳は考えず、服装は若作り・ジーパン主義で行きたいと思っている。二度とない人生だから、定年後のフリーになった 20 年間 (平均余命)、自分の本当の人生を花開かせること、家に閉じこもらず、極力、外へ出ること、好奇心を失わないことが大切であると考えている。

③A氏の生きがいの分析

定年退職したとき、働くのはもういいと思ったという。お金のためだけに働くのはナンセンスだ。失業保険を 10 ヶ月受給し、その後は年金だけでやってきた。しかし、4 年間仕事をしないでいると張り合いがなく、むなしくなってきた。また、サークル活動が 20 を越し、交際範囲が広いため、年金だけでやっていくのはやや余裕がない。再び仕事についた背景には、そうした動機があった。したがって、仕事が生きがいというほどのことはないが、はっきりとした目的意識をもって、それなりに打ち込んでいる。事務職員のいない日曜・祭日に受付をする病院までは通勤車で 20 分であるが、木曜・金曜に接客をするショッピングセンターまでは通勤に 2 時間かかる。年齢的にきついので前日からコンディションを整えているという。

しかし、A氏の現在の生きがい獲得の場は、仕事よりも、むしろ趣味であり、それを通じての友人など家族以外の人との交流にある。A氏は、新聞の隅々、タウン誌、チラシ広告などに目を通し、そこから地域への溶け込みの手がかりを得るのだという。例えば、市の広報誌でマジック教室を見つけ、入会して、1 年間の講習を受け、マジックのサークルを立ち上げた。そのほか、タウン誌のフォトサークル、アマチュア無線の同好会、ダンス、善意通訳者の会、市政モニター、消費者生活モニター、昭和九年会、市民運動など 20 以上のサークル活動に関わっている。なかでも善意通訳者の会は、発足時のメンバーのひとりで、英語は下手であるが、57 歳の在職中から関わってきた。異業種間の交際が定年後の財産になるのではないか、また、マンネリ化したサラリーマン生活に刺激を与えたいということがあって入会したという。現在、事務局長として打ち込んでいる。小さな親切運動が原点で、困っている外国人がいたら助けて上げましょうという精神でやっている。昨年サッカーW杯のときは八面六臂の大活躍であった。長年ホテルマンとして培ってきたホスピタリティの精神がここにも表れているように感じた。

とにかくA氏の活動範囲、交際範囲は広く、余暇・交際費を補填するためにパートを始めたというのも頷けよう。ただ、このように家族以外の友人とのネットワークを広げている背景には、離れ離れとなった子どもたち・孫への想い、寂しさもあるようにも感じた。調査票では、生きがい獲得の場として家族を選ばず、また、生きがいの対象としても子ども・孫・親などの家族・家庭を選んでいなかったが、面談の中では、これらを加えて欲しいと述べていた。離婚後、娘の卒業式を見に行ったエピソード、亡くなった妻への想いから、家族への想いは特別のものがあるように感じた。

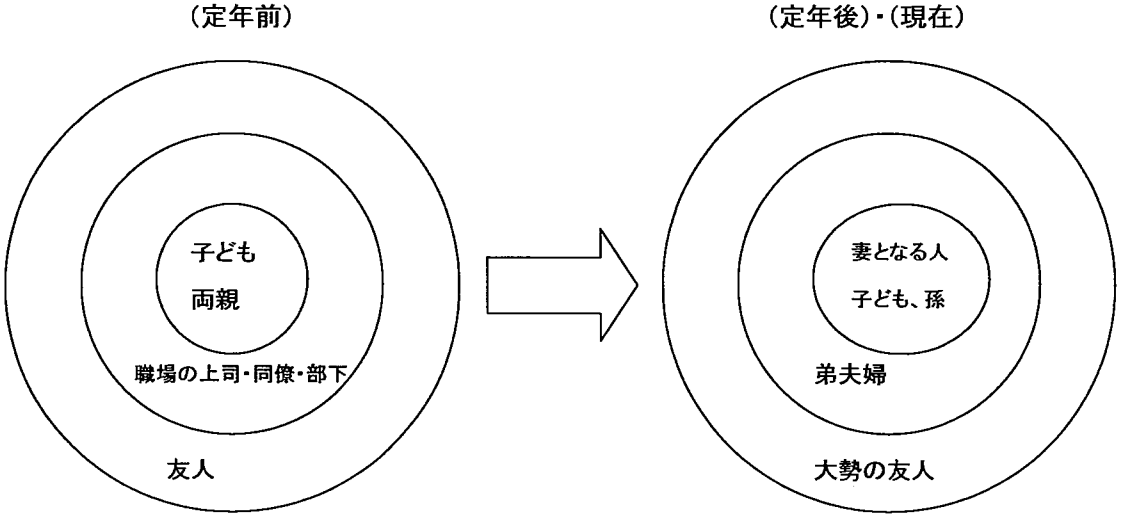
また、特記すべきこととして、A氏の場合には、社内報の編集、新聞への投書、自費出版と執筆活動が内面生活の重要な部分を占めていることである。自らの考えを世に問い、それに対する反響を得ることに、大きな喜びと満足感を感じていることがうかがわれた。また、もともと本好きのようであったが、執筆活動への動機づけは、高校時代に県の懸賞論文に応募して入賞したことがきっかけとなったようだ。現在「二度とない人生だから」の改訂版を出版する予定である。

④A氏のコンボイの分析

退職前と退職後とで大きく変化している。先ず、自分にとって一番大切な人として、定年前は、両親と子どもを挙げている。複雑な家族とのトラブルがもとで、妻とは離別しており、この中には妻は入っていない。しかし、離れて暮らしてはいるが、子どもは自分にとってもっとも大切な存在であった。また、家族との葛藤の中で妻と別れることになったわけだが、面談の中では妻にすまないという気持ちと妻への愛情を述べていた。

定年後は、両親や別れた妻が亡くなり、子どもに孫が加わっている。また、新たに将来、妻となる人物を挙げている。離婚後、お見合いして以来のつきあいであるが、相手にも子どもがおり、その子どもたちが全員結婚したら、結婚する予定である。第２円には、定年前は職場の上司・同僚・部下が上げられているが、定年後は、職場関係は圏外に消えている。第２円には、弟夫婦が入ってきている。第３円は、定年前はたんに友人となっているが、定年後は、大勢の友人と書かれている。これは、定年後の趣味や地域活動を通じた友人のネットワークの拡大を反映しているとみられる。

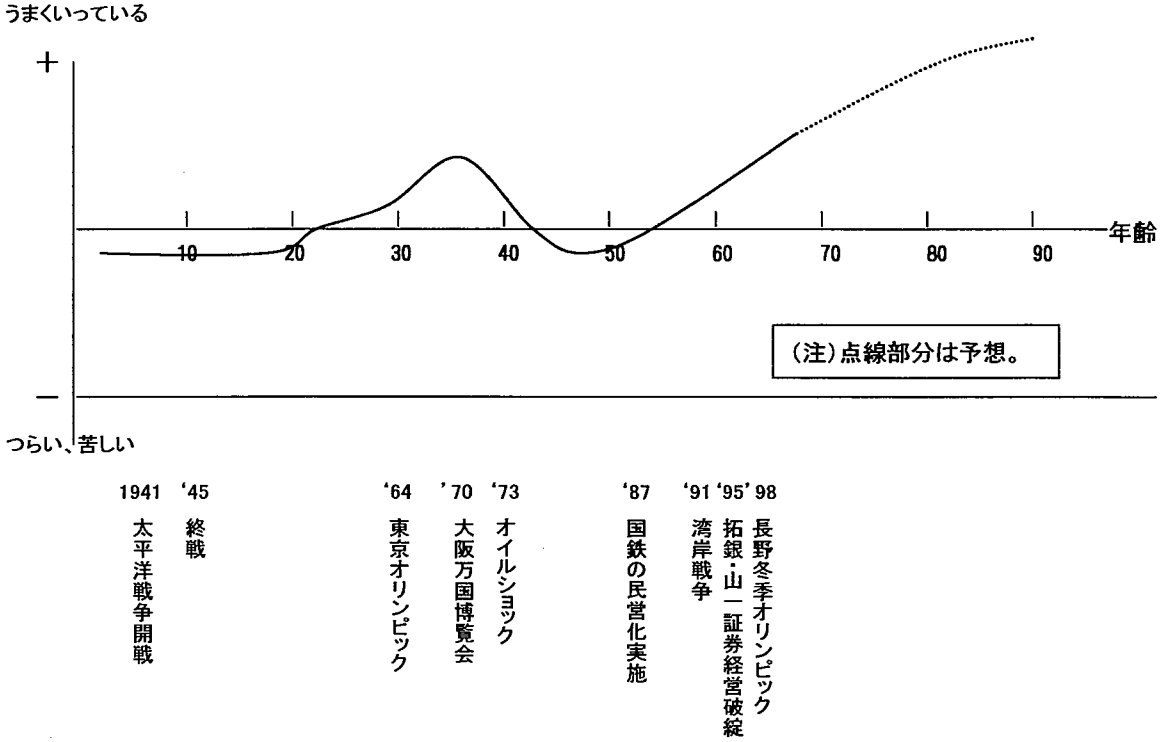
図2－1　コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(A氏)



⑤A氏のライフカーブの分析

幼いときに母を亡くし、20 代くらいまではややマイナス。大学を出て仕事に就く頃からやや上昇し、結婚し家庭をもち、仕事も充実していた 30 代後半がピーク。その後、協議離婚などがあり低下する。社内教育制度づくりの仕事に移動した頃から徐々に上昇に転じ、定年後も、その勢いが続いている。定年後 4 年間はボランティアやサークル活動、本の自費出版など仕事はないが充実した生活を送る。しかし、その後、仕事のない生活に虚しさをおぼえ、再びパートの仕事を開始する。いまは、パートの仕事に生活のリズム・緊張感を取り戻し、また、新たなパートナーとの生活を創めつつある。ライフカーブにも、将来に希望をもって生きていこうという姿勢が窺われる。

図2－2 A氏のライフカーブ



2)定年後、障害のある夫の世話をしながら自分の生きがいを見つけた例(B氏)

①B氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「生きる喜びや満足感」、「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」

・ そのような生きがいの有無:「持っている」

②B氏の生活歴と現況

60歳代後半の女性。短大を卒業後、保育園に勤めた。23歳頃、お見合いで結婚し、保育園を退職した。気難しくてワンマンなところは、父と似ていた。長男、長女が誕生し、子育てに専念した。子どもたちがかわいく、充実していた。29 歳頃、団地の幼児教室の先生になった。子どもが帰ったとき家に居ることを条件に、午前中働いた。下の子が 3 歳のときは一緒だったのでやりづらい面があった。

38歳頃(長男が中学2年、長女が小学6年)、家が手狭になったため、首都圏近郊に自宅を購入し移り住んだ。幼児教室は退職した。交通の便が悪い(バスがこない)ので、運転免許取得した。その頃、別の幼稚園の先生の話があったが、子どもたちが大事な時期であるので断った。その後、幼稚園の話が来ることはなかった。

子どもたちが社会人として独立した47歳頃、家にいてもしょうがないと思い、薬品関係の会社に事務員として勤めることになった。お茶だしや掃除が多かったが、若い社員との交流から若い気をもらうなど得るところも多かった。

54歳頃、夫が定年退職後に進行性の難病にかかり、その通院・治療で辛い時期があった。夫の症状がまだ軽かった59歳頃、長女の住む地方都市に移住の計画があり、長女の家の近くのマンションを購入した。将来は自宅を長男に、そのマンションを長女に譲るという考えがあったようである。しかし、孫の夏休みなどに仮に住んでみて、そこでの生活に馴染めず、カルチャーショックを受ける。また、夫の症状が次第に重くなってきたことなどから移住は中止した。長女には長女の世界があり、自分の生活をもたなくてはと思っている。

夫の医療費はかかるが、介護認定1、障害者3級なので負担が少なく、経済的には年金でほぼ十分である。60 歳で定年退職後はもっぱら夫の介護・治療に気をとられてきた。気がついてみると、退職後、5年間、ほかには何もしないできてしまった。多彩な趣味活動をしているある女性に触発されて、これではいけないと思い、公民館に出かけた。絵画教室と文章教室に興味をもち、サークル活動に参加するようになった。そこでの活動、仲間との交流が、いまは、新たな生きがいとなっているようだ。

孫はかわいいが、成長するにつれて、生きがいの対象から離れていく。夫が元気でいてくれて、自分も元気で趣味を続けていけるように努力したいという。B氏は、積極的に外に出て、自分に合うものを見つけて、行動することが大切であると考えている。

③B氏の生きがいの分析

子どもが小さいにもかかわらず再び幼稚園教室へ就職したのは、B氏の就労継続意思が強かったのだと思う。新居へ移転後はしばらく専業主婦をしていたが、子どもが独立していく頃に、再び常勤として再就職している。これは一般事務的な仕事であり、必ずしも以前のキャリアを生かす仕事ではないが、仕事をすることがB氏にとって、生活に張りをもたせたと思われる。B氏は生きがいの意味を生活充実感としてとらえている傾向があるが、これはB氏の就労継続意思と決して無縁ではなかろう。

50 歳代半ば、夫が難病となりもっともつらい時期を迎えた。そうしたなかで、定年後、娘一家の近くに家を求め、移り住むことを一時期考えたこともあった。試みに孫の夏休み、冬休みなどに住んでみて、土地柄にややカルチャーショックを感じ、自分たちには合わないことを悟る。また、娘には娘の世界があり、孫を生きがいにすることもできない。自分たちの生活を再構築して生きていくことが大切であることを悟る。

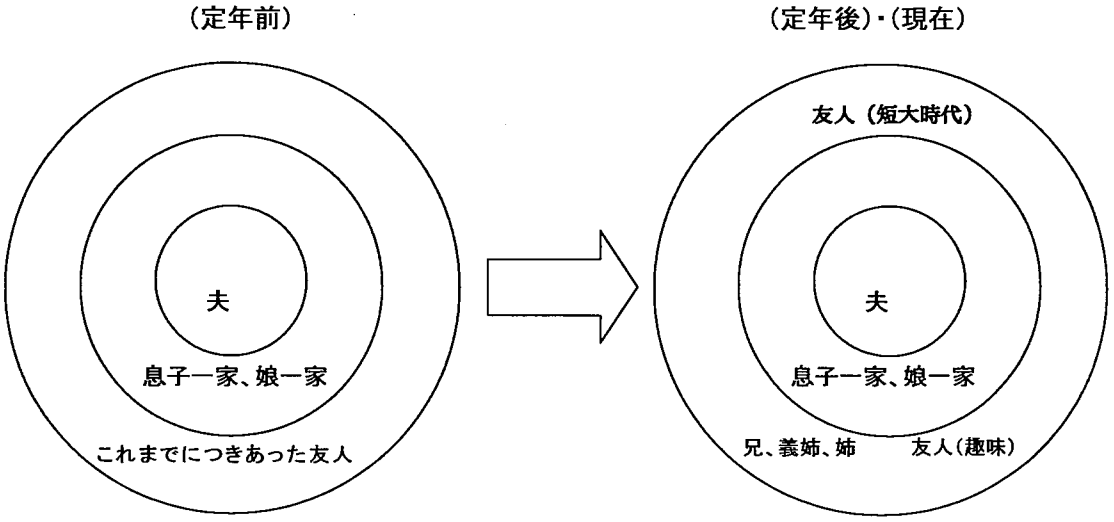
そうした時期に、自分に合った趣味との出逢いがあり、夫が健康であって、自分も健康で趣味を続けていける生活が幸せと思うようになった。もともと就労継続意志が強く、自立した女性であり、自分たちで生活していけるうちは、子どもたちを頼らず、夫婦で支えあって、自分に合った生活をしようという考え方に到ったようである。

転居後、車の免許をとるが、これが地域生活に必要であるのみならず、再就職後の通勤に役立ったとみられる。また、温泉好きな夫との旅行にも役にたっていると思われる。しかし、老後の運転不安もあり、もし、長女の近くのマンションを購入していなければ、もっと駅の近くに移り住んだかもしれないという。また、最近、長女のすすめで携帯電話を持つようになり、メール交換をするようになったという。そうした新しいものに積極的に取り組んでいくところが、B氏の人生を通じての適応力の源泉であると感じた。

④B氏のコンボイの分析

自分にとって一番大切な人として、定年前も定年後も夫を挙げている。ここには夫婦で支えあって生きていこうとする考えが反映されているように思われる。第２円には、定年前も定年後も子どもたちの家族を上げている。しかし、自分たちで生活していけるうちは、子どもたちに頼らず、自分に合った生活をしようという考え方に到ったようである。第３円は、定年前後でやや違ってきている。定年前は、これまでにつきあった友人たちとしているのに対して、兄・義姉、姉、趣味の友人、短大時代の友人を挙げている。きょうだいや短大の友人の位置が上がってきていることが一つ注目される。きょうだいや短大の友人はＢ氏の昔からのことをよく知っている人たちであり、年をとるとそういう人たちが大切になってくるということかもしれない。他方、新しい趣味の友人も同じくらいに大切な人になっている点が注目される。

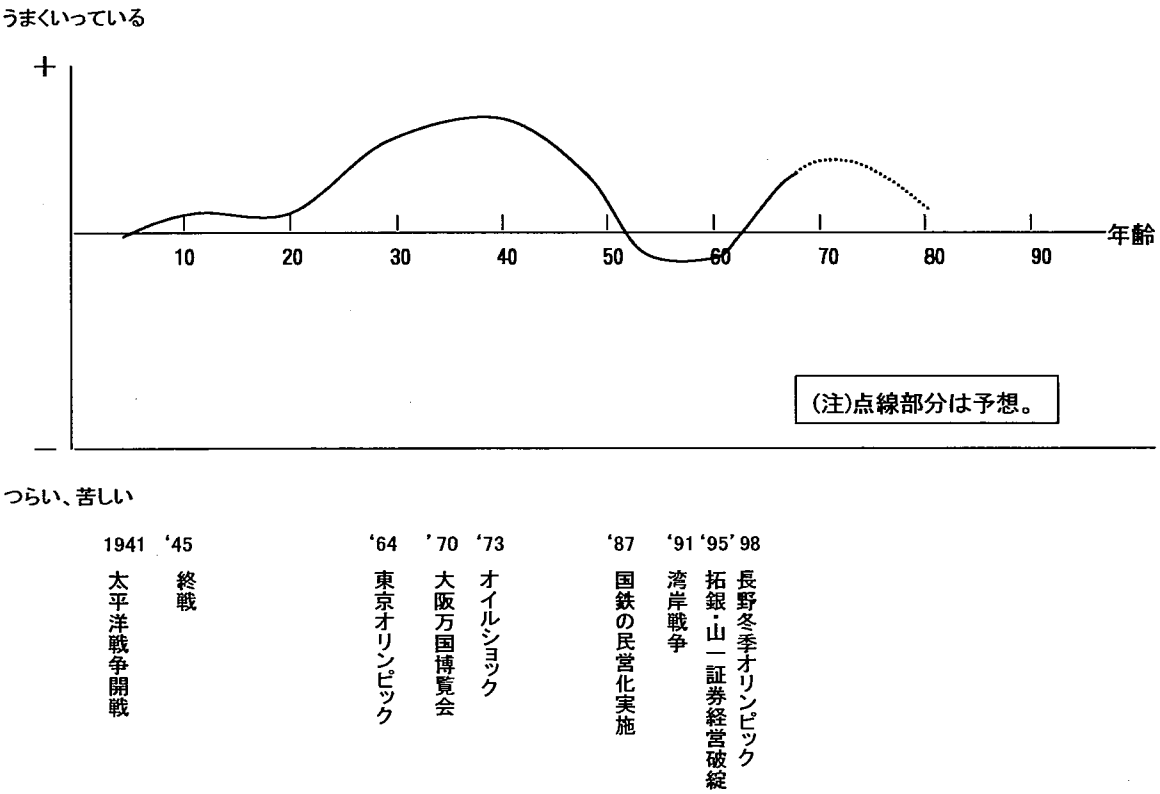
図2－3 コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(B氏)



⑤B氏のライフカーブの分析

就職後、徐々にカーブは上昇している。就職前は、ワンマンな父になにかと押さえつけられてきたという思いがあるのであろう。お見合いして結婚し退職するが、その後も上昇が続いている。子どもに恵まれ、子育て、教育が充実していたことを物語っている。しかし、子どもが大学を卒業し、親元を離れていくにしたがって、ライフカーブは低下していく。はりあいがなくなっていくのであろうか。仕事よりも子育てや教育からもたらされる充実感の方が大きいようである。また、50歳代前半から60歳代前半にかけて最低のカーブを描いているが、これは夫が難病にかかり、有効な治療法は見つからず、不安な日々を過ごしたことを示すものであろう。60歳代前半から70歳代にかけて再び上昇カーブが表れているが、これは、子どもたちを頼らず、難病の夫と支えあって生きていこうという気持ちになれたこと、そして自分らしく生きていくよすがを趣味やそれを通じての交流に見出せたことが影響しているとみられる。しかし、70歳代後半には低下しているのは、夫の病気の進行、自分の老いからそうした2人で支えあう生活もやがて終焉を迎えることを予感したものであるように思われる。

図2－4 B氏のライフカーブ



3）心の病気を機に人生観が変わり、定年前に希望退職した例（C氏）

①C氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味：「生活の活力やはりあい」、「生きる喜びや満足感」

・そのような生きがいの有無：「持っている」

②C氏の生活歴と現況

50 歳代後半の男性。大学を卒業後、化学関係のメーカーで 4 年間、営業の仕事をしていたが、勤務地と上司との関係が嫌になってやめた。いったん親戚の友人の会社に世話になる。

1 年後、電子メディア関係のメーカーの営業として再就職するが、皮肉なことに同じ勤務地で働くことになる。バブル時代、担当した電子部品は全盛で、面白いように売れた。売上のご褒美で 1 週間のアメリカ旅行をさせてもらった。しかし、昇進の話も出てきた３０歳代半ばに心の病気となり、2 年くらい不安定な状態に陥った。サラリーマンとしての転機であった。その後は、我武者羅にやるのをやめ、おおらかにいこうと思った。出世コースから外れ、一転、組合の仕事にウェートをおいた時期もあった。

42 歳頃、本社勤務となったが張り合いがなかった。その後、事業所の管理職として 10 年勤めた。この 10 年が一番楽しかった。自分で事業の計画をたてて具現化できたからだ。5 年でポシャルといわれたところを、自分なりに頑張って 10 年もたせたという自負はある。再び本社の企画を 3 年ほどやり、56 歳で希望退職した。

退職してよかったことは、好きな旅行、好きな本、好きな考えごとができたことである。老後のために運転免許をとったり、「新現役ネット」の会員となり、映画とカラオケのサークルに入っている。新現役ネット会員の名刺も作った。現在は健康で、首都圏近郊に妻、義母と 3 人暮らしである。子どもたちふたりは結婚して近くに住んでいる。

雇用保険の受給期間も終わりに近づきつつあり、新たな仕事に就くことを希望している。しかし、どこか老成したところがあり、早く就職しなければというようなあせりはない。病気をし、挫折を味わったことが、その後の仕事や人生観に大きく影響を及ぼしたと考えられる。今後の仕事については、これまでのようなサラリーマン生活の延長になるような仕事はこりごりだと考えている。できれば高齢社会のプランニングのような仕事に就きたいと思っている。これまでのサラリーマン生活とは違った社会貢献の観点から仕事を選択していこうという姿勢は、ひとつの新しいスタイルといえるのではなかろうか。

また、C氏は、老後生活について、一つの哲学をもっている。自分たちの親の世代は、親の面倒をみてきたというが、親の親の世代は寿命が短く、実際に面倒をみた期間はさほど長くはないという。そして、本当に、親の世代を長期に世話しているのは、自分たちの世代であるという。そうした親の世代を長期に世話をするように宿命づけられている世代からすると、自分たちの子どもの世代にはそうした世話をかけるべきではないという。子どもを育てるのは当然であるが、子どもの世話になるのは決して当然ではないという。

このような考えから、妻の親（介護度２）の介護が終わったら、夫婦で施設に入居する

ことを考えており、子どもたちの世話にはなりたくないという。こうした考えは、自分よりもむしろ妻の方が強いとも言う。ただし、妻の生活を尊重し、自分の介護等で拘束する気持ちはない。夫婦して入居するが、必ずしも同居する必要はないとも考えている。かといって、子どもたちと距離をおいているかというとそうではなく、子どもたちとの交流はむしろ積極的である。新たに車の免許を取得し、老後の設計に余念がない。老後の設計がひとつの生きがいとなっているようにも思える。

③C氏の生きがいの分析

C氏は、定年まで 3 年有余を残していたが、すっぱりと希望退職した。早々とサラリーマン生活に見切りをつけたのは、それなりの生活の見通しがあってのことと思われるが、本社勤務に戻り、あてがいぶちのサラリーマン生活はもうたくさんという思いが強かったようである。したがって、これまでのサラリーマン生活にはまったく未練はない。

希望退職後、好きな旅行、好きな本、好きな考えごとができ、有意義な時を過ごすことができた。雇用保険の受給期間も残り少なくなる頃から、会社から紹介された再就職支援会社あるいはハローワークを通じて、職探しを始めた。しかし、かつてのようないわゆるサラリーマン生活はもうこりごりだと思っている。できれば、なんらかの高齢社会の活性化に貢献ができるような仕事があればやってみたいと考えているようだ。C氏の場合、30歳代に病気をした頃から、仕事・会社に対するスタンスが変わったが、希望退職により会社のしがらみから解放され、その傾向がより明瞭に出てきているように思われる。

C氏は、現役時代から仕事・会社を覚めた眼で見ているところがあり、仕事・会社を生きがいの全てを獲得する場とはみていない。したがって、仕事・会社の喪失がそれほどこたえる風ではない。C氏は、生きがいの意味を、生活の活力やはりあいをもたらしてくれるもの、あるいは生きる喜びや満足感ととらえているが、そうした生きがいをむしろ家庭と個人的友人から獲得していると感じているようだ。

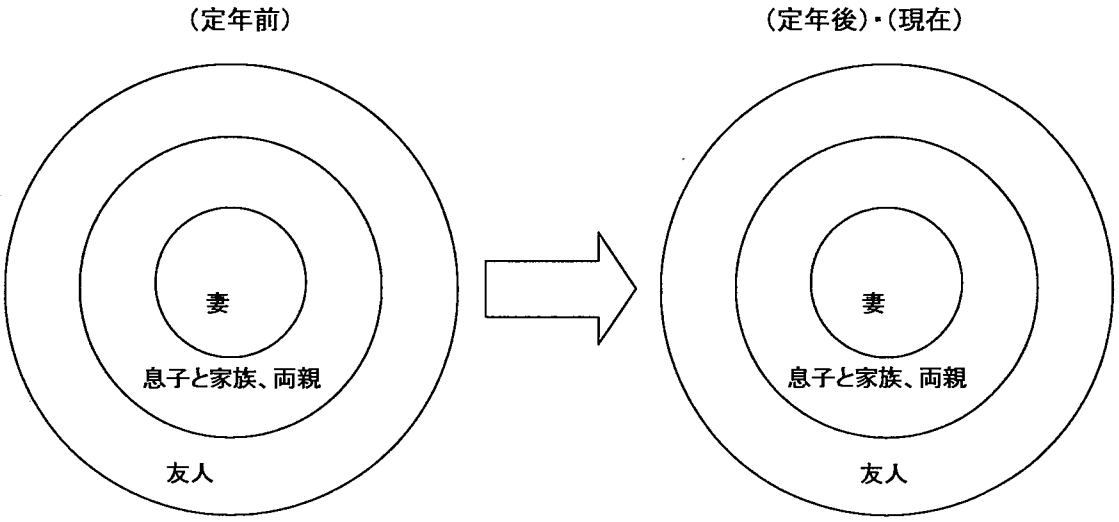
C氏の 2 人の子どもや孫達は近くに住んでおり、一緒に食事をしたりし、接触は良好に保たれているC氏にとっては、こうした子どもや孫との接触が生きがいとなっている。そして、C氏は、夫婦で早く地域の施設に移り住み、子ども達の世話にならないですむ生活を早期に確立させることが大切であると考えている。これが、C氏の子どもたちへの愛情であり、そうした老後の安定した生活を築くことがひとつの生きがいになっているようだ。

他方、C氏は学生時代の友人・仲間、そして職場や仕事を通じて得た友人・仲間など個人的友人たちとのつきあいを大切にしてきた。そうした気のおけない仲間との交流がA氏にとってささえになっているようだ。また、退職後「新現役ネット」の会員となり、映画やカラオケなど趣味のサークルに新たな生きがいとなっているようである。

④C氏のコンボイの分析

希望退職前も後も変わっていない。自分にとって一番大切な人は、妻である。病気の時、苦しい時に自分をささえてくれたのは、妻だった。しかし、お互いの生き方を尊重し、妻に四六時中、つきまとわないことが女房孝行であると考えている。自分の介護も妻の世話にはならないと考えている。第２円には、息子たちとその家族、両親をあげている。子どもを育てるのは当然だが、子どもの世話になるのは当然ではないと考えている。子ども達の世話になることはまるで考えていない。第３円には、友人がきている。こうした希望退職前のコンボイからも、Ｃ氏の場合には、病気をした後、仕事・会社を斜に見るようになっており、すでに生きがい獲得の場とはなっていなかったことがコンボイからも窺われる。

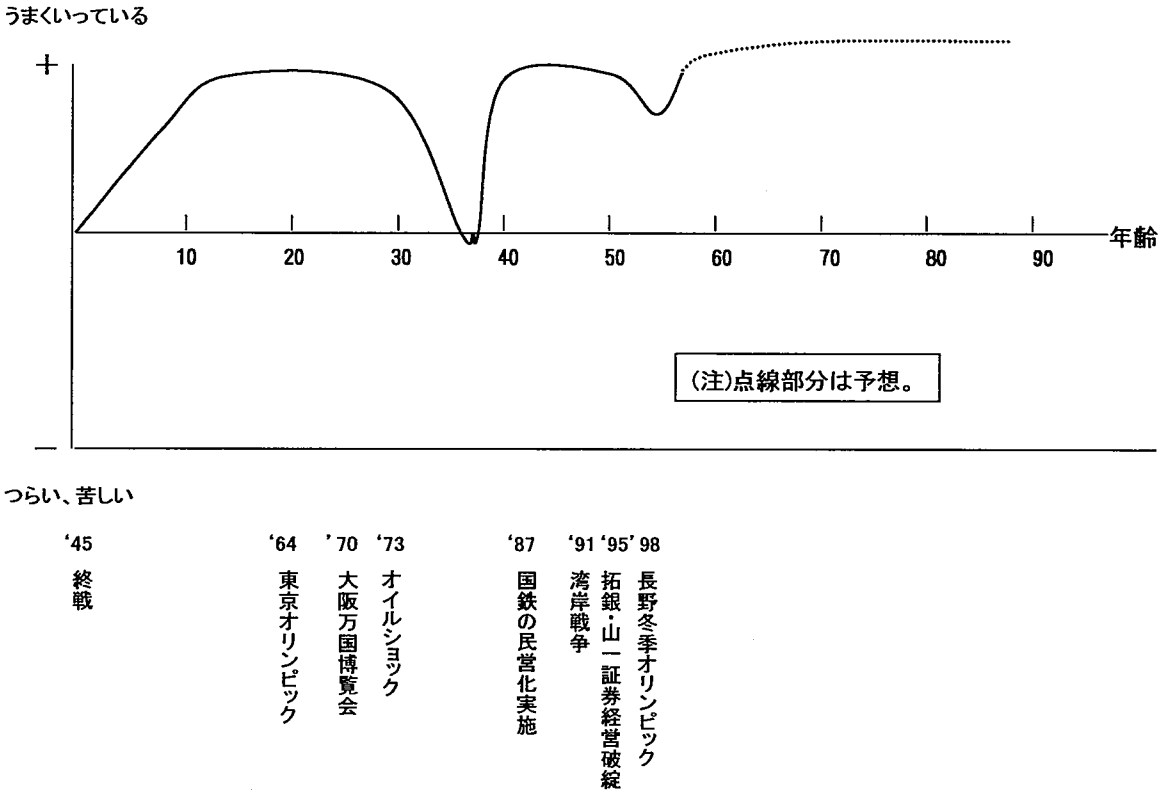
図2－5 コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(C氏)



⑤C氏のライフカーブの分析

子どもの頃は成長とともに上昇し、10代半ばにピークに到達し、その後30歳頃まで続く。30代前半から後半にかけて低下していく。35～36歳ころ病気で落ち込む。その後、急速に回復し、40代、事業所の企画に移った頃から再びピークになる。50代、本社に移ってからは低下気味であるが、希望退職した今、また回復している。

図２－６　C氏のライフカーブ



4)クビの宣告にもめげずに、新たな仕事のネットワークに生きがいを見出した例(D氏)

①D氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「生きる目標や目的」、「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」

・そのような生きがいの有無:「持っている」

②D氏の生活歴と現況

50 歳代後半の男性。大学を卒業後、流通関係の会社に就職し、販売部門に配属になる。系列の会社から購入する決まりになっていた部品を他者から購入したことがばれて、20 歳代後半、他の営業部に移された。そこでの仕事振りが他社の目にとまり、引き抜きの話もあった。勤務は早朝から夜遅くに及ぶことがしばしばであった。

40 歳代半ば、新しい社長と対立し、クビを宣告された。そうなるとそれまでとは手の平を返すような冷たい態度をとる人もいた。自殺まで考えたが、家族のことを考え思いとどまった。典型的な窓際族で、1年間あまり、まったく仕事がなかった。元上司の薦めで、好きな本を読んで過ごした。社外の知人の紹介で、転職も考えたが、元上司の助言もあり結果的に残留した。

その後、クビを宣告した社長も交替し、社内の改善活動の事務局に配置転換されることになった。学生時代に学んだ知識を生かすことができる新たな仕事に積極的に取り組んだ。給料は2割くらい減ったが、月謝を払って、新しい仕事を学ばせてもらっていると考えた。研修用に作成した教材の評判がよく、社内外から引き合いがあった。現在では、業務改善活動に習熟し、社内研修の講師をするかたわら、社外の講師の回数も増えてきている。講演などで人に喜んでもらえるように話や教材提示を工夫することが生きがいとなっている。

ボランティアで地域のサークル活動にも参加しており、定年後は、そこでのネットワークを基盤に業務改善活動の技術の普及にかかわる仕事をしていきたいという希望をもっている。一時は糖尿病・肥満であったが、減量に成功し現在はまあ健康である。都内に妻、独身の息子(社会人)、自分の両親と暮らしている。

D氏は、社長からクビを宣告されることにより、これ以下はないという底を見た。そのため、これ以上悪くならないし、そう思えば何をやっても楽しいという。老いは、精神的なものだという。興味をもって、動ける間は、全力で動きたい。死ぬ気になったら、なんでもできる。死ぬまで、いまのままで、突っ走っているだろうという。いろいろと困難が予想されるが、D氏の挑戦はいま始まったところである。

③D氏の生きがいの分析

D氏のサラリーマン人生は40歳代半ばまでは比較的順調に推移していたと見られる。しかし、新しい社長との対立からクビを宣告され、一転して、窮地に立たされることとなる。仕事を干され、給料を2割減らされる屈辱的な状況に置かれた。自殺まで考えたというように、D氏の人生の最大の危機であった。知人からの紹介もあり、転職の検討もした。し

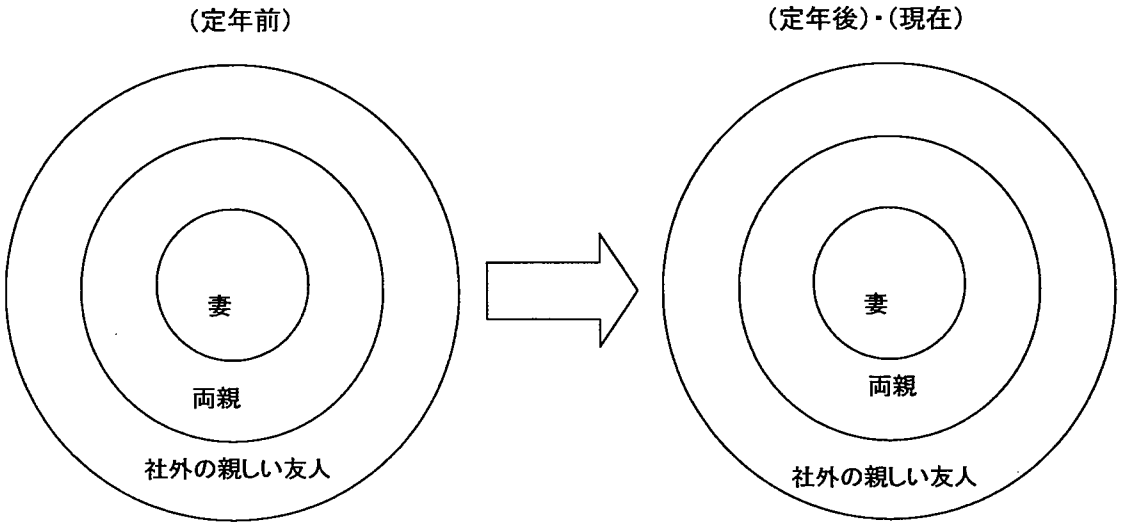
かし、最終的にD氏は踏みとどまった。そして、未経験の改善活動の部署で一から出直すことにした。給料の削減分は仕事を学ぶ月謝と思って頑張ったという。

そこまでしてD氏を会社に踏みとどまらせ、新たな仕事の修得に駆り立てたものは何だったのであろうか。ふつうであれば、くさってしまって、新しい仕事はいい加減になりがちであるが、へこたれずに新しい改善活動の仕事に積極的に取り組んでいった。そして、社外から講師依頼がくるほどにその仕事に熟達した。D氏の講演は評判がよく、メール等でかなりの反響が寄せられるという。これがD氏にとって生きがいであり、原動力となっている。D氏は現在、定年後に向けて、研修教材の提示技法の洗練、人脈の拡大に余念がない。とりわけ、コンピュータによるプレゼンテーションの技術に磨きをかけている。D氏は、このように新しい生きがいとなる仕事に出会えたのは、クビを宣告されたからであり、人生の最高の経験であったと述べている。最悪の事態を打破するには何をすればよいのか、そうした視点での取り組みの結果が現在に至っているようだ。

④D氏のコンボイの分析

D氏は、半年後に定年退職の予定であるが、現在も定年後もコンボイは変わらないと考えている。D氏にとって一番大切な人は、妻である。好きなことやらせてもらって、なんだかんだ心配してもらっているから、妻以外にはないという。第2円には、両親を挙げている。実父は戦死し、母が再婚して、継父に育てられた。父はつきあいべただが、職人気質のすごくいい親だと思っている。しかし、息子はコンピュータ関係に勤めているが忙しくて顔をあわせることも少なく、独立して出て行く人間だからと第3円にも入れていない。この辺はかなり独特の発想であり、息子との微妙な距離感があるように感じられた。第3円には、社外の親しい友人を上げている。これは、ボランティア活動に新たな生きがいの場を見出していることと対応している。会社の関係の人は挙げておらず、職場の人とのつながりは既に切れているかもしれない。

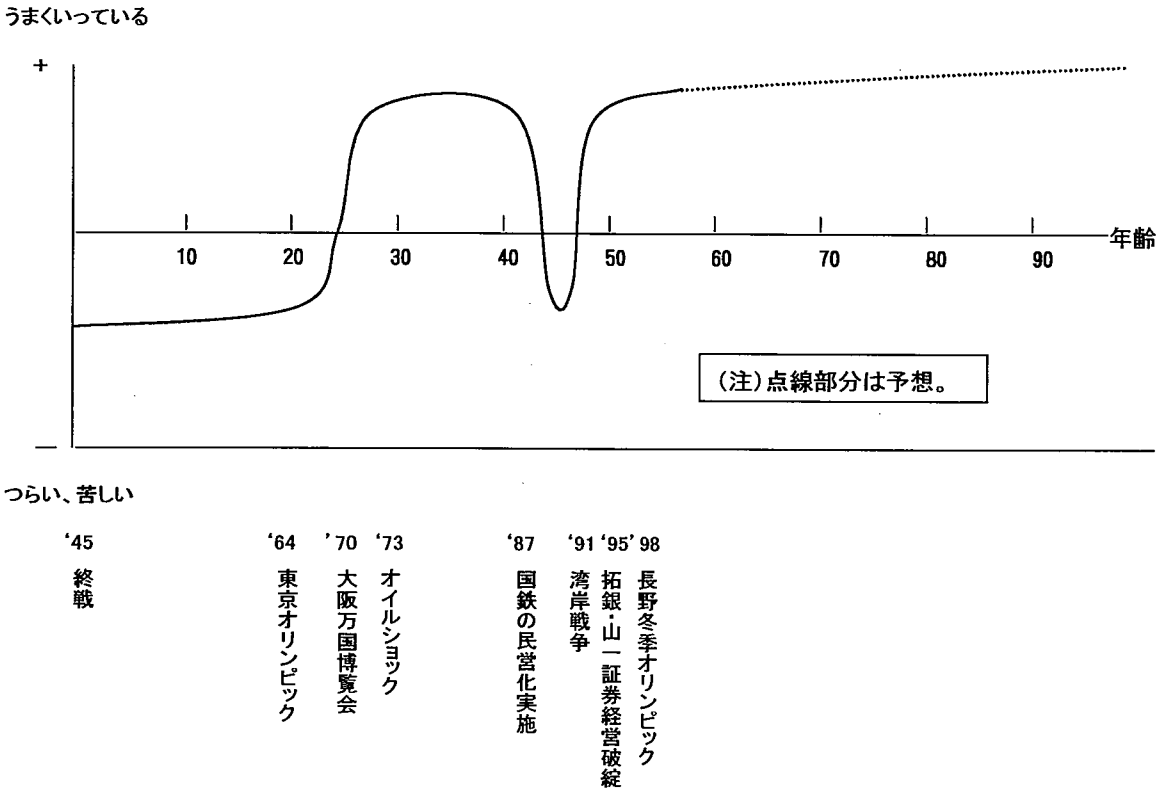
図2－7 コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(D氏)



⑤D氏のライフカーブの分析

子どもの頃は、実父が戦死したり、いじめられたりしたこともあって、必ずしもよい印象はない。しかし、就職し、結婚した頃より急激によい状態になっている。しかし、40 歳半ばで社長にクビを宣告され、急激に低下する。しかし、改善活動の仕事に取り組む中で新しい生きがいを見つけて、急激に回復し、現在は以前のようによい状態にあると思っている。

図2－8　D氏のライフカーブ



5)第2の定年後、田舎に戻り農業をやりたいと考えている例(E氏)

①E氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「生きる喜びや満足感」、「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」

・そのような生きがいの有無:「持っている」

②E氏の生活歴と現況

60歳代前半の男性。大学を出て、設備工事関係の会社に入り、経理を振り出しに、長年、労務畑を歩む。30歳代後半、業績の伸びない地方の支店の業務を任せられたが、自然災害による復旧対応をきっかけに業績が伸びだし、採算の取れる支店にすることができた。労務部門は現場と密着しており、事故の対応などつらいこともあったが、現場の人から慕われることもあり、やりがいのある仕事であった。社会保険業務の部長で定年(60歳)を迎えたが、定年後も年金業務の関係で残留することとなった。給与は半減したが、肩書きもあり、仕事はそれなりに充実している。65歳で退職したら、母の暮らす田舎へ戻り、農業などして暮らしたいと考えている。首都圏郊外で妻、長男と暮らしている。次男は結婚し、孫がいる。

E氏は、田舎に戻って農業をしながら、高齢の母親の面倒をみたいと思っている。E氏は自然との触れ合いが好きであり、農業は趣味と実益を兼ねているともいえる。妻も同郷で親戚が多数おり、田舎へ戻ることに異論はない。妻はきょうだいが多く、下の方なので既に妻の両親は亡くなっている。E氏の長男もいくいくは田舎で暮らす意向をもっているようだ。首都圏近郊の家は、次男に残すことになるのかもしれない。E氏の母親はかなり高齢であるので、この春で辞める希望を出したが会社から遺留された。母のことは気がかりだが、責任もあり、後1年、こちらで頑張る予定である。

なお、E氏の面接は自宅で行われ、妻が同席した。妻は中学・高校の同級生でなんでも言い合える関係である。

③E氏の生きがいの分析

E氏は、現在、定年前からの仕事を続けている。給料は半減したものの役職者としての肩書きもあり、与えられた仕事に責任と生きがいを感じている。しかし、60歳代半ばになり、仕事中心の生活から、徐々に余暇生活の充実を図っている。もともと趣味は広いが、自然との触れあいが好きで、登山・山岳写真が一番の趣味である。その他、囲碁、ゴルフなどが好きである。本も好きで通勤時間を利用してよく読む。近隣との交流はほとんどなかったが、最近、友人ができ、近場の温泉に一緒に行ったりするようになった。また、高校の同窓生との交流が盛んで、郷土の踊りの同好会に夫婦で参加している。

他方、E氏は非常に家族思いである。若い頃には歌の「神田川」のような生活であったが、いつも二人で支えあって生きてきた。妻も家計を助け、50歳半ばまでは働いた。けんかもするが、何でも話し合える。子どもたちも、こうした二人の苦労する姿をみて育ち、

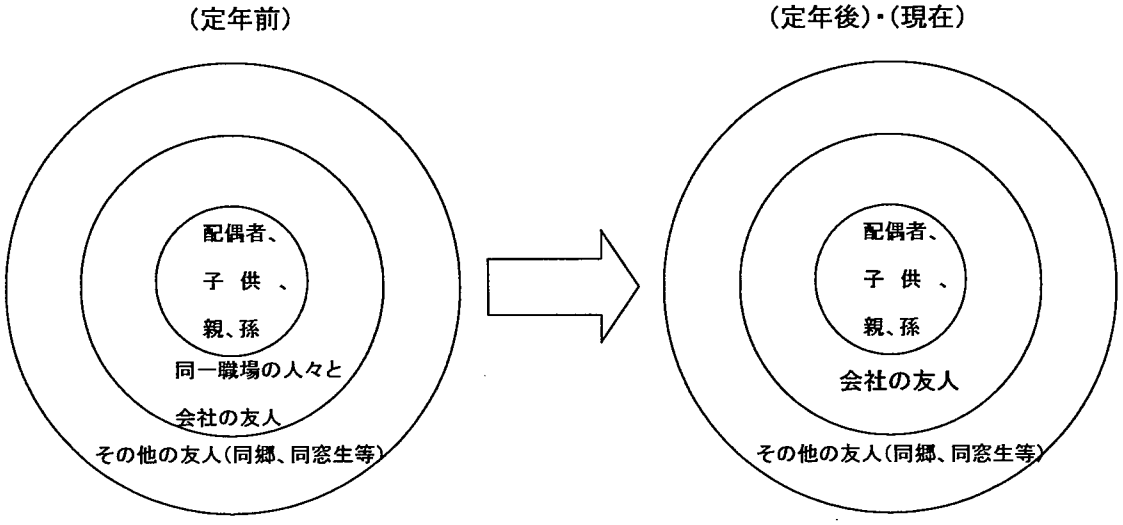
それぞれに頑張ってきた。こうした家族愛がE氏の生きがいになっていると思われる。

E氏は現在、仕事や趣味に生きがいを感じながら安定した生活をしているが、第2の職場を退職したら、田舎に戻り、長年一人暮らしをしてきた高齢の母の面倒をみるつもりである。長男として妹任せにしてきたことに内心、忸怩たる思いもあるようである。田舎で農業をしながら、親孝行をして暮らすことが、家族思いのE氏の夢である。

④E氏のコンボイの分析

最も大切な人のところには、配偶者、子ども、親、孫を挙げている。これは定年後も変わっていない。E氏の妻、子、親、孫への愛情が表れている。第2円には、定年前には同じ職場の人々と会社の友人を挙げていたが、定年後は会社の友人のみ挙げている。これは、定年後、会社の友人としてのつきあいは続いているが、同じ職場の人間としてのつながりは薄れてきていることを物語っているのであろう。第3円には、会社の友人以外の友人（同郷、同窓生等）を挙げている。同窓生とのつきあいは昔からであるが、定年退職後、郷土の踊りの同好会に入って再び深まっている。これには妻と一緒に参加している。

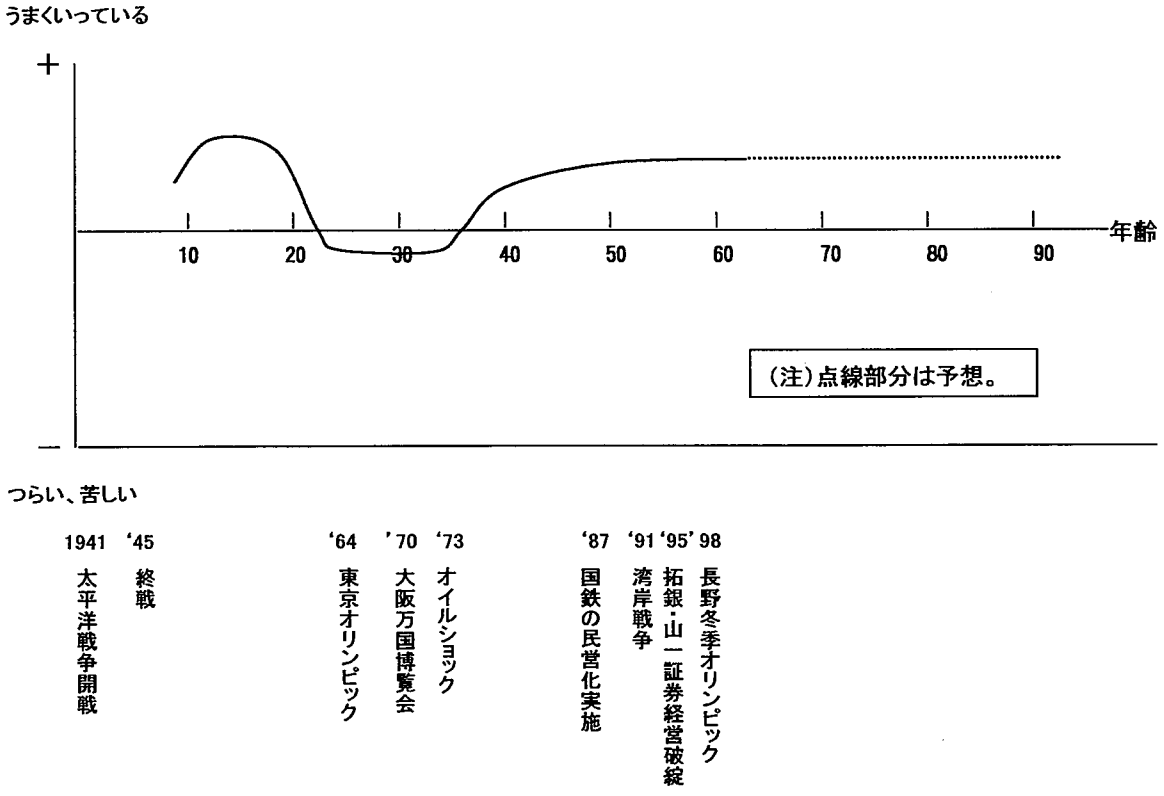
図2－9 コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(E氏)



⑤E氏のライフカーブの分析

10歳代から30歳代にかけて低下していく。若い頃は歌の「神田川」のような生活であったと回想しており、生活が楽ではなかったことを表している。地方の支店で活躍し、支店の業績を伸ばしたあたりからカーブが上昇している。仕事が順調で、管理職に昇進し、生活も安定してきたためと推測される。そして、このカーブは40歳代でピークになり、現在に至るまでその水準を維持している。定年退職の折のショックは認められない。給料が半減したが、役職者の肩書きもあり、責任と生きがいをもって仕事に望むことができたためと思われる。

図2－10　E氏のライフカーブ



6)学習が生きがいになっている例(F氏)

①F氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「人生観や価値観の形成」、「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」

・そのような生きがいの有無:「持っている」

②F氏の生活歴と現況

70 歳代前半の未婚の女性。高卒後、父は進学を勧めたが、食品関係の会社の工場の事務部門に就職した。入社当初これといった仕事がなく、社会へ出るには何か技術をもたなくてはいけないと感じた。そこで、会社の帰りに英文と和文のタイプライターの勉強に通った。そして、自己ＰＲして、和文タイプの仕事に就いた。しかし、20 歳代半ばに書痙になり、受付に回された。次に、コンピュータ関係のセクションの事務として 3〜4 年勤めた。その後、大病し、2 年近く休職した。復職後は、経理で文書実務の講師をした。このときの「あなたならやれる」という上司の後押しがなかったら、上昇志向に乗れなかった。文部省や放送文化研究所に出向き、カリキュラム作りや参考書づくりをした。

その傍ら、大学の夜間部で、図書館学を学んだ。資料整理はじっくりと粘り強くやる仕事で、自分向きであると感じていたが、自己申告制度を利用して、本社の社史編纂室に移った。そして、40 歳代は 70 年史、50 歳代は 80 年史に取り組んだ。退職前に完成し、編集後記に足跡を残せたことを誇りに思っている。

定年退職後は、母校の同窓会の役員になり、同窓会誌の編集に携わった(3 期 6 年余り)。また、地域の図書館のボランティアとして、会報の編集やディスプレイに参加した(約 2 年余り)。しかし、健康を害しいずれの仕事も辞めた。しかし学習意欲はいまなお衰えていない。

未婚で通したのは病弱で、健康に自信がなかったためという。しかし、早くに母が亡くなり、長女として親代わりをしてきたことや、長生きをした父親の面倒をみる立場にあったことなど、そうしたことも少なからず影響していたかもしれない。首都圏郊外に一人住まいである。ただし、庭続きで弟夫婦が住む。暮し向きは余裕があるが、健康面に不安がある。

③F氏の生きがいの分析

子どもの頃から体が弱かったが、向学心は人一倍強かった。戦時中の学徒動員及び戦後の混乱により満足な授業を受ける事なく卒業となり、いつも満たされない気持ちであった。大学で栄養学を学びたいという気持ちがあり、また、せっかく父親が進学を進めてくれたにもかかわらず、6 人きょうだいの長女として就職を選んだことには忸怩たる思いがある。ちなみに、他の 5 人のきょうだいはみな進学した。こうしたことが、その後の学習意欲の継続につながっているかもしれない。

英文・和文タイプの勉強、大学の夜間部で図書館学を学んだことは(仮説をたて、その

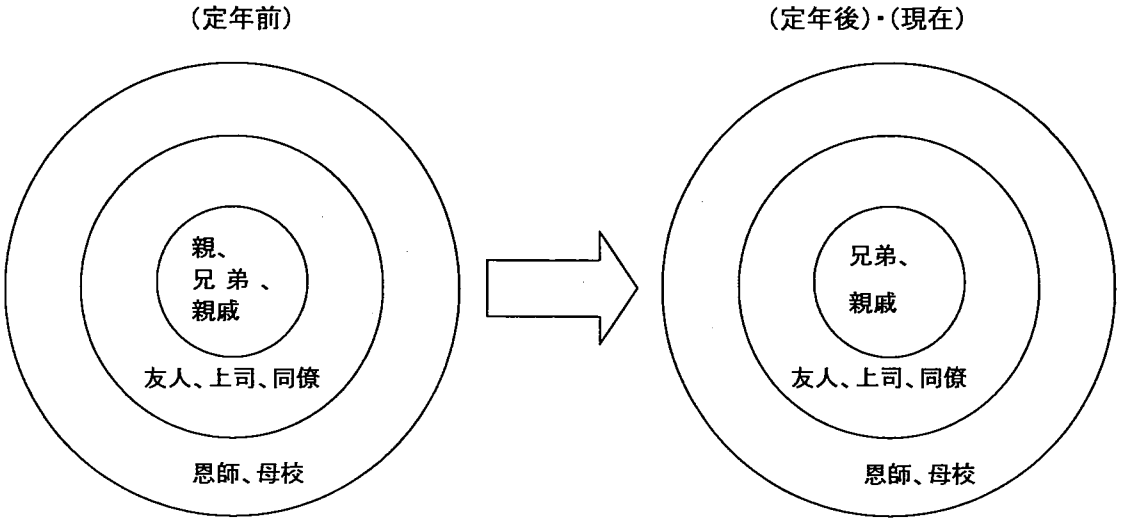
仕事につくためには、何が必要か、常に前もって学ぶようにした。）その後の適職を得ていく上でおおいに役に立ったわけであるが、Ｆ氏の興味・関心はこうしたいわば実学だけでなく、ＮＨＫの番組（現・「人間講座」の 35 年以上にわたる受講）、講演会、読書、能、茶、趣味として方言の収集、家族誌など実に多岐にわたっている。

病弱で結婚を断念したり、大病し 2 年の休職など挫折も味わったりしたが、上司にも恵まれ仕事を通して成長する事ができた。また、会社という管理社会にあって、自分の能力、資質に合った仕事を自ら選び取った会社生活を送る事ができて満足している。知的好奇心を持ち続ける学問的姿勢が、退職後の生活のなかにも窺われる。「雑学ながら学びつつ老いる」というＦ氏の言葉にその心情が表れている。

④F氏のコンボイの分析

定年前も定年後も基本的には変わっていない。第１円には、親、兄弟、親戚（母を亡くしてから、多くの親戚の助力によって育てられた。その結果、たいへん濃密な関係にある）が入っている。ただし、定年後は、親が亡くなっているので、兄弟と親戚になっている。第２円には、友人、会社の上司、同僚を挙げている。上司の後押し、推薦がなければ、上昇志向に乗れなかったと述べている。第３円に、恩師、母校（切れ切れの知識だが学校で学んだ事は、随所で役立っている。感謝することも多い。）を挙げている。

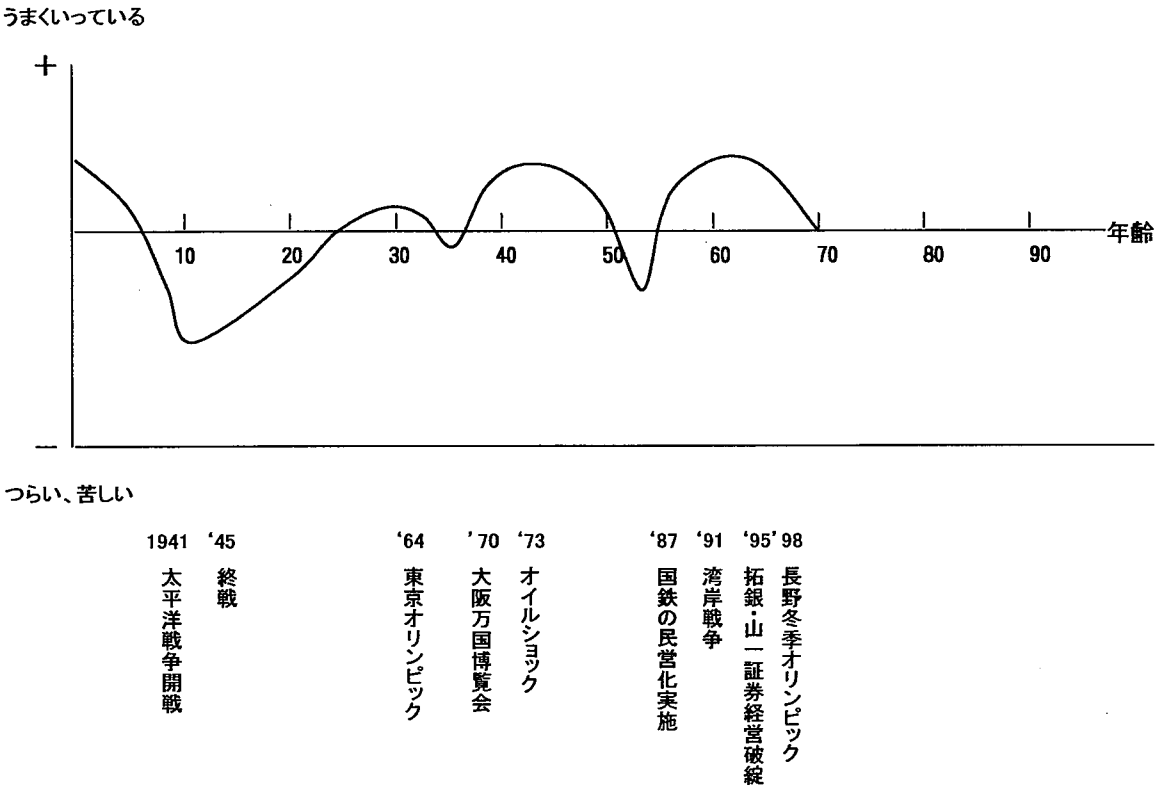
図2－11　コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(F氏)



⑤F氏のライフカーブの分析

子どもの頃はよかったが、母親が10歳の時に亡くなり低下した。その後、徐々に回復し、30 歳前後、仕事に打ち込むなかで小さなピークがくる。しかし、大病し、2 年間近く、休職することとなり、やや落ち込む。その後、文書実務の講師を命ぜられ、先ず教材作りから始める。特別な教育も受けず、素養もないものとして苦労したが、自己の知力向上及びその後の仕事に役立った。その結果は上司に認められ、本社の社史編纂室に移ってから充実した日々が訪れる。50 歳代に父の死で落ち込む、80 年史の完成後ピークで定年を迎え、退職と同時に母校同窓会の常任理事に就任、同窓会誌の編集を担当したが、体調不良のため退任、今は評議員のみを務める。現在はとくに昂揚感はないが普通である。

図2－12 F氏のライフカーブ



7)退職準備休暇に入り自分に合った生き方を探っている例(G氏)

①G氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「心の安らぎや気晴らし」、「生きる喜びや満足感」

・そのような生きがいの有無:「持っている」

②G氏の生活歴と現況

50 歳代後半の男性。大学を卒業し、食品関係の会社に就職し、工場の技術者として勤務した。30 歳代は、外国の工場に製造担当の技術者として勤務した。40 歳代半ば、子会社の役員として出向した。さらに、別の子会社に役員として勤務した。その後、いったん本社に戻り、50 歳代半ば、植物関係の販売会社に移る。大幅赤字で本社に戻る。本社の本部長付で、特命で生産部門の歴史的経緯をまとめた。一区切りついたところで、できたらもう一つやりたいことがあったが、いまのところ必要ないといわれた。55〜60 歳までの選択定年制で、57 歳までは割増がつく。それで、ローンを払い、なんとか年金までつなげる。また、植物関係の販売会社で心身疲れ果てていた。妻からするとやや唐突に感じたようだが、58 歳到達時点で会社をやめることにした。現在、退職準備休暇に入っている。妻とは小学校以来のつきあいだが、夫が家でごろごろしていることがストレスのようだ。現在、ボランティア活動などやりながら、自分に合った生き方や仕事をみつけたいと思っている。

首都圏郊外に、妻と長男と住む。長男は大学を卒業し就職している。長女は結婚し、地方で暮らしている。すでに親は亡くなっている。

③G氏の生きがいの分析

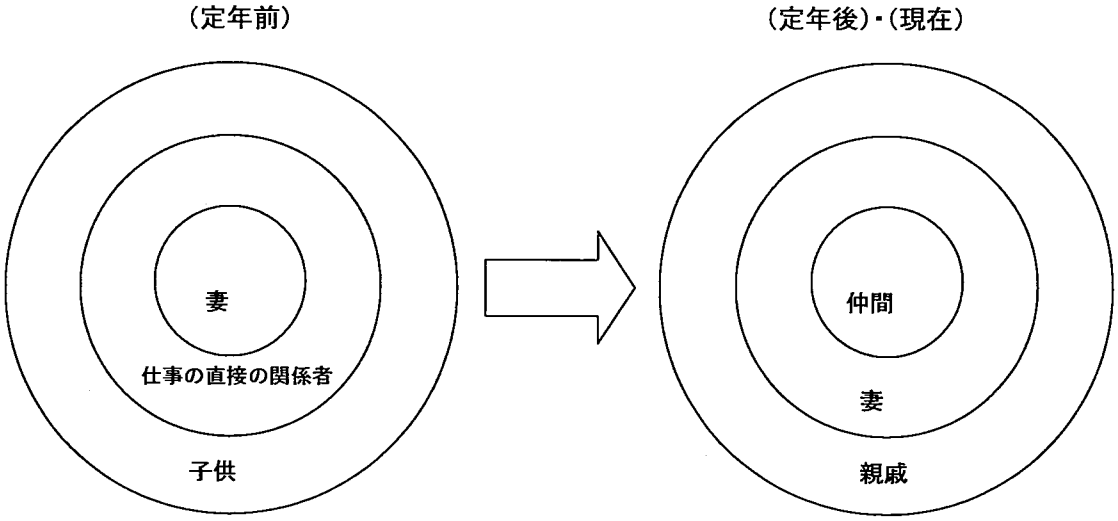
G氏は企業戦士として走り続けてきた。いろいろな職場を経験し、いろいろな人たちと仕事ができるという自負がある一方、一筋に歩いてきた人に比べて、自分はいったい何を専門にしているのか、アイデンティティがはっきりしなくなってしまったという危機感ももっている。また、単身赴任で仕事に専念してきたことが、妻や家庭との距離をつくってしまったように感じている。妻とは宗教的な違いもあるが、今後、どのように折り合いをつけていくか、課題が残されている。子どものことは、さほどあたまにはなさそうである。

いま、退職準備期間にあり、これから何をしていこうか手探りの状況である。退職準備休暇はよい機会を提供してもらったと思っている。現在、森林ボランティアに参加し、集団で農業をやってみたいと思っている。60 歳までの 2 年間は準備期間で、60〜70 歳に畑を作り、そこを拠点にして、田舎と都会の半々の生活をしたいと思っているそして、70 歳以降は畑を中心にした生活をしたいと思っている。しかし、都会志向の妻と折り合いをつけて農業を始めることができるのか、まだ先はみえない。

④G氏のコンボイの分析

定年前は、第１円に妻が入っているが、定年後は、妻に代わって仲間が入っている。妻とは同郷で小学校以来のつきあいであるが、単身赴任などの影響などもあってか、やや距離ができているようである。第２円には、企業戦士であったＧ氏は仕事の直接の関係者を挙げている。しかし、退職準備中の現在は、仕事の関係者は既に圏外に消えている。第３円には、定年前は子どもを入れていたが、子どもたちもそれぞれ独立しており、さほど強い結びつきを感じていないようである。子どもに代わって、現在は親戚が入ってきている。

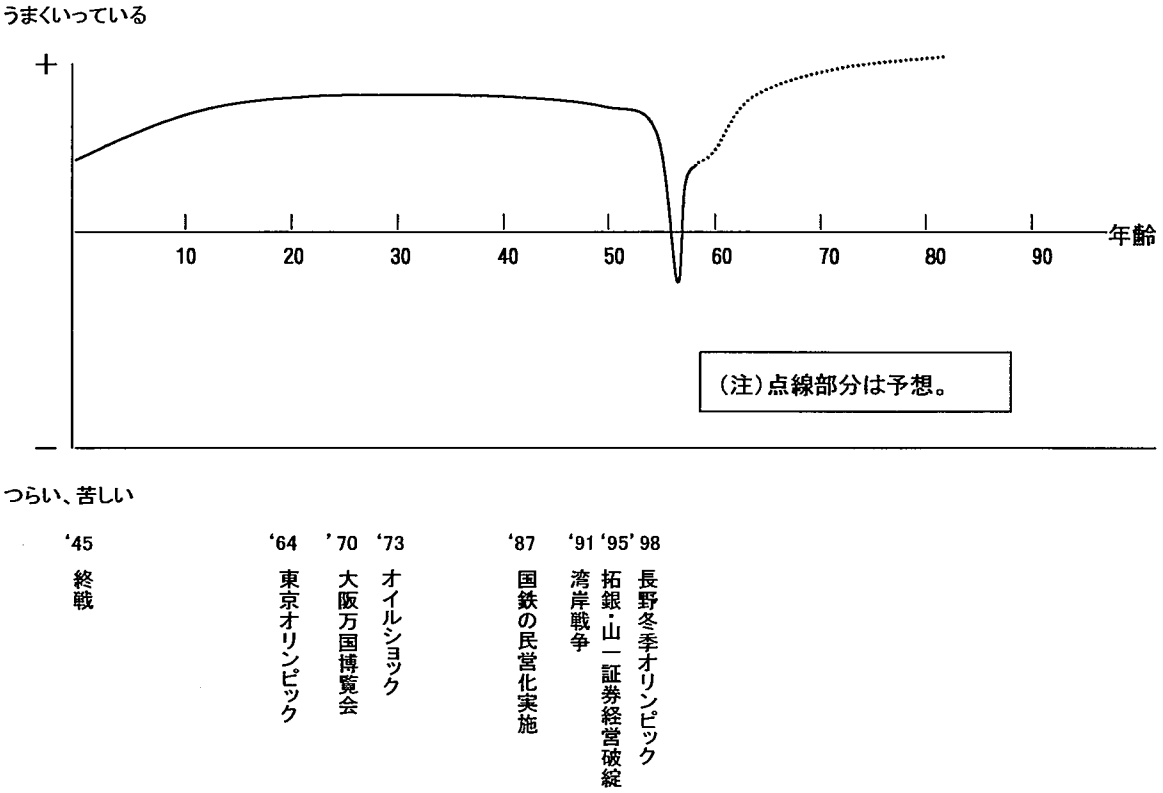
図2－13 コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(G氏)



⑤G氏のライフカーブの分析

子どもの頃から比較的高い水準で推移してきたが、50 代後半に出向した子会社でうまくいかず、社長を更迭されたことが大きく影響している。しかし、その後、すぐに立ち直り、現在は退職に向けてふたたび上昇中である。

図2－14　G氏のライフカーブ



ii）前は生きがいをもっていたが、今はもっていない事例

1）定年を機に後進に道を譲り、すっぱりと退職した例（H氏）

①H氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味：「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」、「他人や社会の役に立っていると感じること」

・そのような生きがいの有無：「前は持っていたが、今は持っていない」

②H氏の生活歴と現況

60 歳代後半の男性。肺結核にかかり大学を中退する。1年半に及ぶ療養生活の後、地元の機械メーカーに就職した。経理に配属され、一から学ぶ。30 歳代半ば、本社の経理課長に抜擢され、これに応じたが 3 年後、部長と対立し、早期退職募集に応じた。会社の将来に希望がもてないということもあったようだ。退職金で住宅ローンを返済し、数ヶ月鋭気を養う。新聞広告で再就職したが、その会社が大企業に吸収合併されたのを機にわずか1年半で辞める。大企業組織のヒエラルキーはコリゴリという思いがあった。次も新聞広告で、年齢制限の 35 歳を上回って 40 歳近くになっていたが応募し、経理課長として採用された。

40 歳半ば過ぎに業務管理部の創設を提言し、コンピュータシステムの開発に携わる。配置希望申告制度により、一時、営業部長に変わったが、再び管理部門に戻りコンピュータ化されているシステムの効率化に取り組んだ。その後、内部監査制度作りに取り組みそれを達成した。独自の内部監査システムを考案し、外部講師や大学の講師の依頼も受けるほどになった。定年前 2 年間は経理部長を務めたが、もはや挑戦するようなことはなく、自分にとっては遊んでいるに等しい仕事であった。定年を機にすっぱりと辞めるつもりであったが、いろいろと子会社の法律的な関係があり、その整理に半年くらいかかった。慰留もあったが、新しい仕事は全部断った。

仕事を全部整理し終えたときは、半年間くらい達成感と解放感を味わった。日の高いうちから繁華街をうろつくのは快感であった。その後は 1 年余り、家の建て替え、設計などに熱中した。定年退職時は趣味やボランティアなどやりたいことがいっぱいあったが、あれこれ手をつけて現役時代よりもかえって忙しくなってしまった。これでは自分を見失ってしまうと反省し、整理した。その結果、書道、短歌、歌謡曲、小論文が残ったが、自分は言葉に関することに興味があるという。しかし、それだけでは時間が余るので、観劇、コンサート、などあらゆる所を駆けずり回っている。首都圏の郊外で、妻と義母の3人で暮らしている。子どもたち 3 人もそれぞれ独立しているが、比較的近くに住んでいる。健康、経済、家族に恵まれて、今が一番、幸せであるという。

H氏は、定年後、仕事をすっぱりと辞め、趣味中心の生活を楽しんでいる。H氏がすっぱりと仕事を辞めた背景には、「どんな仕事も余人をもって替えがたい仕事などない」、「後進を育てるためには、先ず自らが辞めることだ」、という哲学がある。しかし、H氏のすっ

ぱり辞められた背景には、H氏の経済力があったことも見過ごすことはできない。H氏は子孫に財産を残すという考えはないというものの、2人の娘にはそれぞれマンションを買い与え、建て替えた自宅をゆくゆくは息子に譲るつもりである。しかも、遺産相続で困らないように、弁護士に相談して相続のための保険もかける予定である。また、H氏はストックだけでなく、フローの年金収入もかなり多い。

H氏は老いを生きる上で、過去からの自立、現在の自立、未来からの自立が大切であると考えている。特に、将来、老いて衰弱してきたときに自立を維持するためには経済力が必要であると考えている。H氏は自分や妻の介護が必要になったとき、子どもたちに介護を頼む気持ちはまったくない。長男が介護の意志をもっていることを嬉しくは思っているが、他人の介護を受ける予定である。そのためには、お金が必要であると考えている。

このようにH氏の生活は経済的に安定しているが、家族・親戚以外の人々とのつきあいはほとんどない。H氏は、幼い頃からあっさりしたつきあいできており、濃い人間関係は好きではないという。友人に限らず、夫婦でも、親子でも、兄弟でも、濃い人間関係は好きではないという。そうした人間関係の面ではやや寂しい印象もあるが、これがH氏の生き方である。

③H氏の生きがいの分析

H氏は、調査票では、現在、生きがいをもっているかの問に対して「前はもっていたが、今はもっていない」と答えている。健康、経済、家族に恵まれ、自分の好きな趣味を楽しんでいるようにみえるのだが、なぜ、今生きがいをもっていないと回答したのであろうか。H氏との話からうすうすわかってきたことは、H氏は非常に言葉を大切に考える人で、調査票では、挑戦しがいのある仕事に取り組み、それを達成し、会社や社会に貢献することを生きがいと考えており、この回答はそうした意味での生きがいを今はもっていないということであったようだ。定年前に 2 年ほど経理部長をしたとき、挑戦しがいのない仕事で遊んでいるに等しいと感じていたが、既にこのときH氏の考えるような意味での生きがいをもてなくなっていたということになる。

また、H氏は、「定年後はかくあるべし」などの「あるべき論」が多すぎるとして反発する。定年退職後の生活についてあまり考えない方がよいという。そのようにならなかった時、落胆が大きいからである。情報誌など、やれ趣味をもたなければいけないの、ボランティアだの、地域コミュニティだの、そんなものはうるさいと。「これが私の生きがい」などと意識している人の方がむしろ少ないという。そして、生きがいとは「生きていること」そのものであり、「生きていて、幸せを感じること」であるという。したがって、決して現在の生活を否定的にみているわけではなく、仕事をもたず、趣味三昧の生活を十分幸せだと感じている。ただ、それを生きがいだと意識はしていないということのようだ。

批判は、赤瀬川源平氏の「老人力がついた」や日野原重明氏の「老いは衰弱ではなく成熟である」などの考えにも及ぶ。H氏によれば、老いは老いであり、それを老いでないというのは言葉のレトリックであり、まやかしである。老いを老いとして受け止め、老いに

どう対応するかが問題であるという。

ともあれ、H氏自身はみずからを「幸せ人間」「おめでたい人間」といい、自分の人生の選択はすべて肯定できるし、今が幸せであるという。

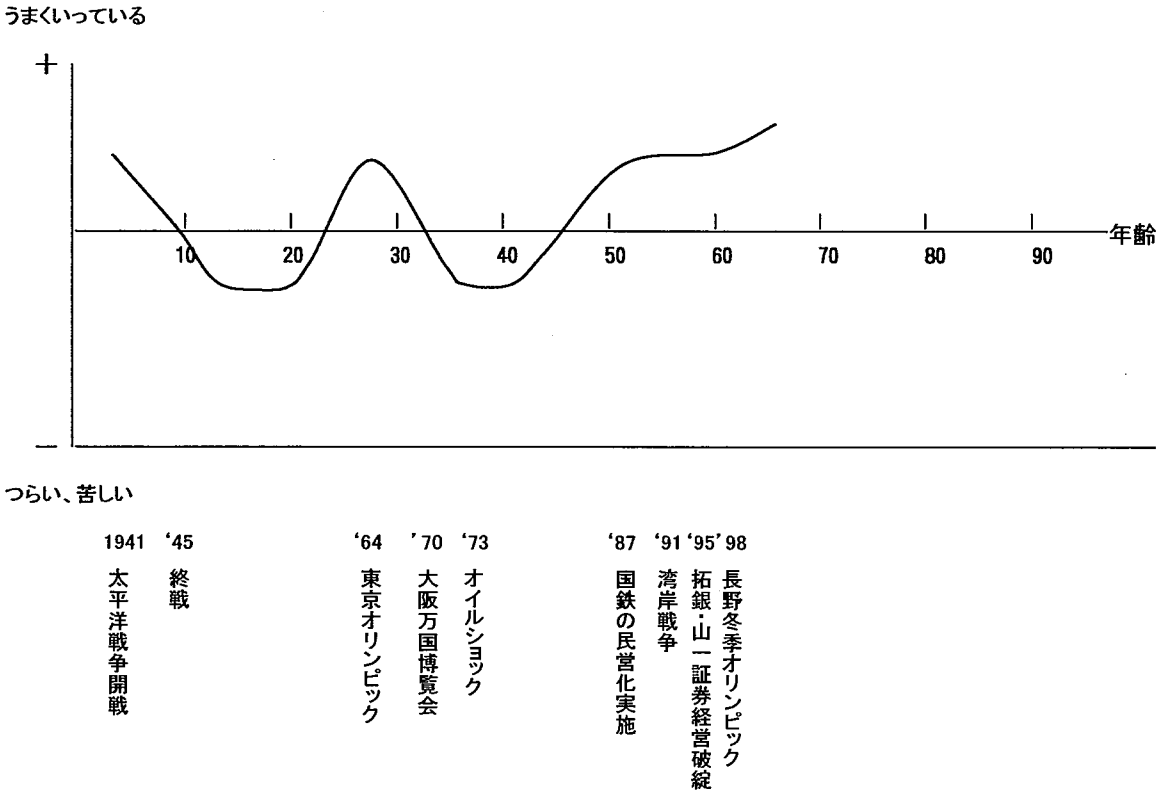
④H氏のコンボイの分析

H氏はコンボイ調査に対しては側面側面で違ってくるし、大切な人を序列化することはできないし、そうした意識はもっていないとして、回答されなかった。

⑤H氏のライフカーブの分析

5歳のときに父が亡くなって以降、経済的に苦しくなった。終戦後、外地からの引き上げ母の実家に身を寄せるが、肩身のせまい思いをした。学費を稼ぐため体を酷使し、肺結核にかかり学業を断念した。この頃がどん底であったが、その後、地元に就職し、上向いていく。経理部門に配属になったことは、その後の人生にとって運がよかったと思っている。しかし、30 歳過ぎる頃から、会社の将来に希望が持てなくなっていく。経理課長に抜擢されたが、希望退職に応じた。この頃から、再就職のあたりまでは低下していく。しかし、3度目の就職から上向きになり、40 歳代半ば過ぎに業務管理部門の創設を提案した頃からプラスに転じ、内部監査システム作りの達成でピークに到達している。さらに、定年後、緩やかに上昇しており、今が一番幸せと考えている。

図2－15 H氏のライフカーブ



2)定年離婚し、囲碁三昧の生活をしている例(I氏)

①I氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「心の安らぎや気晴らし」、「自分自身の向上」

・そのような生きがいの有無:「前は持っていたが、今は持っていない」

②I氏の生活歴と現況

60 歳代後半の男性。高卒後、6 年あまり家業を手伝っていた。その後、運送関係の企業に就職し、人事・庶務関係の仕事をしてきた。バブル頃から大卒を採用するようになり、高卒の悲哀を感じた。40 歳代半ば、子会社の管理職として出向した。トラック運転手相手の仕事であった。自分も含め、単身赴任者が 20 名ほどおり、寮生活であった。この頃から仕事仲間と碁を打つようになり、寂しさを紛らわすことができた。

定年退職の時、残ってくれと言ってくれると考えていたが、声がかからなかった。また、体さえよければ働きたかったが、定年直後、胆石の手術をした。手術後、心境の変化があり、ストレスをためずにのんびりいこうと考えるようになり、すっぱりと引退することにした。一方、単身赴任の時から妻との仲は悪くなっており、定年を機に離婚することになった。年金の手続きと同時に、離婚の手続きもした。妻も旅行業の仕事をもっており、財産の分与はない。ただし、子どもの結婚式には 2 人で一緒に出席し、結婚費用は折半した。

現在、首都圏で 1 人暮らしである。単身赴任の頃から、日曜や運休日には自分で食事を作っていたので、ある程度できる。ただし、糖尿病の持病があり食事制限をしている。定年退職と同時に離婚し、自由になったが、自由と孤独は背中あわせだと感じている。今は、碁中心の生活を送っており、碁が精神的な支えとなっているようだ。

③I氏の生きがいの分析

Ⅰ氏は大学への進学を希望していたが、高卒後、家業を手伝うことになった。後に企業に就職しサラリーマンになるわけであるが、大卒が幅をきかすようになり、高卒であることがコンプレックスになっていったようだ。Ⅰ氏は、40 歳代半ば子会社に出向することになる。単身赴任であったし、島流しにされたような気持ちであったろうと思われる。しかし、トラック運転手の多くは中卒で、学歴コンプレックスを感じずに付き合うことができ、精神的にはかえってよかったのかもしれない。とくに、仕事仲間との碁で、単身赴任の寂しさを紛らわすことができた。

他方、単身赴任の頃から、夫婦の溝は広がっていた。結局、定年を機に離婚することになったが、定年離婚はある意味で予想された出来事であったかもしれない。子どもの教育・自立を考えて、定年まで先延ばしにしてきたとみられる。Ⅰ氏は自分が学歴コンプレックスで悩んだせいか、子どもには有名大学を卒業させた。冠婚葬祭には一緒に出席することにしており、離婚後であったが、子どもたちの結婚式にはふたりで出席している。

しかし、定年退職し、離婚したⅠ氏を予期せぬ病魔が襲った。年金の手続き、離婚の手続きとストレスが続く中、胆石の手術をすることになった。手術後、心境の変化があり、

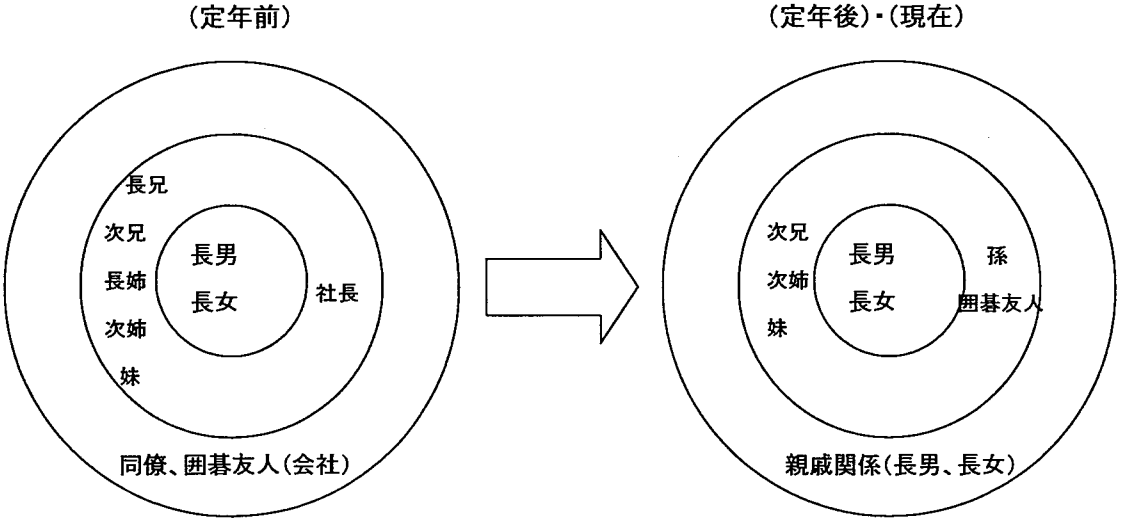
ストレスためずにのんびりいこうと考えるようになった。からださえよければ働きたがったが、糖尿病の持病もあり、妻も子どももそれぞれが自立しており経済的には心配ないので、すっぱりと引退することにした。

妻子と離れ離れの生活はすでに単身赴任で経験済みであったが、仕事からも離れて生活することは初めてのことであった。退職し、離婚し、これまでのしがらみから解き放たれ自由になった感じはあったが、反面、孤独であった。そうしたＩ氏の心のささえとなり、今、生活の中心になっているのは、単身赴任時代に習い覚えた碁である。健康を考えて、6～7 時には切り上げているが、昼食をすませてから 10 局くらいうつという。碁の休みの日に、検査や薬で通院している。また、戦記ものなどの書も楽しんでいる。

④I氏のコンボイの分析

定年前も定年後も、第１円には、長男と長女、２人の子どもたちが入っている。Ｉ氏の子どもたちへの愛情が表れている。Ｉ氏は学歴コンプレックスで悩んだせいか、子どもたちは 2 人とも大学を卒業させている。Ｉ氏にとっては、子どもたちが独立するまでは、子どもの教育がささえになっていたかもしれない。しかし、定年後はもとより、定年前も、妻は第 1 円どころか、どこにも入っていない。なぜ、そのようになってしまったのかについては不明であるが、Ｉ氏の気持ちは、定年前から既に妻から離れていたことが窺われる。第２円には、定年前、定年後を通じてきょうだいがきている。人数が違うのは、定年後、きょうだいが死別したためとみられる。孤独な印象のあるＩ氏であるが、きょうだいの絆は強そうである。また、定年前は、社長との絆があったようである。しかし、これは、定年退職と共に消えている。それに代わって、定年後は、２人の子どもの孫たち、そして、囲碁の友人が入ってきている。碁の友人が、大きな心の支えとなっていることがわかる。第３円には、定年前は、同僚、囲碁の友人、同業者など仕事の仲間、関係者があがっているが、定年退職と共に消えている。それに代わって、定年後は、長男・長女の親戚関係を挙げている。妻とのつながりは一切断っているようであるが、子どもとのつながりは保持していこうとしている様子が窺われる。

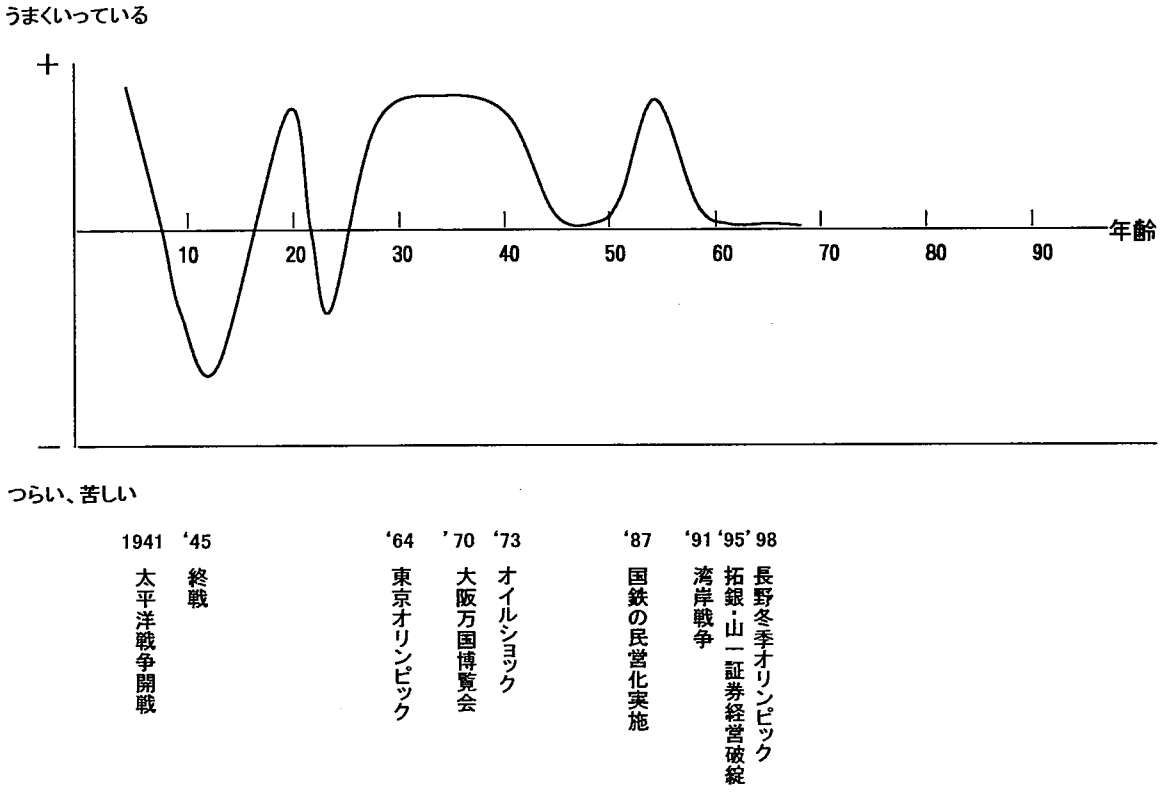
図2－20 コンボイ調査：定年前後の人間関係の変化（I氏）



⑤I氏のライフカーブの分析

10 歳頃にかけて低下してマイナスになっている。学業面でつらい思いをしたかもしれない。家業を手伝い、割と順調に伸ばしていくが、23 歳頃に辞めて上京する。中小企業に勤めて、高卒ながらも頑張って働き、管理職の地位までつく。子会社に移り、島流しの心境を味わう。公私共につらい時期であった。碁が救いであった。しかし、それなりによく勤めて退職した。退職と同時に離婚、手術が待っていた。その後は、働く気持ちがなくなり、ストレスをためずにのんびりいこうという気持ち持ちになる。からだを大切にしながら、碁中心の生活を送っている。可もなく不可もなく。

図2－21 I氏のライフカーブ



iii）現在、生きがいをもっていない事例

１）定年後、仕事のない生活のむなしさを覚えている例（Ｊ氏）

①J氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味：「生きる喜びや満足感」、「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」

・そのような生きがいの有無：「持っていない」

②J氏の生活歴と現況

60 歳代後半の男性。大学を出て、建設業の会社に入り、経理・労務関係及び現場の仕事に従事した。40 歳代には管理職になり、我武者羅に働いた。50 歳代に、社会保険関係の業務に移動し、両親の介護も重なって、やや落ち込んだ。しかし、その業務に習熟したことが定年後の嘱託としての残留につながった。給与は半減近くなったが、業務全般を任せられ、それなりに充実していた。65 歳で退職し、妻と海外旅行をしたり、前からの趣味であった登山とカメラのほかに、地域の趣味のクラブに入って、詩吟、書道など趣味を始めた。以前、退職準備教育でアドバイスする立場にあったが、現実にその立場に立つと、地域への溶け込みなど思い通りにはいかず、ふとむなしさを覚えるときがある。定年退職時には比較的スムーズに移行できたのであまり考えずにきたが、65 歳で退職してみて初めて、いかに会社中心の生活をしてきたかを感じている。妻とＯＬの娘３人で首都近郊に 40 年来暮らしているが、地域・近隣との交流はほとんどない。厚生年金と企業年金で経済的には安定している。健康状態も注意する点はあるが、とくに支障はない。配偶者も健康である。

Ｊ氏は、70 歳代前半までは充実した人生を送りたいと考えている。人生を十分に楽しみたいという。しかし、趣味であれ、地域活動であれ、充実感を味わうためには、それなりの努力が必要であるということも認識している。積極的に挑戦し、自分にあったものを早く見つけたいとも思っている。

③J氏の生きがいの分析

Ｊ氏は、生きがいの対象として家族を挙げているが、会社中心の生活をしてきたＪ氏はマイホームタイプではない。子どもの教育や両親の介護はおそらく妻任せであった。家事も分担していない。自分の介護は妻に任せたいと思っている。そうした面では妻を頼りにしているが、あまりお互いに気を使わない、干渉しない立場を貫いている。海外旅行や国内旅行などは妻と一緒に行くこともあるが、それ以外はほとんど別行動である。娘には早く結婚してもらいたい気持ちと、しっかりした相手でないと結婚させたくない気持ちが葛藤しているようだ。

Ｊ氏はアウトドア派で、登山や写真が趣味であったが、最近、詩吟や書道を始めた。退職後、自由と解放感を味わったが、最近、仕事のないむなしさを覚えることが多くなった。名刺がないこと、定期券がないこと、馴染みの飲み屋がないことで惨めに感じるときがあるという。人に会うとき名刺がないのは具合が悪いということで、最近、名刺を作った。

それには「人生気ままに、自遊人」とあった。しかし、いくらとりつくろっても、J氏の生きがいの意味は現役の充実感に近いので、趣味やそれを通じての個人的友人からは生きがいを感じることができない。J氏は、仕事や会社の夢をみることがあるという。夢の内容は決して楽しいものではないようであるが。今回の面談には背広できたが、ネクタイを締めると気持ちまでがピシッとするという。他方、朝、現役の方たちが急ぎ足で会社へ行くのを見ると、社会から取り残されたようなむなしさを感じるという。詩吟や書道を始めた背景にはそうしたむなしさを埋め、精神統一をはかりたいという願望があるようだ。

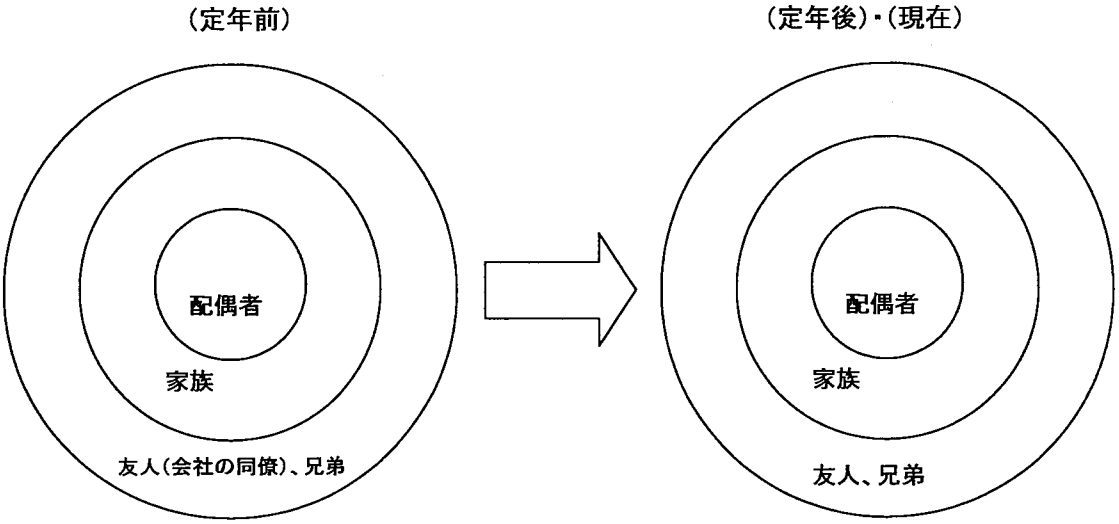
60 歳の定年退職時には嘱託としてスムーズに残留できたために、さほど定年ショックを味わうことなくきたが、退職した今、仕事のないむなしさ、喪失感をしみじみと感じている。退職準備教育の仕事にもかかわってきたため、退職後に何が重要か、知識としてはいろいろともっているが、実際、再就職や地域への溶け込みなどなかなかその通りにはならないと感じている。仕事につきたいという気持ちはあるが、適職がないと感じている。また、長期間、長時間通勤族をしていると地域に溶け込むチャンスがないという。趣味や地域社会での活動などもいろいろと好奇心はあるが、ライフワークといえるような充実感を感じるものに出会えず、生きがいは獲得できていない。まだ、新しい名刺通りに人生のんびり気ままな自遊人とはいかないようだ。趣味がJ氏の生きがいとなるには、J氏の生きがいの意味づけを新たな方向へ変えていく必要があるかもしれない。

J氏は、仕事のないむなしさを埋めるべく、何か精神的なよりどころを求めているようである。それが、詩吟や書道への気持ちとして出ているように思われた。しかし、J氏のむなしさは、退職後の自由や解放感を味わった後に、誰しも大なり小なり感じるもので、それほど深刻ではないと思われる。徐々に生活の変化になれ、自分らしいライフスタイルをみいだして、精神的にも安定していくのではないかと思われる。

④J氏のコンボイの分析

退職前も退職後も、一番大切な人として妻をあげている。会社中心の生活をしてきたJ氏は、妻との交流は定年後もあまり密ではない。しかし、50 歳代、人事異動や両親の介護で大変だったときに、妻が楽天的で慰められたことなど、妻への感謝の念は抱いており、妻を頼りにしている。また、妻に続く人物として娘を愛している。父親としてひとり娘の結婚に対しては複雑な思いもあるようである。両者に対する気持ちは、退職によって変わっていない。他方、第3円に友人ときょうだいが挙げられているが、このうち友人が、退職前は会社の同僚という注が入っていたのが、たんなる友人と換わっている。長時間通勤族の場合、会社の友人とは日々に疎くなるようである。

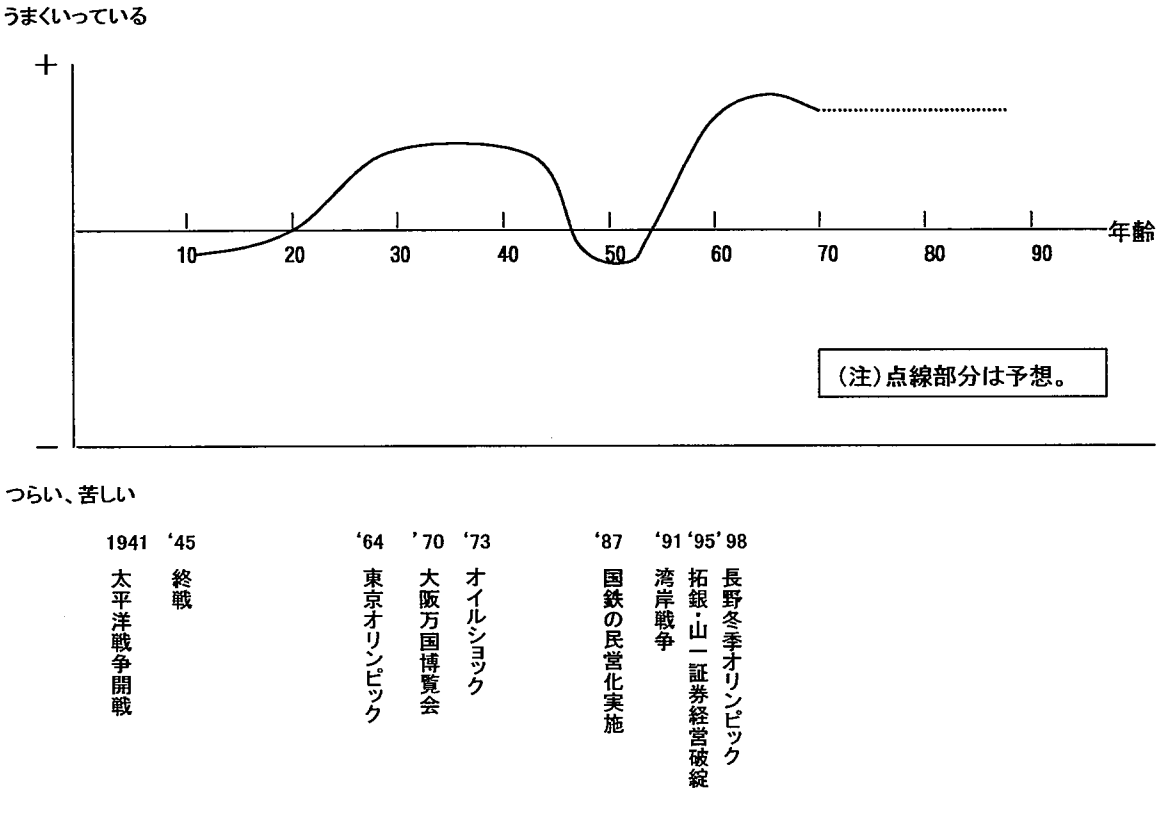
図2－22 コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(J氏)



⑤J氏のライフカーブの分析

20代から30代にかけて上昇し、40代後半にかけてピーク状態を維持するが、40代後半から50代前半にかけて人事異動や両親の介護、自身の病気(潰瘍?)などで下降し、50代前半がどん底、その後回復し、新しい業務につき働きがいを得て一生懸命になる。前のピークよりもむしろ高いくらいの充実感を味わう。しかし、退職し直後は自由や解放感を味わいハッピーであったが、現在はややむなしさ、無力感を感じている。今後、上昇する見通しはまだなさそうであるが、努力したいと述べている。

図2－23 J氏のライフカーブ



2)定年後、異性との交流がはりあいになっている例(K氏)

①K氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」

・そのような生きがいの有無:「持っていない」

②K氏の生活歴と現況

60 歳代後半の男性。大学卒業後、1 年間就職浪人をし、つらい思いをした。不動産関係の会社に就職し、リゾート地やゴルフ場の用地買収を担当した。ワンマン体質の会社のなかで衝突などもあり、出世コースからは外れた。成り行きに任せる考え方になっていったようだ。30 歳代後半には経理課長になる。40 歳代はマンションの販売に従事した。また、1年間、造園関係へ出向したとき、サラリーマンの悲哀を感じた。50 歳代は、ゴルフの会員券の販売を担当した。かなり景気が悪くなり、定年を迎える頃、人事から勤務の延長はないといわれた。

ハローワークで自分のできる仕事が見当たらず、考え方を変えて遊ぶことにした。妻もそれなりに収入があり、経済的な不安はなかった。為替差益などの儲けがあり、定年後、海外旅行を何度もした。最近は、体力維持のためにテニスをしたり、ダンスを楽しんだり、飲み友達もできた。そんななかで女性との交流も多く、はりあいになっている。妻は華道や大正琴、育児ボランティアなど、自分とは趣味が違い、お互いに別な生き方をしている。自分が女性と付き合うことについては、ある程度容認している。

首都圏郊外に妻と2人で暮らしている。長女、長男は結婚独立し、それぞれに孫がいる。比較的近くに住んでいるので、時折、訪ねていく。

③K氏の生きがいの分析

仕事があった頃、生きがいがあったかというと、?である。定年の頃の会社の冷たい対応に対しても、ある意味でさめた感じで受け止めていると思われる。定年後、自分のやれる仕事がないな、と感じた時点で、考え方を変えた。よく毎日が日曜日が苦痛であるという話もあるが、一向そういう気にならないという。生活リズムは定年前と変わらない。何のために生きているか、あまり意識したことはない。調査票の生きがいを持っているかの問に対しては、「持っていない」と回答している。しかし、不幸ではない。自由、なんでもできる今がハッピーだという。

定年後、運動不足が気になり、多少昔やったことのあるテニスと社交ダンスをはじめた。テニスはコーチについて週2回、社交ダンスはコーチについて週1回、自分たちで1回の割合である。テニスは動体視力が低下し、速い球が苦手のようだ。ゴルフ場の開発はしたけれども、自分ではゴルフはしないようだ。スナックなどに出かけることもあり、飲み友達もできたという。本音で言えば、今、お付き合いしているガールフレンドが生きがいであり、癒されるという。

女性から、年齢より若く見られていることが、ひとつのはりあいになっているようだ。

元気であるべきだ、という信念をもち、体力維持に努めている。また、おしゃれが楽しいというのも女性の影響とみられる。いろいろな女性と付き合うことに関しては、妻もある程度、公認のようである。

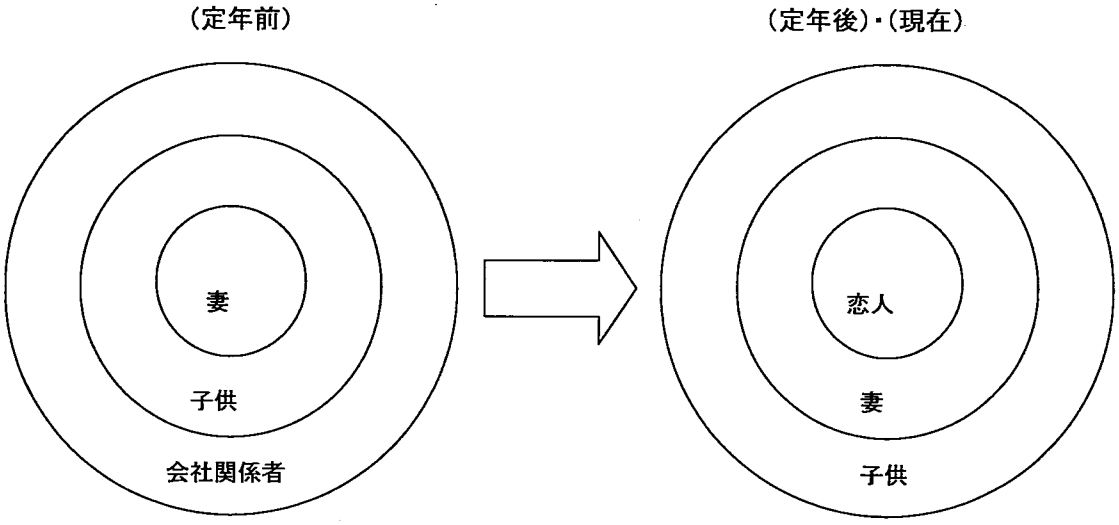
妻とは海外旅行や公園を2人で歩いたりということはあるが、それ以外は、お互いに別々の行動している。妻は、お花を教えたり、大正琴、育児ボランティアなどをしたりで忙しく、1週間の半分以上、留守である。電話の90%は妻の関係であるという。

④K氏のコンボイの分析

定年前は、もっとも大切な人として妻を選んでいる。その次が子ども、3番目に会社関係者がきている。あまり会社人間ではなかったというK氏の言葉を裏付けるようなかたちになっている。しかし、定年後は、第1円に妻ではなく、恋人の女性を入れている。この女性は、50 歳代で仕事をもち独身であるようだ。第2円に妻がきている。第3円に子どもが入り、会社の関係者は消えている。

彼女との出逢いは、妻がそれをどのように思っているのか不明であるが、コンボイから推察するに、今は、妻よりもむしろ大切な人である。しかし、妻もその次に大切な人としてあげており（子どもよりは順位が高い)、妻ともつかず離れずの関係を維持しようとしているように思われる。

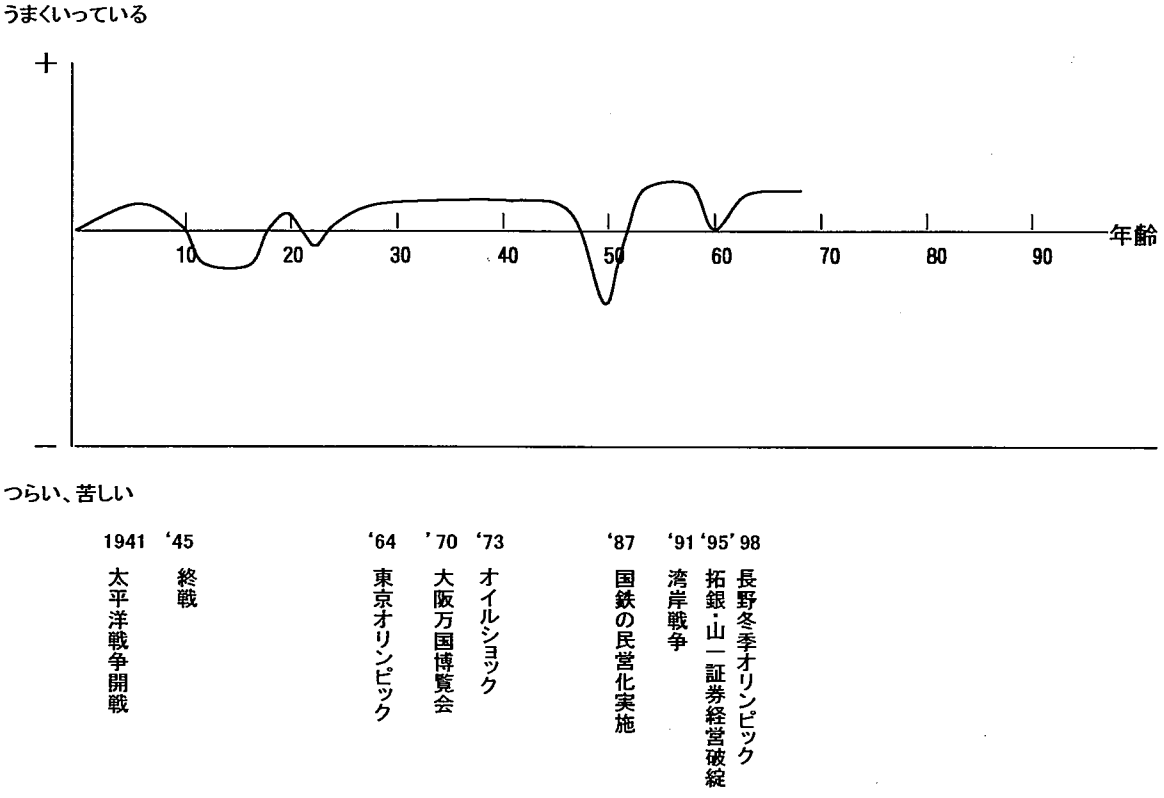
図2－18 コンボイ調査:定年前後の人間関係の変化(K氏)



⑤K氏のライフカーブの分析

子どもの頃はめぐまれていたとみられるが、10 代はややつらい状況もあったようだ。大学在学中はよかったが、就職浪人のときはつらい思いをしたようだ。就職してからは、それほど大きな高揚感を味わうことはなく、まずまずの状態が 50 歳ころまで続いた。しかし、50 歳頃、造園業に出向した折に悲哀を味わっている。その後、ゴルフ場の営業に戻り、充実感を取り戻す。しかし、定年時の会社の対応に冷たさを味わうが、現在は、それなりにハッピーな状態を保っている。

図2－19 K氏のライフカーブ



ⅳ)現在、生きがいをもっているか、もっていないか、わからない事例

1)ゼロから出発し、与えられた条件の中で極めることを大切にしてきた例(L氏)

①L氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「生きる喜びや満足感」、「自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること」

・そのような生きがいの有無:「わからない」

②L氏の生活歴と現況

60 歳代後半の男性。家業が倒産し、大学は出たもののゼロからの出発であった。素材メーカーに入社し、1 年ほど経理・原価計算を担当した後、健保関連の仕事を 3〜4 年経験した。その後は定年までずっと人事関係を歩いてきた。30 歳代、オープンな評価を始め、新しい人事システムの開発に取り組んだ。30 歳代後半から部下もでき、40 歳代はプレーイング・マネージャーとして活躍した。50 歳代は事業部の人事を担当し、工場・研究所の人事・労務業務に携わった。

60 歳で定年を迎えたが、ここで引退する気はまったくなかった。失業保険をもらいながら、ハローワークに 1 年間通ったが、やりたい仕事はほとんどなかった。1 年後、マンション管理人となり、3 年勤めた。トラブルもなく比較的おだやかな仕事であった。その後、長年勤めた会社から、仕事をやってみませんかと声が掛かった。現役の人では、やりにくい業務でもあり、採用業務の長い経験を活かせる自分が選ばれたのかな、と思っている。65 歳で打ち切りであったが、まさかやれるとは思っていなかったので、うれしかった。

その後は、半年ぶらぶらしていたが、別のルートから、特殊な学校の生徒募集の仕事が入ってきた。時間給であるが、人事のときの学校訪問の経験が役に立っているという。仕事は探すとないが、向こうからやってくるものだという。

現在は、首都圏に妻、長女(社会人)と暮らしている。次女は、結婚独立している。まあ健康で経済的にほどほどであるという。

L氏は、60 歳代という感覚はない。自分は 50 歳代だと思っている。老いについては考えたくないし、老人だと思っていない。体が動かなくなることへの不安、恐怖感はあるが、きちんと老いと向き合っていない。医者に行かなければいけないが、恐くて行かない。自分の介護を誰に頼むか、考えたくない。病院にも入りたくない。ほっといてほしいという。子どもに迷惑はかけたくない。子どもが介護のために仕事を辞めるようなことになったら最悪である。迷惑のかからない長生きを望んでいる。

③L氏の生きがいの分析

L氏は、なんとか大学は卒業し、就職したものの、家業が倒産し、ゼロからの出発となった。失うものもなく、生来のんきな性格で、開き直れたという。自分で自分のものを稼いでいくと考えた。家業が倒産し、家財道具全部差し押さえられた時、飛んできて親身に対策を考えてくれたのは、近所の「やくざの兄さん」と、碌に声をかけたこともないおっ

かない「おばさん」だった。つくづく人は見かけによらないと思った。この経験が、その後の人事管理における人を信ずる考え方に少なからず影響を及ぼしているとみられる。

Ｌ氏は、自分のものは、仕事の場で獲得していくよりなかったわけであるが、自分を鍛えるものは職場にあると教えられた。それによれば、職場は自分を鍛えてくれる道場である。今の若い人は、自分の好みを主張するが、それに対して、Ｌ氏は、自分の与えられる仕事の中でどう極めるか、与えられた条件の中で自分をどう磨いていくかが課題であり、その中に喜びがあるという。

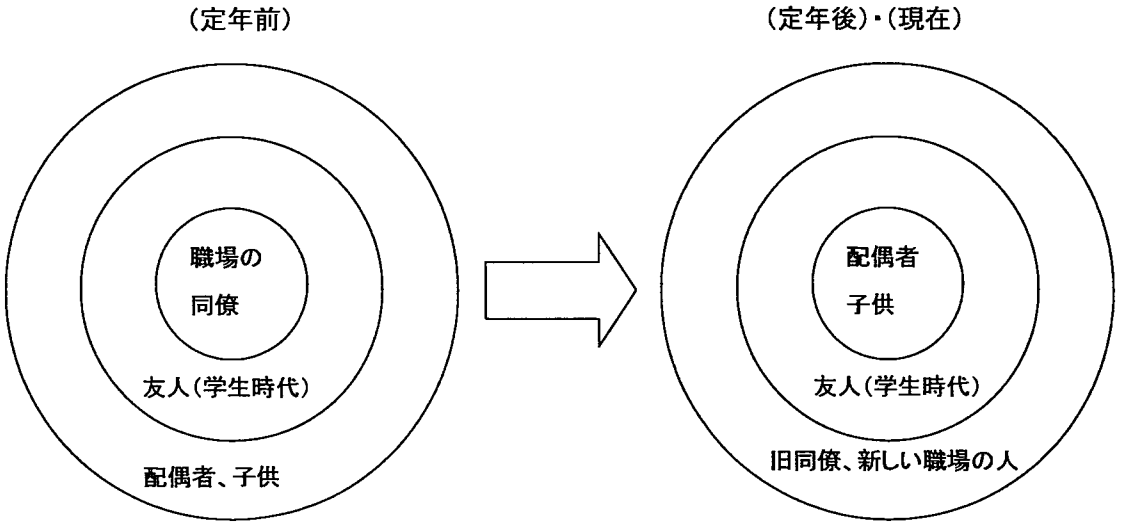
そういうＬ氏であるので、生きがいを生きる喜びや満足感、あるいは自己実現としてとらえている。そのため、定年後の仕事については、小遣い稼ぎと割り切っており、生きがいと呼べるようなものとは思っていないようだ。調査票の現在、生きがいをもっているか、の問に対して、「わからない」と答えている。迷ったが、結論はでないという。むしろ、今は、仕事よりも、定年退職の5～6年前に会社の仲間とやっていた陶芸で内面的に充実感を満たしているようだ。陶芸をやっているときは、余計なことを考えなくてよいという。夏の暑いときにも、暑さを感じないという。

また、Ｌ氏は肢体補助装具（ギブス）を使用した経験があり、補助道具が身体にぴったりフィットしない事が多いことから、装具を使用する人と、装具を作成する技師との橋渡し、少しでも使う人の痛みを和らげるような仕事に就きたいと言う夢を持っている。そうした活動を行っているＮＰＯなどと連絡をとりたいと思っている。

④L氏のコンボイの分析

定年前のコンボイを見ると、第１円には、職場の同僚が入っており、定年前は仕事・会社を中心に展開されていたことを如実に示している。第２円には学生時代の友人、そして第３円に配偶者と子どもが入っている。家族よりも友人との交流を重視している点も注目される。そんなＬ氏であったが、定年後は逆転している。第１円には、配偶者と子どもが入っている。第２円には学生時代の友人、第３円に旧同僚、新しい職場の人々が入っている。しかし、社会活動の関係はまったくなさそうだ。

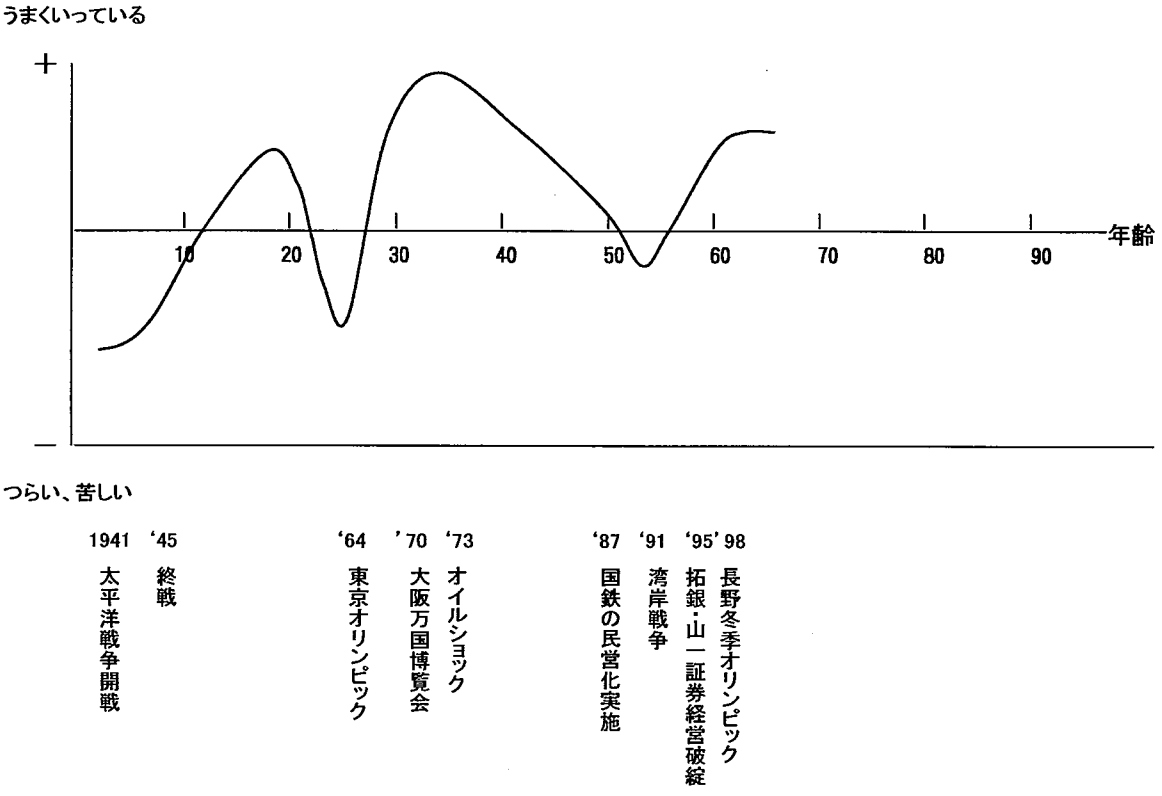
図2－16　コンボイ図：定年前後の人間関係の変化（L氏）



⑤L氏のライフカーブの分析

子どもの頃は、理由はよくわからないがあまり幸せなイメージではない。10 歳代、大学に入る頃までは上昇し、小さなピークになっている。しかし、家業の倒産により、一転、急激に低下し、大学を卒業し、就職したての頃まではどん底状態であった。その後、上向き、30 歳代、評価や、新しい人事システムの開発の仕事に思い切り打ち込んだ時代が第2のピークである。その後、プレーイング・マネージャーになっていくが、下降線をたどっている。50 歳代前半、工場・研究所と本社を往来し、事業部の人事を担当していた頃、再び底をうち、50 歳代後半から仕事が変わり、上昇していく。定年後もその水準が保たれているとみられる。生きがいをもっているかわからないというL氏であるが、いまの生活を肯定的に受け止めているようだ。

図2－17 L氏のライフカーブ



2)定年後、実家の畑で果樹の栽培をしたいと考えている例(M氏)

①M氏の調査票への回答状況

・生きがいの意味:「生きる喜びや満足感」

・そのような生きがいの有無:「わからない」

②M氏の生活歴と現況

50 歳代前半の現役の女性。短大を卒業後、自動車関係の会社に就職、人事関係に配属になった。女子社員教育の立ち上げに関わった。10 年くらい経過した頃、上司の紹介で、同じ会社の技能工の役職の人と結婚した。以来、共働きを続けている。結婚と同時に、M氏は工場に部品を供給する部署の事務所に変わった。効率よく部品を詰められる入れ物を決めるのが課題だった。夫も 6〜7 年後、セールス関係に変わったが、そこで体調を壊して、現場の役職には戻れなくなってしまった。その後、夫は生産をコントロールする部署のソフトウェア関係に変わった。M氏は、その後、研究開発部門の生産管理的な仕事に就いている。

夫は定年が近づいているが、会社の方針と折り合いがつかず、早く辞めたがっている。しかし、辞めて何をするかは、特に考えていないようだという。M氏は、定年までにはまだしばらくあり、最近、会社も変わってきたので頑張る余地があるか考えるときがあるという。しかし、短大卒の女性の昇進の可能性は薄く、多分このまま定年まで行きそうだとみている。

首都圏郊外に夫と 2 人で暮らしている。子どもはいない。家事は分担している。2 人とも健康で、経済的には余裕がある。近くにM氏の実家があり、定年後はその一角に家を建てる計画をもっている。また、M氏は、実家の畑で果樹の栽培をしたいと考えている。

③M氏の生きがいの分析

M氏は、これまで確たる生きがいをもったことがない。20 歳すぎから何か確たるものを探さなくてはと思いつつも、ずるずる来てしまったように感じている。仕事も結婚生活も、いまひとつ確たるものが得られていないように感じている。

実務のベテランにはなったけれど、これでよかったのか、ほかにやりようがあったのではないかと自問している。何か確たるものがあれば、定年後もそれを続けたいが、そうした確たるものはない。

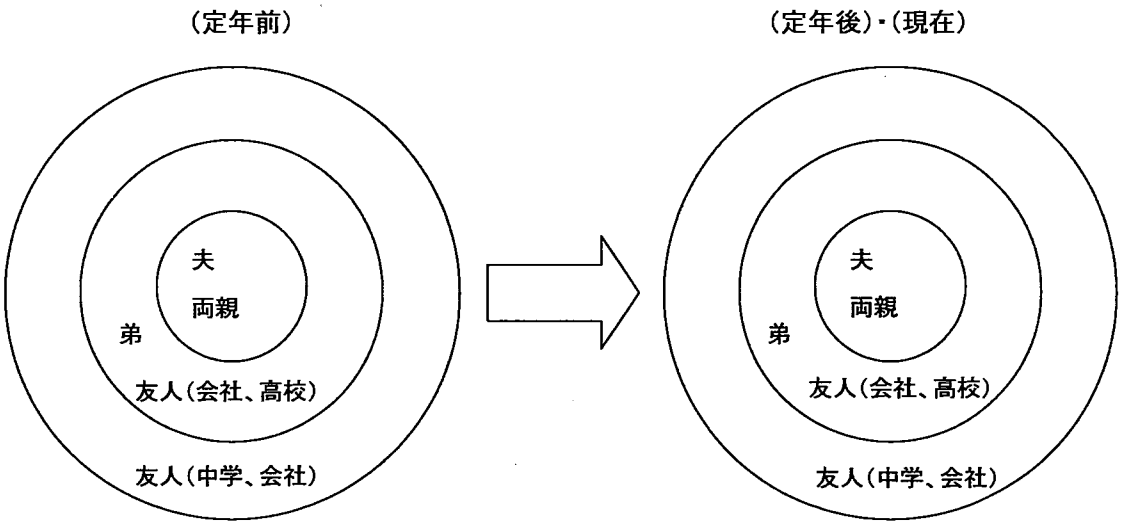
夫婦関係もやや希薄であるように感じた。夫よりも本人がさめているように思われる。自分は短大卒であるのに対し夫が中卒であること、夫が体調を崩して降格されて以降、仕事にやる気をなくしていること、子どもがいないことなどが影響しているのかもしれない。

M氏は、定年後、実家の庭先に家を建て、両親の面倒を見ながら、果樹の栽培をしたいという夢をもっている。しかし、両親や弟との折り合いをどうつけるのか、農業経験がなくて果樹栽培が可能か、夫の協力が得られるのか、いろいろ課題が残されている。そうした現実を直視し、実現可能性を探っていくことが大切である。

④M氏のコンボイの分析

第 1 円には夫と両親が入っている。第２円には弟と会社や高校の友人が入っている。第３円には、中学や高校の友人が入っている。現在、現役であるので定年後は予想であるが、多分、変わらないと予想している。

図2－24 コンボイ図:定年前後の人間関係の変化(M氏)

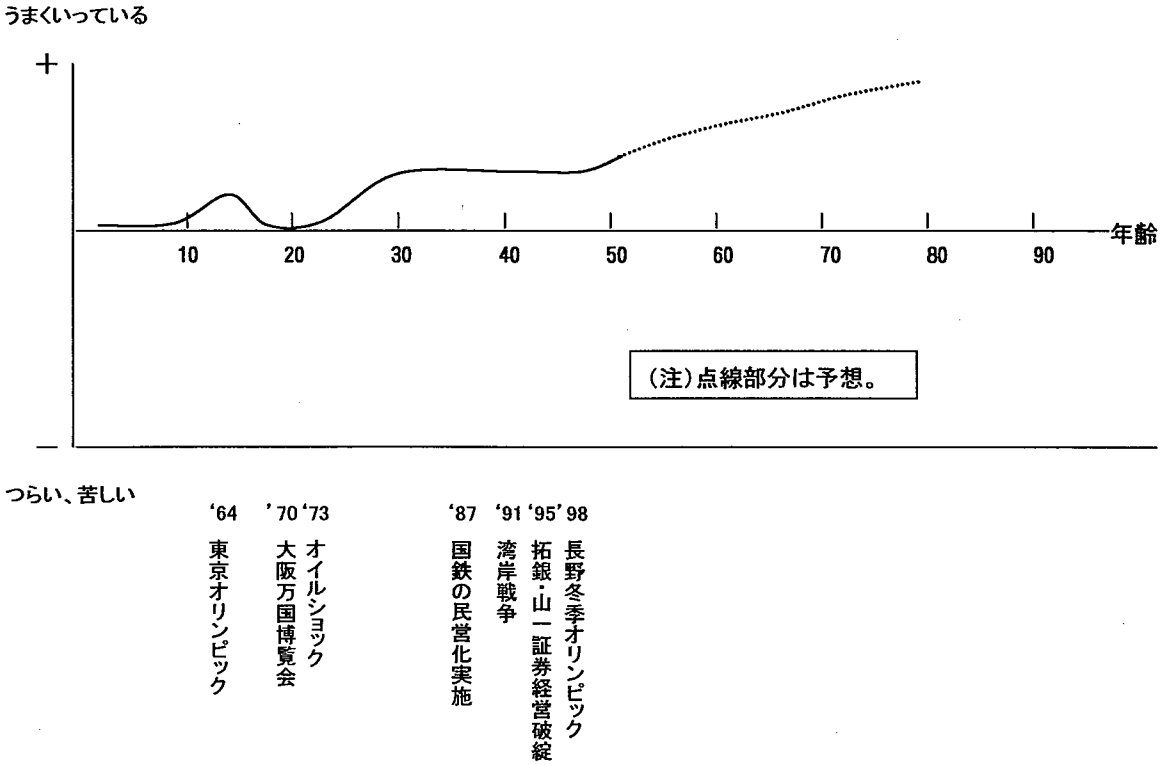


⑤M氏のライフカーブの分析

子どもの頃は可もなく不可もなく、中学時代は楽しかったようだ。高校でやや落ちこぼれであった。短大も友達がいないなど、さほど充実感はなかった。仕事についてから、徐々に上向いていく。30 歳過ぎに結婚し、以後、安定している。

50 代はこのまま推移し、定年後はさらにハッピーな人生をイメージしている。

図2－25 M氏のライフカーブ



参考文献

東清和　1999　『エイジングと生きがい』　東清和（編）「エイジングの心理学」早稲田大学出版部　Pp.131-168.

Baltes, P. B. & Nesselroad, J. R. 1979 History and rationale of longitudinal research. In J. R. Nesselroad & P. B. Baltes (Eds) Longitudinal research in the study of behavior and development. New York: Academic Press Pp.1-39.

石村貞夫　2001　ＳＰＳＳによるカテゴリカルデータ分析の手順　東京図書 pp.140-155.

岩淵千明　1997　あなたもできるデータの処理と解析　福村出版.

Kahn, R. L.　&　Antonucci, T. C.　1980 Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In P. B. Baltes & O. G. Brim, Jr. (Eds) Life-span development and behavior, Vol.13, New York: Academic Press. Pp.253-286.　（高橋恵子訳　1993　生涯にわたる「コンボイ」―愛着・役割社会的支え　東洋・柏木恵子・高橋恵子編集・監訳　生涯発達の心理学　２：気質・自己・パーソナリティ　新曜社 pp.33-70.）

古谷野亘　2003　『サクセスフル・エイジング』　古谷野亘・安藤孝敏（編著）「新社会老年学」pp.141-163.

Larson, R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33:109-125.

Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A reversion. *Journal of Gerontology*, 30:85-89.

Meulman, J. & Heiser, W. 2001 SPSS Categories 11.0 SPSS pp.183-196.

Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S. 1961 The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, 16:134-143.

シニアプラン開発機構　1992　第１回　サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして

シニアプラン開発機構　1993　第１回　サラリーマンの生活と生きがいに関する調査:第２次調査

シニアプラン開発機構　1993　生きがいに関する研究会　最終報告書―サラリーマンシニアの生きがい創造に向けて

シニアプラン開発機構　1997　第２回　サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして

シニアプラン開発機構　2002　第３回　サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして

財団法人シニアプラン開発機構は…

厚生労働省、厚生年金基金連合会および民間企業の協力により昭和62年11月に設立された財団です。当財団では、おおむね50歳以上の企業在職者および企業退職者の方々を＜シニア＞と位置付け、豊かな人生経験を持ち、広範な分野で活躍できるこの年代の方々がその持てる力を活かして、充実したシニア生活を送るためのシステム＜シニアプラン＞を企画開発し、社会に提案しています。

【主な事業】

○サラリーマンの生きがい、社会活動、生涯学習等の研究
○年金生活設計（PLP）セミナーの研究開発
○企業福祉に関する調査研究
○シニアプランフォーラム等、豊かなシニアライフに向けた啓発活動

「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」の

フォローアップ調査

平成15年11月

財団法人シニアプラン開発機構

東京都新宿区西新宿　4－34－1　東京年金基金センター2階

TEL:　03－5371－2022（代表）

FAX:　03－5371－2100